

**土地分類基本調査（土地履歴調査）  
説明書**

**大阪東南部**

**5万分の1**

**平成25年3月**

**国土交通省 国土政策局 国土情報課**

# 土地分類基本調査（土地履歴調査）説明書「大阪東南部」

## 目 次

はじめに

1	調査の概要	1
1.1	調査の目的	1
1.2	調査方法及び成果の概要	1
1.3	調査実施体制	2
2	調査地域の概要	3
2.1	地域の位置	3
2.2	地域の行政概要	3
2.3	地域の特性	6
3	調査地域の地形及び土地の開発、保全及び利用との関係	9
3.1	地形概説	9
3.2	地形細説	12
3.3	地形と土地の開発、保全及び利用との関係	17
3.4	地形と災害及び保全との関係	20
4	土地利用の変遷の概要	21
4.1	過去の土地利用状況の概要	21
4.2	土地利用変遷の概要	30
5	調査地域の災害履歴概要	37
5.1	災害履歴概説	37
5.2	災害履歴詳説	39
6	調査成果図の見方・使い方	43
6.1	地形分類図	43
6.2	土地利用分類図	46
6.3	災害履歴図	46
6.4	成果図面の使い方	47
7	引用資料及び参考文献	49
7.1	引用資料	49
7.2	参考文献	51

資料 災害年表

はじめに

国土交通省国土政策局では、国土調査の一環として、全国の都道府県と協力して「土地分類基本調査」を実施し、5万分の1地形図を単位に、土地の自然的条件（地形、表層地質、土壌）等について調査した結果を、調査図及び調査簿として整備・提供してきました。

近年、集中豪雨や大地震の多発により、毎年のように水害や地盤災害が発生していますが、これらの災害の中には、土地本来の自然条件を無視した開発や利用に起因するものもあり、土地の安全性に対する関心が高まっています。

このため、平成22年度から新たな土地分類基本調査として、地域ごとの土地の改変履歴や本来の自然地形、過去からの土地利用変遷状況、自然災害の履歴等に関する情報を総合的に整備し、土地の安全性に関連する自然条件等の情報を、誰もが容易に把握・利用できる土地分類基本調査（土地履歴調査）に着手しました。

この「大阪東南部」図幅の調査成果は、近畿圏地区の土地分類基本調査（土地履歴調査）の1年目の成果として、平成24年度に実施した調査の結果をとりまとめたものです。本調査成果については、行政関係者や研究者等の専門家だけでなく、学校教育・生涯学習・地域の活動等に取り組む団体や住民の方々、居住地域の地形状況を知りたい方、新たに土地の取引をされようとする方々、不動産の仲介・開発等に関係する企業の方々、その他地域の自然環境、土地利用、災害等に関心を持つ方々等に、幅広く利用していただきたいと考えています。

最後に、調査の実施にあたり終始ご指導をいただいた地区調査委員会の皆様をはじめ、ご協力をいただいた関係行政機関等の方々に深く感謝申し上げます。

平成25年3月

国土交通省 国土政策局 国土情報課

# 1 調査の概要

## 1.1 調査の目的

本調査は、自然災害等に対する土地の安全性に関連して、土地本来の自然条件等の情報を誰もが容易に把握・活用できるように、過去からの土地の状況の変遷に関する情報を整備するとともに、各行政機関が保有する災害履歴情報等を幅広く集約し、総合的な地図情報として分かりやすく提供することにより、災害等にも配慮した土地取引、災害時の被害軽減、被災しにくい土地利用への転換を促すなど、安全・安心な生活環境の実現を図ることを目的とする。

## 1.2 調査方法及び成果の概要

これまでの土地分類基本調査の調査項目に加え、土地の開発等により不明となった土地本来の自然地形や改変履歴等を明らかにするとともに、過去からの土地利用変遷情報を整備し、災害履歴情報を編集するため、主に次の方法により以下の土地状況変遷及び災害履歴情報からなる調査成果を作成した。

調査成果図は、概ね縮尺5万分1の精度で編集し、同縮尺の地形図を背景図として地図画像（PDF ファイル）を作成した。

### (1) 調査方法

土地状況変遷情報は、5万分の1都道府県土地分類基本調査成果や国土地理院作成の土地条件図等既存の地形分類図、明治以降に作成された旧版地図、昭和20年頃の米軍撮影空中写真、最新の空中写真等を活用して作成した。

災害履歴情報は、地方公共団体や関係行政機関等が調査した水害、地震災害等の現地調査図等の資料より編集した。

### (2) 本調査による調査成果

#### ① 土地状況変遷情報

##### i. 自然地形分類図

土地本来の自然地形である山地・丘陵地、台地、氾濫原低地、自然堤防、旧河道、湿地、三角州・海岸低地等に分類した図である。なお、現況の人工改変地にあつては改変前の自然地形を復元し分類している。

##### ii. 人工地形分類図

人工改変地を埋立地、盛土地、切り盛り造成地等に分類した図である。なお、本調査成果図では、人工地形及び自然地形を重ねて「人工地形及び自然地形分類図」にまとめて作成している。

##### iii. 土地利用分類図（2時期分）

明治・大正期（現在から概ね120年前）と昭和40年代（同概ね50年前）の2時期の土地利用状況を復元し分類した図である。

#### ② 災害履歴情報

##### i. 災害履歴図

浸水状況、地震被害等の既存資料図を基に、被害分布等の図にとりまとめて編集し

たものである。

ii. 災害年表・災害関連情報

年表形式の災害記録、災害に関する文献情報等を取りまとめたものである。

③ 調査説明書

調査成果図等の利用の参考とするため、本説明書を作成している。

④ 調査成果図 GIS データ

各調査成果図の GIS データを作成している。

### 1.3 調査実施体制

#### (1) 地区調査委員会（敬称略 順不同）

委員長

海津 正倫 奈良大学 文学部 教授（名古屋大学 名誉教授）

委員

（学識経験者）

加藤 茂弘 兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員

高田 将志 奈良女子大学大学院 人文科学系 教授

三田村 宗樹 大阪市立大学大学院 理学研究科 教授

（関係府県・政令市）

奈良県 地域振興部 地域政策課

京都府 農林水産部 農村振興課

大阪府 都市整備部 総合計画課

兵庫県 県土整備部 まちづくり局 都市政策課

大阪市 計画調整局 開発調整部

堺市 危機管理室

神戸市 危機管理室

#### (2) 実施機関

① 計画機関

国土交通省 国土政策局 国土情報課

② 受託機関

地形分類調査・土地利用履歴分類調査

アジア航測株式会社

災害履歴調査

北海道地図株式会社

実施管理

株式会社 パスコ

## 2 調査地域の概要

### 2.1 地域の位置

本調査の対象地域（以下「本図幅」という。）は、国土交通省国土地理院発行5万分の1地形図の「大阪東南部」の全域、北緯 34° 30′ ~40′、東経 135° 30′ ~45′（座標は日本測地系<sup>\*</sup>）、大阪府東部、奈良県北東部にまたがる面積約 424km<sup>2</sup>の範囲である。

図 2-1 に本図幅の位置図を示す。

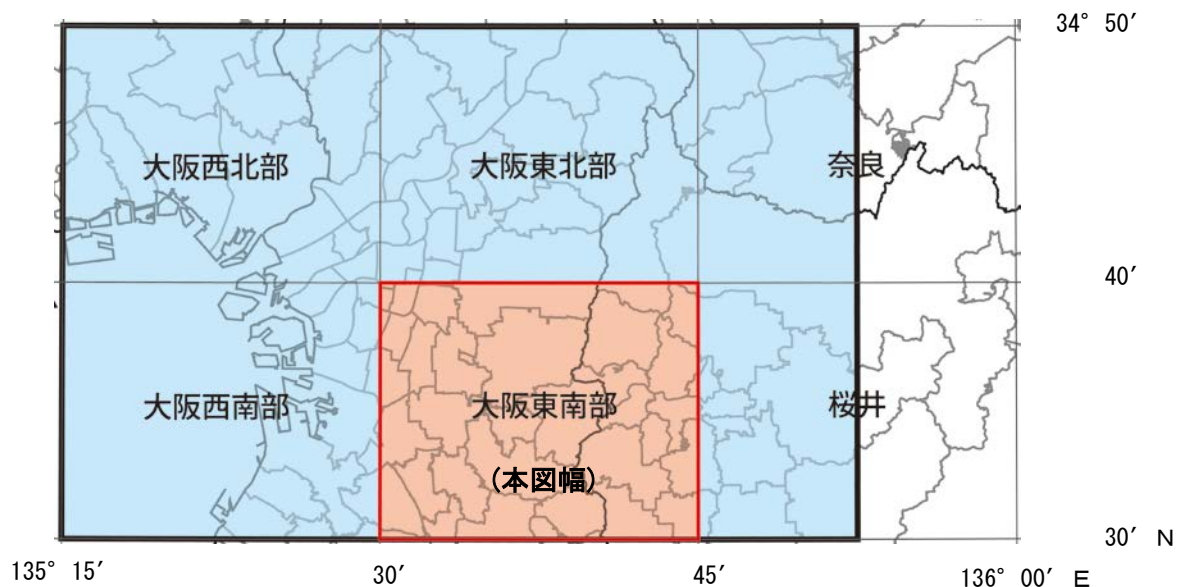


図 2-1 調査位置図

### 2.2 地域の行政概要

本図幅に関係する市区町村は、大阪府の 10 市 2 町（大阪市、堺市、八尾市、富田林市、松原市、柏原市、羽曳野市、藤井寺市、東大阪市、大阪狭山市、南河内郡太子町、南河内郡河南町）、奈良県の 6 市 8 町（奈良市、大和高田市、大和郡山市、生駒市、香芝市、葛城市、山辺郡平群町、山辺郡三郷町、山辺郡斑鳩町、山辺郡安堵町、高市郡上牧町、高市郡王寺町、高市郡広陵町、高市郡河合町）である（図 2-2、表 2-1）。

<sup>\*</sup>世界測地系(日本測地系 2000)では、34° 30′ 11.8″ ~34° 40′ 11.7″ N、135° 29′ 49.9″ ~135° 44′ 49.8″ E の範囲。

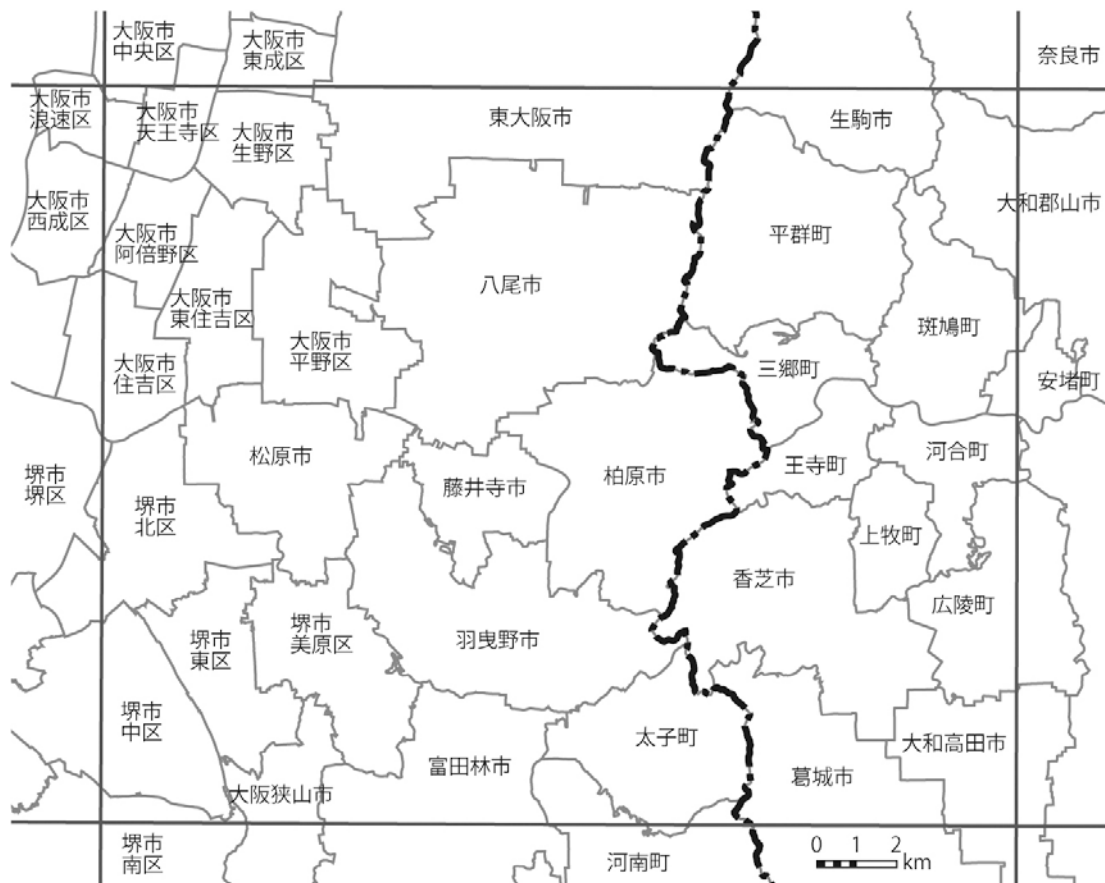


图 2-2 關係市区町村

表 2-1 関係市町村（面積、人口、世帯数）

	図幅内面積	行政面積	行政区域内世帯数	同 人口総数
	ha	ha	世帯	人
大阪府	28,714	47,193	1,434,397	3,213,465
大阪市	4,198	7,871	581,975	1,143,298
天王寺区	413	480	36,146	72,187
浪速区	184	437	43,889	64,432
東成区	133	455	39,569	80,530
生野区	837	838	63,132	131,792
阿倍野区	595	599	50,243	107,358
住吉区	730	934	74,718	155,253
東住吉区	976	975	60,416	129,691
西成区	147	735	74,091	120,352
平野区	116	1,530	87,402	198,674
中央区	67	888	52,369	83,029
堺市	8,981	12,137	293,594	707,265
堺区	1,189	2,369	67,425	147,873
中区	1,046	1,794	48,057	124,342
東区	78	1,048	34,737	85,118
南区	1,324	4,044	60,955	152,364
北区	4,173	1,558	68,260	158,153
美原区	1,171	1,324	14,160	39,415
八尾市	1,528	4,171	109,474	270,159
富田林市	1,353	3,966	45,556	117,666
松原市	1,666	1,666	49,246	122,843
柏原市	2,534	2,539	29,840	73,771
羽曳野市	2,645	2,644	44,832	115,909
藤井寺市	889	889	27,136	65,921
東大阪市	2,918	6,181	218,613	507,616
大阪狭山市	439	1,186	22,663	58,103
南河内郡太子町	1,341	1,417	4,970	14,123
南河内郡河南町	222	2,526	6,498	16,791
奈良県	13,693	53,629	383,227	927,339
奈良市	127	27,684	156,058	364,498
大和高田市	707	1,649	29,328	67,130
大和郡山市	693	4,268	36,869	88,000
生駒市	975	5,328	47,766	119,455
香芝市	2,427	2,423	28,678	76,695
葛城市	1,219	3,373	13,447	36,167
山辺郡平群町	2,390	2,390	7,778	19,286
山辺郡三郷町	879	880	9,942	23,351
山辺郡斑鳩町	1,330	1,427	11,139	27,600
山辺郡安堵町	56	433	3,445	7,737
高市郡上牧町	614	614	9,760	23,385
高市郡王寺町	701	700	9,483	22,350
高市郡広陵町	818	1,633	11,818	33,376
高市郡河合町	757	827	7,716	18,309
計	42,405	100,822	1,817,624	4,140,804

1. 図幅内面積は、本調査における図上計測値。
2. 行政面積は国土地理院「平成 24 年全国都道府県市区町村面積調」（平成 24 年 10 月 1 日現在）による。
3. 人口、世帯数は平成 22 年国勢調査人口集計結果を元に各県で算出された推計値（平成 24 年 10 月 1 日現在）である。



## 2.3 地域特性

### (1) 沿革

本図幅は、北西部がかつての摂津国、南西部がかつての和泉国、中部がかつての河内国、東部がかつての大和国に属しており、明治4（1871）年廃藩置県により、大阪府、堺県、奈良県がそれぞれ設置された。このうち、堺県は、明治9（1876）年に奈良県を合併後、明治14（1881）年大阪府に合併され、廃止された。また、奈良県は、明治9（1876）年に当時の堺県に合併されたが、明治20（1887）年に大阪府より再度分離され、現在の大阪府、奈良県の形となった。

本図幅南部は、古代から開発が進み、産業・交易や文化の先進地帯であり、古市古墳群が形成されるなど、倭の中心都市として栄えた時代もある。また、政治の中心が奈良盆地に移ってからも、大阪と奈良を結ぶ奈良街道がいくつも整備され、奈良県三郷町の龍田大社付近を越える龍田越が比較的坂の緩い平坦路として重宝され、現在も国道25号として利用されている。

明治期以降には大阪と奈良方面とを結ぶ鉄道路線も多く整備され、明治22（1889）～明治25（1892）年にかけて現在のJR関西本線の難波駅～奈良駅間が開業したのを皮切りに、昭和初期にかけて現在のJR和歌山線、近鉄奈良線、近鉄大阪線、近鉄南大阪線などが相次いで開業し、鉄道沿線を中心に大阪平野東南部から奈良盆地南部にかけて、大阪のベッドタウンとして市街地が発展していった。

また、本図幅北中部は旧大和川の氾濫原が広がり、江戸時代の大和川付け替え工事以降も低湿地帯が広がっていたことから農地として長く利用されてきたが、大阪市街地の拡大とともに、住宅・工業用地への転用が進み、特に東大阪市は日本有数の中小企業集積地としても有名である。

### (2) 気候

大阪の気候を大阪地方気象台の平年値（表2-2）からみると、年降水量は1,342.8mmで、月降水量は3～10月にかけて100mm/月を超え、梅雨期の6、7月と秋霖期の9月にはそれぞれ160mm/月を超えている。月降水量の極小は12月の43.0mm/月で、12月～2月の降雨は40～70mm/月で推移している。年平均気温は15.6℃、最寒月（1月）の日最低気温の月平均は0.5℃、最暖月（8月）の日最高気温の月平均は33.2℃となり、瀬戸内海式気候に属する温暖な気候となっている。

風速は3、4月に極大となるが、月ごとの変動は大きくない。風向は、年間では北東の頻度が最も高いが、8月には南東の風が卓越し、夏場の高温の一因となっていると考えられる。また、年間日照時間は1,856.4時間で、1～2月に少なく120h/月を少し越える程度となっているが、夏季の8月に極大（202.6h/月）となり、200h/時を超えている。

表 2-2 大阪の気候表 (1981~2010 年の平年値)

要素	降水量	気温			風向・風速		日照時間
	(mm)	(°C)			(m/s)		(時間)
	合計	平均	最高	最低	平均	最多風向	合計
統計期間	1981 ~2010	1981 ~2010	1981 ~2010	1981 ~2010	1981 ~2010	1981 ~2010	1987 ~2010
資料年数	30	30	30	30	30	30	24
1 月	47.1	4.4	8.8	0.5	1.7	西南西	123.2
2 月	64.1	4.9	9.6	0.8	1.8	西南西	120.5
3 月	111.1	8.2	13.3	3.6	2.0	北東	152.8
4 月	102.9	14.0	19.7	8.7	2.0	北東	180.1
5 月	148.9	18.7	24.4	13.7	1.8	北東	181.8
6 月	195.5	22.6	27.7	18.5	1.7	北東	139.4
7 月	174.8	26.5	31.4	22.8	1.6	西南西	160.6
8 月	118.0	27.8	33.2	23.7	1.8	南東	202.6
9 月	163.1	23.7	28.8	19.9	1.8	北東	153.3
10 月	115.9	17.6	22.8	13.3	1.6	北東	156.0
11 月	68.6	11.9	16.9	7.5	1.5	北東	139.1
12 月	43.0	6.8	11.6	2.7	1.6	西南西	134.1
年	1,342.8	15.6	20.7	11.3	1.8	北東	1,856.4

「日本気候表 (気象庁, 2011)」による大阪地方気象台の平年値。

統計期間は 1981~2010 年の 30 年間。但し日照時間は、1987~2010 年の 24 年間。

### (3) 地形及び地質の概要

本図幅の地域は、中央構造線を底辺とし、大阪湾・琵琶湖・伊勢湾を含む三角形の地域 (近畿三角帯) の南西部に位置し、南北方向に延びる地塊運動の軸が平行に配列している。本図幅では、生駒山地や上町台地と低地との境界付近の急斜面・急崖や、図幅東部の山地・丘陵地の尾根線・谷線が、南北方向に直線状の地形を形成している。

本図幅東部は、主として生駒山地と金剛山地で構成されているが、生駒山地が西斜面に急傾斜、東斜面に緩傾斜地が広がるのに対し、金剛山地では東斜面が急傾斜、西斜面が緩傾斜で、さらにその西側に丘陵地が広がっている。丘陵地はどこも開析が進み、樹枝状に細かな谷が多く刻まれており、本図幅南部では開発も進んで原地形を残していないところも多くみられる。本図幅南西部には、本図幅南側の山地・丘陵地へと続く台地が広がっており、本図幅北西部の上町台地へと続いている。南西部の台地は、標高 110~5 m で全体に北西へ緩傾斜し、高度差から高位面・中位面・低位面の 3 段に細分できる。上町台地の標高 5~20 m で西部及び北部で高く、その西縁は高さ 5~15 m の段丘崖で低地と境している。低地は、主に旧大和川によって形成された標高 2~4 m の氾濫原低地が図幅中央から北部に広がり、その中に天井川や自然堤防が微高地をつくっている。また、微高地の背後には、後背湿地や旧河道の微低地が点在している。

地質的にみると、山地部は花崗岩類が多く、北東及び北西方向の摂理が発達している

とともに、風化も著しく、深層風化を受けてマサ土化している。また、一部には礫岩、砂岩、泥岩などの固結堆積物や、凝灰岩、安山岩質岩石の火山性岩石などもみられる。丘陵地には、大阪層群と呼ばれる未固結の堆積物が広く分布し、下半分は非海成の礫・砂・粘土層から、上半分は、非海成の砂礫層と海成粘土の互層からなる。台地は、未固結の礫による段丘堆積物が分布している。低地では沖積層からなり、概略、上部は砂層から、中～下部は海成粘土からなり、最下部に植物片を含むシルト層をともなう。上部の砂層は、北及び西側で厚く全体に砂質で礫を含むが、北及び西部では粘土も多く含まれる。

(5万分の1土地分類基本調査「大阪東南部」説明書による)。

### 3 調査地域の地形及び土地の開発、保全及び利用との関係

本調査では土地条件図などの既往資料や空中写真判読などに基づき、自然地形分類図と人工地形分類図を作成した。

自然地形分類図作成にあたり、人工改変済みの範囲については終戦直後の米軍写真や明治・大正期の旧版地形図などから、もともとの地形を復元・図化した。古墳などの歴史的な地形改変地は人工地形とみなし、周囲の地形をもとに自然地形を復元した。人工地形分類図については人工的に改変された地区・区域を新旧の空中写真や地形図の比較から抽出・図化した。主な人工改変地は低地での盛土地や丘陵地や台地などでの大規模改変地（人工平坦地）である。丘陵地や台地を大きく切戸・盛土した人工平坦地内における旧谷の位置や尾根筋の切土地などの改変も、新旧の空中写真や地形図の比較判読により、抽出・図化した。

#### 3.1 地形概説

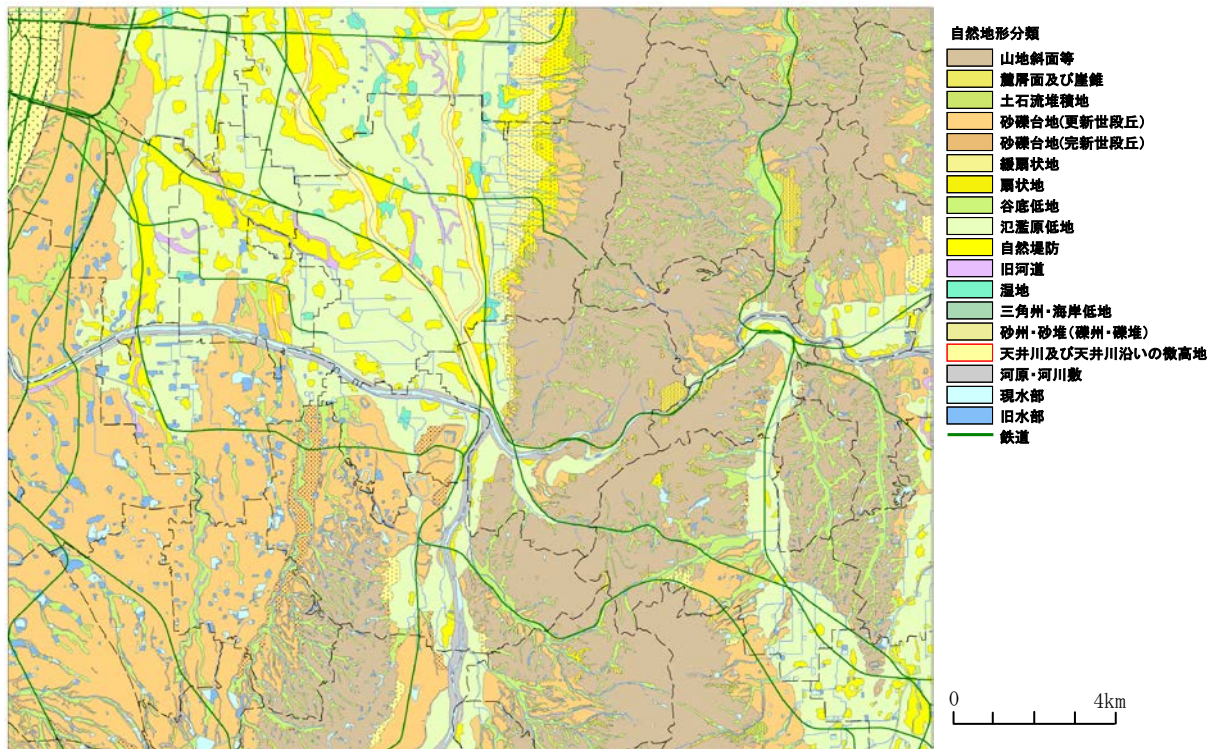


図 3-1 大阪東南部地域の自然地形分類図

本図幅の自然地形は山地・丘陵地・台地・低地に分類され、図幅中央を東西に貫流する大和川を境に東部中央に標高 100～550m 程度で南北に広がる山地を持ち、山地の東西に低地が広がる（図 3-1）。本図幅西南の丘陵地・台地は本図幅南側（本図幅外）の山地から北側へ標高を下げる。本図幅の低地は「大阪平野」と呼ばれ、断層により大和川北側の山地と明瞭に区別されている。低地は主に沖積層であり、丘陵地・台地は第三紀末から第四紀はじめにかけて堆積した大阪層群の主に湖沼性・河成の粘土・シルト・砂・礫層からなる。山地は主に白亜紀から古第三紀にかけて形成された領家花崗岩を主としているが、一部に第三紀中新世のザクロ石黒雲母流紋岩や塩基性岩石の一種が見られる。

山地は大和川を挟んで南北に広がっており、花崗岩の風化が進んでいるため土砂の供給源となっている。本図幅内の山地は山頂部が含まれず 100～500m で山稜線が大和川に向けて標高を下げる部分に当たる。この山地は第四紀後半の地殻変動のため現在でも隆起を続けており、山地周辺の地形にも強い影響を与えている。一部地域ではゴルフ場用地や公共施設などのために人工改変がなされている地区がある。

本地域の丘陵地は本図幅内の山地から連なる丘陵地と本図幅南側（本図幅外）の山地から連なる丘陵地に分けられる。本図幅内の山地西側の丘陵地は標高が高くとも 100m 程度で山地由来の花崗岩の堆積物である大阪層群からなる丘陵地となっている。本図幅南側（本図幅外）の山地から連なる丘陵地は大阪層群と花崗岩で構成されており標高が 300m 程度になる地区がある。丘陵地では宅地開発を目的とした人工改変地が多く、古墳などの古代の歴史的な人工改変も見られる。

台地は主に本図幅の西部に広がる。台地は主に緩やかに北から南、あるいは南東から北西に向けて低地へと緩やかに標高を下げるが、北西部の台地は北西の低地と南北に延びる断層の断層崖で接している。台地は主に大阪層群で構成され、大阪層群が露出している地点もある。台地には河川で開析されてできた谷底低地や浅い谷が多く、そこには盛土などの人工改変が見られる。

低地は石川や旧大和川沿いに発達した沖積低地を主としており、南部には寝屋川の沖積低地の一部が、西部には低地（盆地）が含まれる。北西部の低地は大阪湾沿いの海岸低地の一部であるが、砂州・砂堆のみで沿岸部の沖積低地は含まれない。北部には付替えが行われる前の旧大和川由来の天井川や扇状地の跡が残っており、微高地の利用と低地での人工改変により市街地が形成されている。後背湿地などの低湿な地区も見られるが、盛土による人工改変を受けている地区が多い。

表 3-1 は、本図幅における市町村ごとに自然地形の面積を集計した結果である。

表 3-1 調査地域内の市区町村別地形分類面積

区分	大原市																			合計
	大原市天王寺区	大原市高梁区	大原市東成区	大原市東区	大原市北東区	大原市中央区	大原市東山区	大原市西山区	大原市南区	大原市東山区	大原市北東区	大原市中央区	大原市東山区	大原市西山区	大原市南区	大原市東山区	大原市北東区	大原市中央区	大原市東山区	
山地丘陵等	0.16	-	-	-	-	0.02	0.16	-	-	0.02	0.01	0.30	0.18	2.45	5.84	5.05	0.01	0.03	15.39	8.01
山地丘陵等 農地及び農道	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.89	0.06
山地丘陵等 土石法埋埋地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.16	0.00
山地丘陵等 計	0.16	-	-	-	-	0.02	0.16	-	-	0.02	0.01	0.30	0.18	2.45	5.84	5.05	0.01	0.03	16.43	8.07
台地	3.40	-	-	0.02	0.16	0.02	4.48	2.32	-	0.02	0.01	8.44	8.69	7.12	1.41	3.06	10.92	8.33	0.63	6.05
台地 砂州・砂埋(堤防付段丘)	-	-	-	0.02	0.16	0.02	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.71	-
台地 計	3.40	-	-	0.02	0.16	0.02	4.48	2.32	-	0.02	0.01	8.44	8.69	7.12	1.41	3.06	10.92	8.33	0.63	6.05
灌漑地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.28	0.47
灌漑地 河原・河川敷	0.05	-	-	0.40	0.99	-	-	-	-	-	-	0.81	1.47	1.96	1.37	0.90	0.41	0.80	1.46	2.72
灌漑地 沼澤原野地	0.24	-	-	0.94	5.54	-	-	4.35	-	-	-	0.01	-	-	20.89	1.20	0.15	4.95	4.09	3.85
灌漑地 自然灌漑	-	-	-	0.26	1.22	-	-	2.35	-	-	-	0.01	-	-	4.50	0.12	0.12	0.77	0.69	0.32
灌漑地 旧河運	-	-	-	-	0.01	-	-	0.16	-	-	-	-	-	0.00	0.32	0.00	0.10	0.21	-	0.04
灌漑地 その他	-	-	-	0.08	0.01	-	-	0.00	-	-	-	-	-	-	0.62	-	-	-	0.00	-
灌漑地 砂州・砂埋(堤防付)	0.20	1.84	-	-	-	-	-	-	-	-	0.91	-	-	-	-	-	-	-	-	-
灌漑地 砂州・砂埋(堤防付)の灌漑地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
灌漑地 河原・河川敷	0.55	1.84	-	-	1.30	2.18	1.01	1.53	7.10	1.45	0.91	0.83	1.47	2.05	33.64	2.89	13.15	1.28	6.47	7.79
灌漑地 計	0.02	-	-	0.03	0.19	0.05	0.19	0.69	-	-	-	0.89	0.35	0.76	0.41	0.44	0.31	0.82	0.87	0.82
水部	0.01	-	-	0.00	0.01	0.25	0.39	0.25	-	-	-	0.50	0.44	0.43	0.65	0.12	0.37	0.81	0.87	0.03
水部 旧河運	0.03	-	-	0.03	0.20	0.59	0.58	0.34	-	-	-	0.89	0.04	1.21	0.46	0.57	0.68	1.33	1.84	0.55
水部 計	0.04	-	-	0.03	0.20	0.59	0.58	0.34	-	-	-	0.89	0.04	1.21	0.46	0.57	0.68	1.33	1.84	0.55
合計	4.13	1.84	1.33	8.37	5.95	7.30	9.76	1.47	1.47	1.16	1.16	10.46	11.89	13.24	41.73	11.71	15.28	13.53	16.06	25.34

区分	豊島郡																			合計
	藤井寺市	東大原市	大原鉄山市	瀬河内郡太子町	瀬河内郡向部町	栗島市	大和原田市	大和鉄山市	生駒市	香芝市	葛城市	生駒郡平群町	生駒郡三郷町	生駒郡斑鳩町	生駒郡斑鳩町	生駒郡安堵町	北葛城郡上狹町	北葛城郡王寺町	北葛城郡広原町	
山地丘陵等	0.14	4.45	0.49	8.62	0.61	1.03	0.44	4.35	6.54	11.12	6.06	17.40	5.84	5.14	3.73	3.66	2.68	3.76	125.37	3.44
山地丘陵等 農地及び農道	-	0.03	0.03	0.12	0.01	-	-	0.01	0.31	0.26	0.09	0.93	0.08	0.08	0.08	0.02	0.03	0.03	0.03	0.03
山地丘陵等 土石法埋埋地	-	0.42	-	0.13	-	0.01	-	0.01	0.11	0.16	0.28	0.04	-	0.01	-	0.03	-	-	-	0.03
山地丘陵等 計	0.14	4.90	0.53	8.88	0.62	1.04	0.44	4.37	6.95	11.55	6.43	18.38	5.92	5.23	3.80	3.91	2.71	3.80	130.38	3.44
台地	3.51	0.46	2.68	1.88	0.55	-	0.04	1.16	0.44	2.45	2.62	0.56	1.08	2.18	0.62	0.41	0.53	1.04	85.52	1.04
台地 砂州・砂埋(堤防付)	0.56	-	-	0.00	0.01	-	-	0.00	0.02	0.06	0.02	0.02	0.02	-	-	0.09	0.04	-	0.06	0.31
台地 計	3.77	0.46	2.68	1.88	0.56	0.00	0.05	1.16	0.75	2.50	2.84	0.58	1.08	2.18	0.65	0.46	0.53	1.08	86.67	1.04
灌漑地	-	1.71	-	-	-	-	-	0.02	-	0.06	0.00	-	0.04	0.60	-	-	-	-	5.93	-
灌漑地 河原・河川敷	-	1.16	-	-	-	-	-	-	-	0.06	0.00	-	-	-	-	-	-	-	2.68	-
灌漑地 沼澤原野地	0.47	0.19	0.49	1.97	0.27	0.22	0.07	1.27	1.93	3.58	0.79	4.70	1.02	1.50	1.65	0.37	1.37	1.39	37.50	1.39
灌漑地 自然灌漑	2.91	12.40	-	0.38	0.56	-	4.86	-	1.73	5.39	1.73	-	0.45	2.56	0.85	0.43	1.56	2.80	0.67	92.39
灌漑地 旧河運	0.30	5.00	-	-	0.06	-	1.23	-	0.13	0.20	0.13	0.47	0.10	0.47	0.10	0.00	0.17	0.28	0.03	21.16
灌漑地 その他	0.01	0.23	-	-	0.02	-	-	-	-	-	-	0.01	-	0.06	-	-	-	0.07	0.05	1.89
灌漑地 砂州・砂埋(堤防付)	0.10	0.79	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.71	-
灌漑地 砂州・砂埋(堤防付)の灌漑地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
灌漑地 河原・河川敷	-	1.69	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.47	-
灌漑地 沼澤原野地	0.56	-	-	-	0.05	-	-	-	-	-	-	-	0.00	0.24	0.07	-	0.14	0.03	0.19	5.65
灌漑地 自然灌漑	4.33	23.46	0.48	2.42	0.66	0.22	6.16	1.28	1.83	8.48	2.70	4.72	1.60	5.43	0.62	2.08	2.24	4.54	2.33	177.67
灌漑地 旧河運	0.41	0.21	0.40	0.18	0.06	0.02	0.29	0.10	0.12	0.56	0.19	0.22	0.17	0.56	0.04	0.16	0.35	0.32	0.25	10.72
灌漑地 その他	0.24	0.15	0.16	0.06	0.01	-	0.13	0.01	0.09	0.03	0.03	0.00	0.01	0.06	0.00	0.00	0.05	0.07	0.10	0.61
灌漑地 計	0.65	0.36	0.56	0.23	0.07	0.02	0.42	0.11	0.12	0.75	0.22	0.22	0.18	0.46	0.04	0.22	0.40	0.40	0.35	17.34
合計	8.89	29.18	4.39	13.41	2.22	1.27	7.07	6.93	9.75	24.27	12.19	23.90	8.79	13.30	6.14	7.01	8.18	7.57	424.05	424.05

「自然地形及び人工地形分類図」の図上計測による

### 3.2 地形細説

本図幅における山地・丘陵地などの地形地域区分は、10万分の1土地分類調査「大阪府」（国土庁、1976）及び20万分の1土地分類調査「奈良県」（経済企画庁、1973）の地形分類図や、5万分の1土地分類基本調査（国土調査）「大阪西南部（大阪府）、大阪東南部（大阪府）」（大阪府、1978）、「奈良・大阪東北部・大阪東南部（いずれも奈良県域）」（奈良県、1983）やその他の文献などを参考に、全域で統一した区分と呼称を採用した（図3-2）。

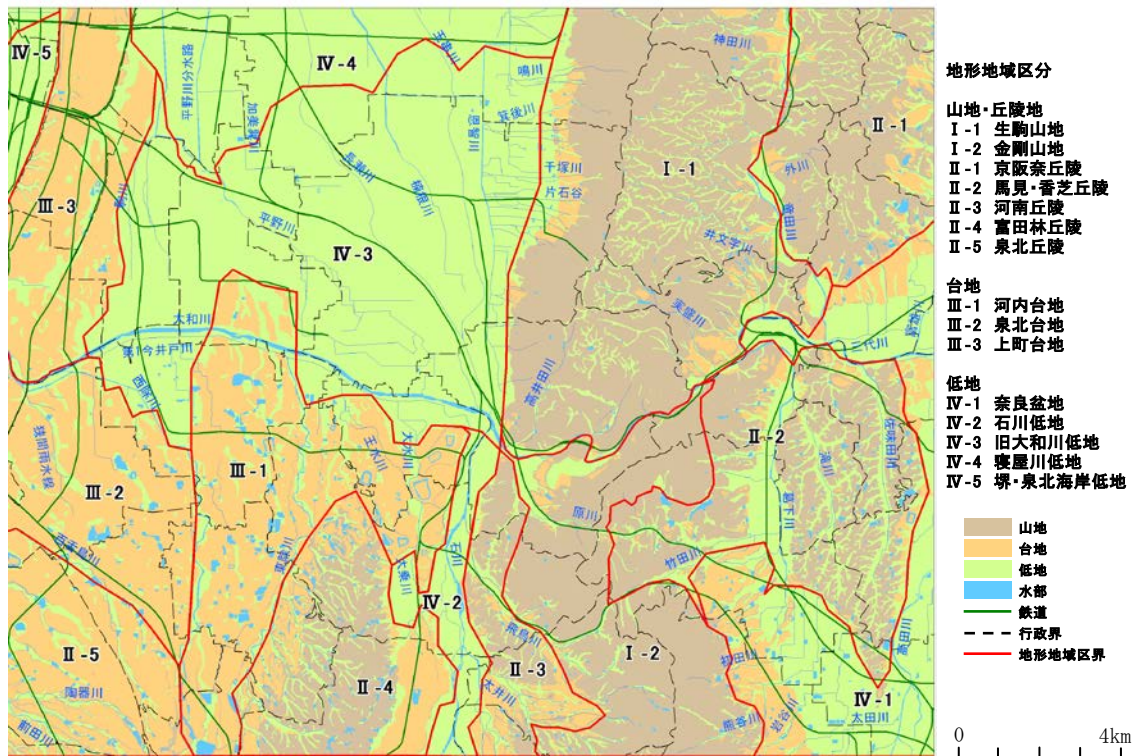


図 3-2 本地域の地形地域区分

#### (1) 山地

**生駒山地**は大阪府と奈良県の県境に位置し、山地のほぼ中央にある生駒山（642m）を山頂とし、他は大部分が500m以下の低い山地である。大和川以北の山地部が生駒山と呼ばれ、本図幅は山頂部より南側の標高100～500mの低山地部分に当たり、大和川に向かって南側に稜線をさげる。山地西部の斜面には生駒断層帯（中央防災会議、2008）が南北に分布しているため、傾斜の大きい傾動地塊となっているが、東部は緩傾斜であり、京阪奈丘陵を経て盆地へと移行する。山地は白亜紀から古第三紀にかけて作られた両家花崗岩を主とするが、南部の信貴山など一部には第三紀の火山岩や堆積岩が見られる。生駒山地と旧大和川低地との境に見られる扇状地は断層運動により、麓層面が隆起して扇状地状の様相を示したことを表している。本図幅では大和川を南限、低地に接する麓層面を西限とし、大和川支流竜田川沿いの谷底低地を京阪奈丘陵との境とした。

**金剛山地**は大和川南部の南北約20km、幅5kmの範囲に広がっており、金剛山（1125m）や葛城山（959m）を主な山とする山地であるが、本図幅では標高500m以下の北部が含まれるのみである。金剛山地東部は本図幅南側（本図幅外）に南北に広がる金剛断層の

影響により急崖となっているが、西側は緩やかに西から東方向に丘陵地を経て低地へと標高を下げる。生駒山地と同様な地質で、領家花崗岩などの花崗岩を主とし、北部の二上山（にじょうざん）など一部に第三紀の火山岩や堆積層を含む。本図幅では大和川を北限、奈良盆地沿いの山地までを東限とし、石川支流飛鳥川や太井川沿いの台地に接する山地部分までを河南丘陵との境とした。

## (2) 丘陵地

**京阪奈丘陵**は京都・大阪・奈良の3府県にわたって広がる標高200～400m程度の丘陵地で、主に大阪層群によって構成されている。京阪奈丘陵に見られる大阪層群は、北東から南西にかけて撓曲や断層によって複雑に変形しており、礫・砂・シルト・粘土層などからなり、層厚の厚い地点もある。生駒山地に近い部分では基岩の花崗岩が露出している。住宅地やゴルフ場用地としての利用を主とした人工平坦地になっている地区が多く見られる。本図幅では奈良盆地に接する山地部分を南限とした。

**馬見・香芝丘陵**は生駒・金剛山地東縁にある丘陵地群であり、奈良盆地と接する。**香芝丘陵**は生駒山地から連なる標高70～120m程度の緩やかな丘陵地で、主に花崗岩や新第三紀の石英安山岩からなる。香芝丘陵の北西部は山頂部が広く平坦面あるいは緩傾斜面となっており、全般に南から南東方向にかけて緩傾斜になる。平坦面の外縁は明瞭な遷急線で、特に大和川周辺では明瞭で地すべり地形を示す箇所も見られる。南東部は北西部から続く平坦面を除けば主に大阪層群から構成されている。この丘陵地では宅地開発のために人工改変を受けた平坦地が多く見られる。**馬見丘陵**は香芝丘陵と谷底低地を挟んで奈良盆地に接する標高70m前後の低い丘陵地であり、全体になだらかな形状をしている。大阪層群の砂層が主な構成要素であり、全体的に東側に標高を下げている。しかし丘陵地西縁付近には北北東から南南西方向にかけての撓曲を持ち、最大傾斜は60°と急で、北西縁でも大阪層群が北西方向に40°程度傾斜している。これらのため、馬見丘陵西縁は北西側に階段状に低下する構造を見せている。開析が進んでおり、北東から南西にかけて谷底低地がある。谷底低地沿いの丘陵地は主に宅地造成のために人工改変を受けて平坦地になっており、溜池を埋め立てて土地利用を行っている地点もある。西縁は北から東南東方向に延びる金剛断層の北部の一部があり（防災中央会議、2008）、奈良盆地と断層崖で接している。

**河南丘陵**は石川右岸にある金剛山地から連なる標高が70～100m程度の小起伏丘陵地であり、本図幅にはその北半が含まれる。大阪層群が主になるが、海成粘土層はあまり見られず砂質となっている。この丘陵地は金剛山地とは急崖で接している。宅地造成のための丘陵地の平坦化や低地の盛土など、人工改変を受けている地区が見られる。

**富田林丘陵**は石川左岸に接する細長い楕円状の形をした標高100m程度の小起伏丘陵地で、本図幅にはその北半が含まれる。主に大阪層群からなっており、小礫を含む砂と海成粘土が互層をなしている。一部で大阪層群が露出した地点がある。低平であるが丘陵地東部の石川や西部の東除川に面した斜面には急崖が多く見られる。丘陵地の広い範囲で人工改変が行われており、主に宅地造成やゴルフ場利用を目的とした丘陵地の平坦化がなされている。本図幅では石川低地に接する台地面を東限とし、東除川沿いの谷底低地を河内台地との境とした。



**泉北丘陵**は本図幅南側（本図幅外）の山地から連なる大阪南部の最も広い丘陵地であり、東西を川で限られた地形をしており、本図幅では北側の一部が含まれる。北に行くにつれて標高が下がり、主要部では標高が 100m 前後である。丘陵地は地殻変動により、南東から北西方向に伸びている。丘陵地は大阪層群で構成され、基岩を不整合に覆う層厚は一部で 400m と厚く、河成・湖沼性の砂・礫・シルト・粘土層と海成粘土層からなり火山灰層を挟んでいる。開析が進んでおり、樹枝状の谷底低地が入り組んでいるほか、台地面上にも浅い谷が多く見られる。本図幅内では人工改変はあまりなされていないが、浅い谷や谷底低地内への盛土がなされている。本図幅では、5 万分の 1 土地分類基本調査「大阪西南部（大阪府）、大阪東南部（大阪府）」（大阪府、1978）などを参考に、百舌鳥川や西除川沿いの谷底低地以南の台地を泉北丘陵とした。

### (3) 台地

**河内台地**は富田林丘陵の西北部に位置する標高 20～70m 前後の大阪層群が露出した台地で、段丘面が多く見られる。台地のほとんどに更新世の下位面が分布しており、崖に接する頂上付近が急勾配である以外は勾配がきわめて緩やかである。石川や大和川の浸食により高位段丘・中位段丘・低位段丘に分かれており、段丘面上には浅い谷や窪地が発達している。かつては段丘面の浅い谷や窪地に盛土をすることによる水田としての利用が主であったが、現在は盛土上に宅地が造成されるなど土地利用が変わっている。台地北東部の大和川支川大水川と並行する位置に生駒断層系に属する誉田（こんだ）断層が南北方向に分布しており（宮地ら、1998）、断層の南部で石川低地と接している。断層上には応神天皇陵があるが、断層の作用により陵内に崩壊が生じている。本図幅では大和川北側に位置する台地面までを北限とし、石川低地に接する台地を河内台地とした。

**泉北台地**は本図幅南側（本図幅外）の山地から連続する標高 100m 前後の台地で、未固結の砂礫層や粘土層からなる大阪層群からなる。大阪層群の砂礫層の礫は本図幅南側（本図幅外）の山地から供給されたと考えられる。泉北台地は更新世に形成され、造盆地運動の沈降部に扇状地面として発達した箇所が隆起したあと、浸食面または浸食段丘として発達して現在のようなものである。標高は南東部で 100m 前後、大和川付近で 10m 前後、西南部で 5m となっており、南東から北西に向けて緩傾斜をなしている。泉北台地は南の山地側へ標高を上げるが、北部でも上町台地に向けて標高が高くなっている。この地点は、近辺の低地を南北に走る地質構造上の隆起帯と言われている。台地上は小規模な谷底平野や浅い谷が見られる。本地域では西除川沿いの谷底低地を河内台地との境とした。

**上町台地**は大阪市の中部に細長い半島状に南北へ伸びる標高 15m 程度の沖積台地であり、東西に幅 2km 程度、南北に 10km 程度と大阪平野を分断するように広がっている。台地は低平で、平坦面は中位段丘となっている。台地西側は堺・泉北海岸低地と南北に延びる上町断層で接しており、明瞭な断層崖が見られる。台地東側は傾斜が緩やかであり、谷底低地で台地面が分断され、緩傾斜で低地に向かって標高を下げる。縄文時代から土地の利用が確認されており、現在でも谷底低地や浅い谷への盛土を主とした人工改変がなされている。本図幅では大和川を南限とし、低地に接する台地面までを西限とした。

#### (4) 低地（盆地）

**奈良盆地**は奈良県北西部に位置する標高 100m 以下の断層盆地であり、本図幅では西側の一部が含まれる。本図幅では馬見・香芝丘陵の西縁に金剛断層の北部の一部が見られる。全般に扇状地礫層は薄く、部分的に主な構成要素の花崗岩や下部洪積層を切る浸食面で構成される。盆地四周からの流出土砂により、山麓付近は大小の扇状地となっており、それらが盆地付近に細粒の堆積物を運搬している。三角州性低地は自然堤防の発達が見られ、段丘化した旧氾濫原などもあるため、低地付近は土地の利用が容易である。

**石川低地**は富田林丘陵などを構成する石川によって形成されている。石川は急勾配の河川のため浸食・運搬能力が高く、河川の浸食と堆積を繰り返したため、低地は礫・砂・シルトなどが互層をなしている。石川の左右両岸には石川を中心に氾濫原低地が形成され、氾濫原低地沿いに段丘が分布している。本図幅では石川が大和川と合流する地点以南の氾濫原低地を石川低地とした。

**旧大和川低地**は旧大和川によって形成された扇状地である。この地域は旧大和川によって氾濫原が形成され、柏原市を中心に扇状に分布している。標高は 5～15m ほどあり、下流に向かってほぼ同心円状に低下しているが、構成している砂礫・砂・シルト・粘土などは未固結で、軟弱な地盤となっている。江戸期に大和川の付替え工事が行われており、付替えが行われる前は大和川が淀川と接続していたため、その当時の河川沿いに天井川性の微高地が残っている（図 3-3）。

**寝屋川低地**は淀川低地と旧大和川低地の間にあり、寝屋川と寝屋川に合流する岡部川や古川などの支川によって形成された低湿な沖積低地となっており、沖積層と泥炭層が発達している。低地の大部分が標高 0～2m と低平で、生駒山麓まで 20km にわたり感潮区間とされている。排水経路が寝屋川の本流のみのため、構成する地質は暗褐色の粘土または粘土混じりの砂や有機物などの軟弱な地盤を示すものが多い。

**堺・泉北臨海低地**は淀川三角州の南部から大阪湾沿いに広がる細長い低地であり、本図幅では北部の砂州・砂堆のみが含まれる。上町台地沿いの砂州・砂堆は標高 4m 程度になっており、主に大和川、安治川由来の砂層で構成されていて、水はけが良い。本地域では北端の扇状地のみが含まれ主に砂質の土壌をしているが、砂州・砂堆は大阪湾内での海食作用により形成された。



図 3-3 付替えによる大和川の流路の変遷  
 (出典：大和川付替え 300 周年記念事業実行委員会  
<http://www.kkr.mlit.go.jp/yamato/yamato300/tukekae/tukekae3.html>)

### 3.3 地形と土地の開発、保全及び利用との関係

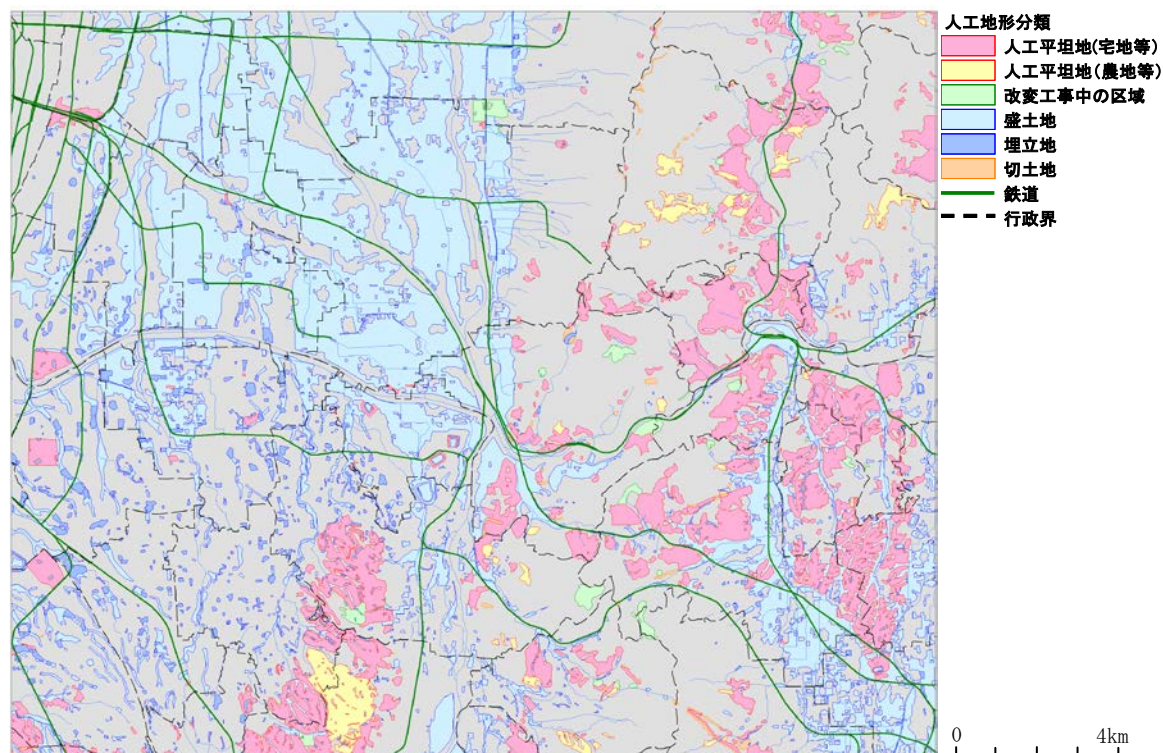


図 3-4 大阪東南部地域の人工地形分類図

本図幅における人工地形を見ると、富田林丘陵や馬見・香芝丘陵を中心とした人工平坦地（宅地等）と、旧大和川低地や淀川三角州に代表される低地帯を中心とした盛土が目立つ（図 3-4）。旧大和川低地や泉北台地などの氾濫原低地や谷底低地・浅い谷では、自然堤防や砂州・砂堆の微高地を除いた多くが盛土になっている。盛土は後背湿地や旧河道などの低湿な部分にも多く行われ造成がなされている。また台地上に古墳などの歴史的な人工改変を示す盛土が見られる。

本図幅の中央にある大和川は生駒山地と金剛山地の間を東西に流れているが、山地の間は狭窄地となっている。狭窄地点は亀の瀬地すべり地があり、地すべり対策がなされている。しかしこの付近で降雨による土砂崩れなどが発生して大和川がせき止められた場合、大和川上流側の広い範囲へ影響が及ぶ可能性がある。

丘陵地における人工地形は主に住宅の大規模造成に伴う人工平坦地（宅地等）である。馬見・香芝丘陵、富田林丘陵などでは切り取った尾根部の土砂を谷部に盛土として用いることで造成（谷埋め盛土）を行っている箇所があり、緩斜面や平坦化した土地では地震動による地盤の液状化や降雨による土砂災害が推定される。香芝丘陵では旭ヶ丘ニュータウンや高山台ニュータウンなどが造成されている（図 3-5）。

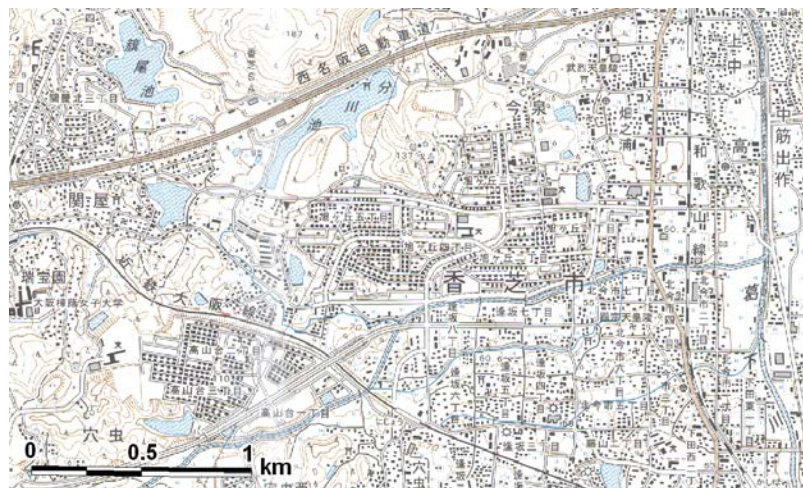
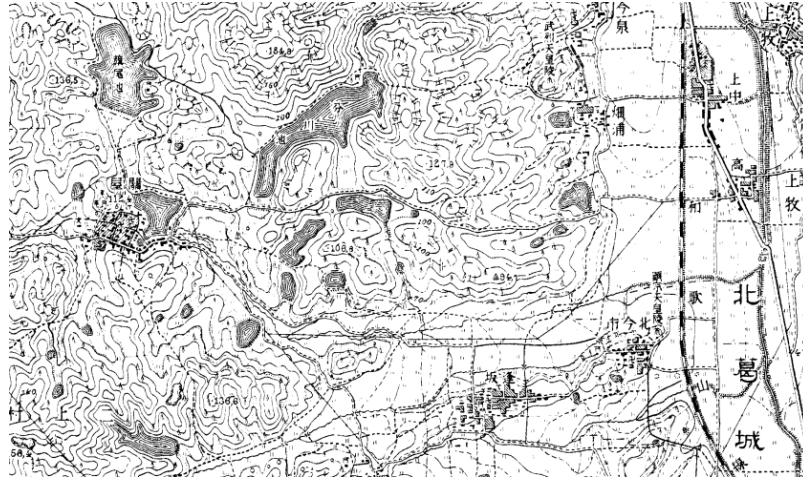


図 3-5 香芝丘陵南部地域の変遷

1 : 25000「大和高田」(上から) 大正 11 年測図、昭和 42 年改測、平成 18 年更新  
 大正期には関屋と逢坂の一部に宅地が見られるのみであるが、以降経年とともに改変が進み、昭和期には近鉄大阪線が設けられ、平成期には北部に西名阪自動車道が走り、丘陵を切り開いて旭ヶ丘や高山台が造成されている。

表 3-2 本図幅内の人工地形面積

(単位:km<sup>2</sup>)

分類		人工平坦地		盛土地	埋立地	切土地	改変工事中の区域	人工地形計(a)	自然地形計(b)	(a/b)%
		宅地等	農地等							
丘山 陵地・ 地	山地斜面等	29.11	4.19	0.20	0.06	0.68	1.60	35.84	125.37	28.6%
	麓斜面及び崖錐	0.50	0.03	0.04	-	0.00	0.02	0.59	3.44	17.2%
	土石流堆積地	0.12	0.03	0.03	-	0.03	0.00	0.21	1.57	13.7%
	山地・丘陵地 計	29.73	4.25	0.27	0.06	0.71	1.62	36.65	130.38	28.1%
台地	砂礫台地(更新世段丘)	5.44	0.13	4.36	0.03	0.05	-	10.01	95.52	10.5%
	砂礫台地(完新世段丘)	0.18	-	0.12	-	0.00	0.00	0.30	3.15	9.5%
	台地 計	5.62	0.13	4.48	0.03	0.05	0.00	10.31	98.67	10.4%
低地	緩扇状地	0.07	0.00	0.41	-	0.00	0.00	0.48	5.93	8.1%
	扇状地	0.08	-	0.02	-	-	-	0.11	2.68	4.0%
	谷底低地	2.38	0.76	14.09	0.17	0.05	0.19	17.62	37.50	47.0%
	氾濫原低地	0.34	0.00	75.94	0.00	0.00	0.29	76.58	92.36	82.9%
	自然堤防	-	-	0.01	-	-	-	0.01	21.16	0.1%
	旧河道	0.01	-	1.57	0.01	-	-	1.58	1.99	79.5%
	湿地	-	-	1.46	-	-	0.06	1.52	1.71	89.2%
	砂州・砂堆(礫州・礫堆)	-	-	-	-	-	-	-	4.47	-
	天井川及び因井川沿いの微高地	0.03	-	0.01	-	-	-	0.04	5.65	0.7%
	河原・河川敷	-	-	0.03	-	-	-	0.03	4.22	0.6%
低地 計	2.91	0.76	93.54	0.18	0.05	0.54	97.97	177.67	55.1%	
水部	現水部	0.01	0.00	0.01	0.01	-	-	0.03	10.72	0.3%
	旧水部	0.04	0.00	0.04	6.61	-	-	6.70	6.61	101.3%
	水部 計	0.05	0.00	0.05	6.63	-	-	6.73	17.34	38.8%
合計		38.31	5.14	98.34	6.89	0.82	2.16	151.66	424.05	35.8%

「自然地形及び人工地形分類図」の図上計測による

人工地形の面積を改変前の自然地形の分類別に集計したものを表 3-2 に示す。自然地形の約 36%が人工改変地であることがわかる。自然地形の中地形分類毎に改変率を見ると、山地・丘陵地で約 28%、台地で約 10%、低地で約 55%、水部で約 39%となっている。

山地・丘陵地では、8割以上が宅地造成などに伴う平坦化による人工改変で、約 30 km<sup>2</sup>に及んでいる。改変工事中の区域が 1.62km<sup>2</sup> あるが、主に宅地造成中となっている地域であり、今後宅地として利用されると考えられる。

台地では、山地・丘陵地同様に宅地造成に伴う平坦化が広く行われており、公園や大学などの公共施設の他、工場用地として主に利用されている。本図幅では台地上の盛土も 4.5 km<sup>2</sup>と平坦化地と同程度の広さになっている。これは台地上にある浅い谷部での盛土の他に、応神天皇陵や仲哀天皇陵に代表される歴史的な人工改変地が本図幅に含まれるためである。

低地では主に盛土が広く行われている。氾濫原低地、旧河道、後背湿地などを中心として広範囲で盛土されており、改変率が 80%を超えている。谷底低地でも 50%程度が人工改変地であり、主に盛土によって改変されている。

米軍写真で確認できる河川の一部はその後河川改修がなされ、また溜池などの水部、旧版地形図上の旧水部、旧河道などでは埋土や盛土がなされ人工改変されている地域が多い。このような場所は一般に地盤条件が悪い場合が多い。

### 3.4 地形と災害及び保全との関係

本図幅における地形条件と密接な関係を持つ自然災害には、地震による低地の建物被害（軟弱地盤地での建物倒壊や地盤の液状化による被害など）、地形の人工改変による地盤災害（地震による造成地の崩壊、地盤変形など）、低地の住宅地での降雨災害（台風や豪雨時の河川氾濫による冠水など）があげられる。特に浸水被害では、本地域西部の低地など被害が長期化する可能性のある箇所がある。

#### (1) 地震災害

本図幅内をはじめとした大阪市を中心とした沿岸地域ではたびたび大規模な地震被害が発生しており、1891（明治 24）年に発生した濃尾地震、1952（昭和 27）年の吉野地震、1995（平成 7）年の兵庫県南部地震などが挙げられる。兵庫県南部地震では、本図幅を含む大阪市全体で死者・負傷者合わせて約 350 人、全壊・半壊した家屋が約 2,400 棟に上った（「大阪市地域防災計画」大阪市）。

本図幅には旭ヶ丘ニュータウン・高山台ニュータウンなどの元の自然地形を改変した新興の住宅地がある。丘陵地内の宅地等では、地震による建物の倒壊、盛土部分の液状化などが生じる危険性があるため、地域の土地の条件に応じた対策が不可欠である。

#### (2) 水害

本図幅は中央に大和川が流れており、南部の石川や葛下川などの支川がこれに合流する地形となっている。大和川はかつて北に流下して淀川につながっており、たびたび氾濫被害を起こしたために江戸期に付け替えが行われた。現在でも大和川の河川沿いでは水害が度々発生しており、内水氾濫などの被害が発生している。特に 1982（昭和 57）年 8 月豪雨では奈良県で死者・行方不明者 14 名にのぼり、奈良県王寺町をはじめとして床上・床下浸水が 12,000 棟以上に及んだ。

（奈良地方気象台、<http://www.jma-net.go.jp/nara/kishou/jirei/rain.htm>）

山地・丘陵地では本図幅の北東部の大和川沿いから京阪奈丘陵にかけて崖錐や斜面から崩れ落ちてできた麓層面が分布し、降雨量が増加した場合などで崖崩れを生じさせる危険がある。また山地下部や溪流の出口には土砂流が堆積してできた小規模の扇状地（沖積錐）が多く見られ、降雨時に土石流が発生したり溪流から土砂が流出するなどの危険性についても考慮する必要がある。

## 4 土地利用の変遷の概要

### 4.1 過去の土地利用状況の概要

#### (1) 明治41（1908）年頃（現在から概ね100年前）の土地利用

本図幅において発行日が最も古い地形図は、国土地理院の地形図図歴リストによると、大正3（1914）年縮図の5万分の1地形図「大阪東南部」<sup>1</sup>である。この地域では、明治41（1908）～43（1910）年に2万分の1地形図も作られていた（「大阪東南部」図幅は明治41年測図、大正1（1912）年発行）。2万5千分の1地形図はそれより10年以上後の大正10（1921）年頃に測図、同14（1925）年頃に発行された。

明治期の土地利用分類図（第1期）は、図歴リストの5万分の1地形図のうち図面状態が良好であり、修正は部分的で基本的な内容は測図時点が反映されている明治41年測図、大正3年第1回部分修正の5万分の1地形図「大阪東南部」と、明治42（1909）年測図、大正3年一部修正の5万分の1地形図「大阪西南部」（明治期の地形図図郭のずれを補正するため<sup>2</sup>）を選定して、地形図判読により土地利用分類を行ったものである（図4-1）。

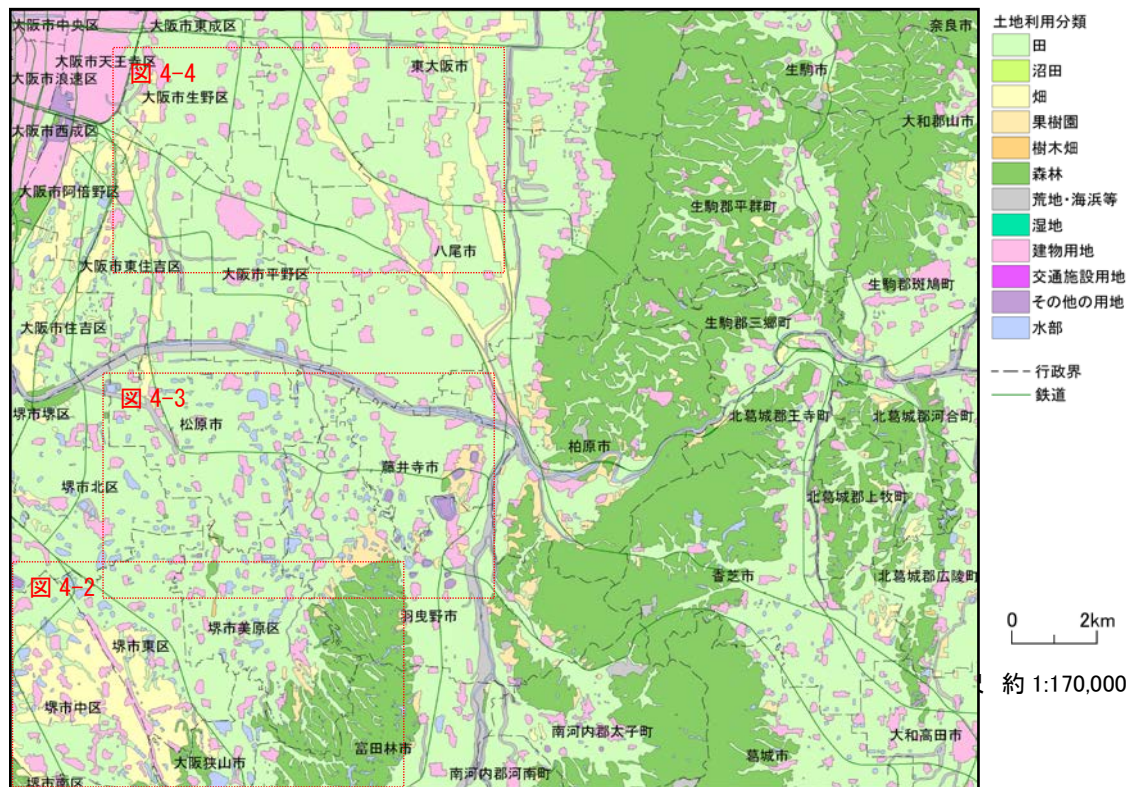


図 4-1 大阪東南部における約 100 年前（明治 41（1908）年頃）の土地利用

<sup>1</sup> 大正3年縮図、同年発行の5万分1地形図「大阪東南部」は、入手した謄本では、擦れた不鮮明な地図描画であったため、本調査には使用しなかった。

<sup>2</sup> 明治期の地形図図郭は測量原点の違いにより、現在の地形図図郭より10秒4東側にずれている。そのため明治期の地形図を現行図に一致させるには、このずれの補正（該当範囲の隣接図からの拡充）が必要になる。



### ① 山地・丘陵地における土地利用

本図幅の山地は、中央東側に大阪府・奈良県境界を南北に連なる**生駒山地**と、これに大和川をはさんで接する**金剛山地**がある。丘陵地は、生駒山地の東側に**京阪奈丘陵**があり、金剛山地の東側に**馬見・香芝丘陵**、西側に**河南丘陵**がある。また、河南丘陵の西を南から北流して大和川に合流する石川の狭い低地をはさんで、**富田林丘陵**と**泉北丘陵**がある。**生駒山地**は、地域内の標高は500m未満と高くはないが落葉樹林に覆われた森林で、全域に分布する樹枝状の谷底低地が水田として利用され、山中にも係らず集落が点在している。山麓の斜面には果樹園も見られる。**金剛山地**は、本図幅外南にある主峰は標高1,000mを越えるが、本図幅内では500m未満の低山で、わずかに水田があるほかは鬱蒼とした森林が続いている。**京阪奈丘陵**も基本的には森林であるが、内部の狭小な谷底低地と龍田川沿いの低地が水田として利用され、畑・果樹園・樹木畑もわずかにあり、集落も点在している。**馬見・香芝丘陵**は、標高が100m程度と低い分、水田として利用されている低地部の面積が広く、畑や集落も京阪奈丘陵よりも多い。**河南丘陵**も同様な土地利用であるが、特に現太子町の低地部には街道沿いに集落が発達している。**富田林丘陵**は、標高100m前後の丘陵内部に樹枝状の低地部が深く刻まれて水田となっているほか、山麓には果樹園があり、小さなため池が多くあることが特徴的である。**泉北丘陵**は、標高は50～80mあるが、他の丘陵地とは異なって森林がほとんどなく、低地部の農地も水田より畑が勝っている。また街道に沿って建物用地（集落）が連続的に分布している（図4-2）。

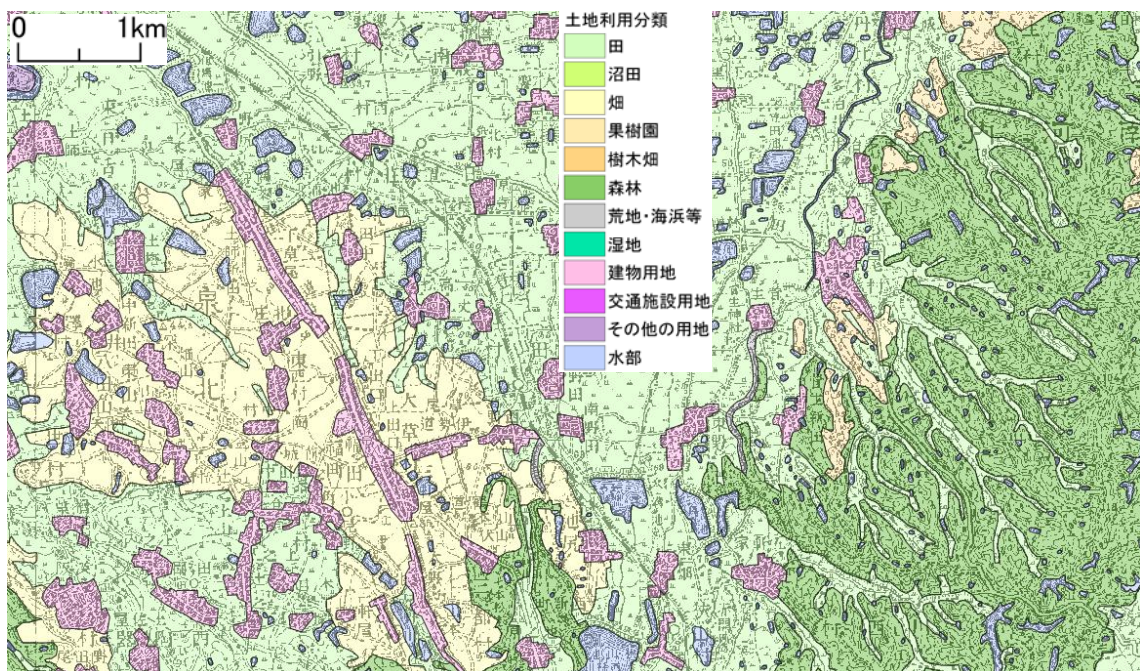


図 4-2 山地・丘陵地の土地利用

5万分の1「大阪東南部」明治41年測図を背景に、この図から取得した明治期の土地利用分類図を表示。

図は中央の低地部（台地）をはさんで東側が富田林丘陵、西側が泉北丘陵である。調査地域の山地・丘陵は、富田林丘陵のように森林の中の谷地に水田、山麓に畑と集落という形態のものが多い。富田林丘陵にはため池が多いという特徴がある。一方、泉北丘陵は、標高的には他の丘陵と余り変わらないが、土地利用の状況は大きく異なる。森林がほとんどなく、畑の面積が大きく、集落の分布も多い。

## ②台地における土地利用

本図幅の台地は、富田林丘陵の北に接する河内台地と、泉北丘陵の北に接する泉北台地、さらに北西部に上町台地がある。河内台地と泉北台地には、水田が広がり、農業集落が点在している。畑は少なく、台地の北端を大和川が流れているが、台地内を流れる河川は少ないため、ため池が多く点在している。本図幅内の上町台地は、農業集落とため池の点在する農地となっていることは変わらないが、農地の種類は畑が多くなっている。また、台地の和川以南の範囲には、天皇陵などの古墳時代の遺跡が多いことが特徴となっている（図 4-3）。

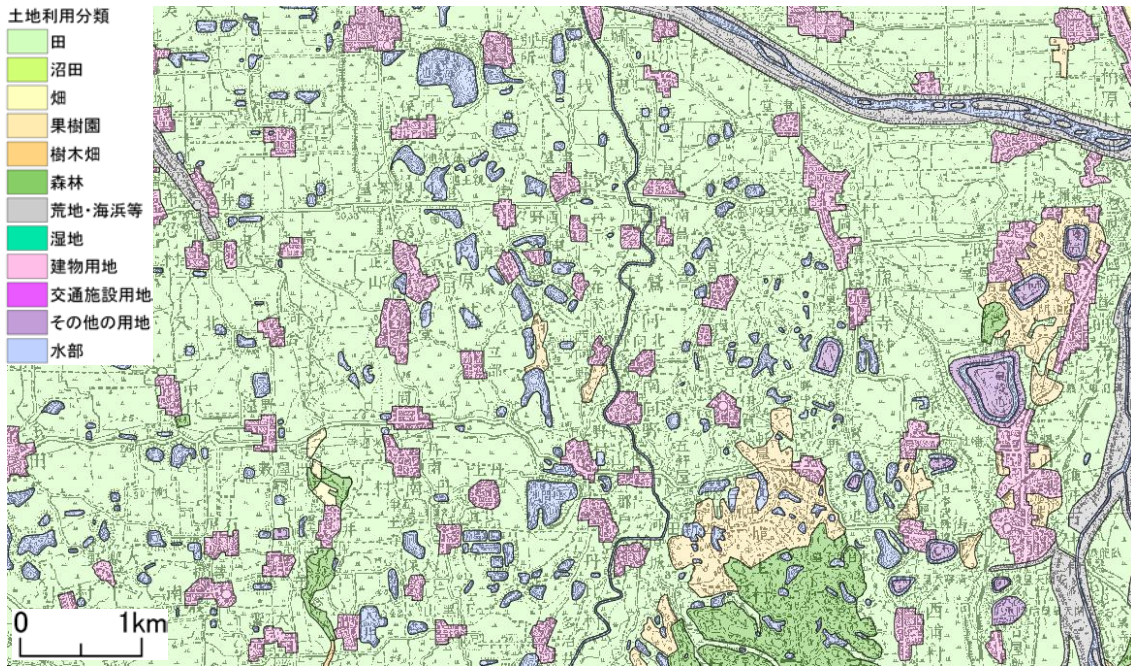


図 4-3 台地の土地利用

5万分の1地形図「大阪東南部」明治41年測図を背景に、この図から取得した明治期の土地利用分類図を表示。  
図の河内台地には、水田が広がり、農業集落が点在する。ため池が多く見られることと、天皇陵などの遺跡が多く分布していることが特徴となっている。

## ③低地における土地利用

本図幅の低地は、東南部に奈良盆地の西端がかかっているほかに、中央南部から北流して大和川に合流する石川沿いの石川低地、大和川以北の旧大和川低地と寝屋川低地があり、北西端には堺・泉北海岸低地がわずかにかかっている。奈良盆地には水田が広がり、集落とため池が点在している。旧大和川低地と寝屋川低地も、主な土地利用は田で、集落が点在している。集落の中には、平野郷町（現大阪市平野区）や八尾町（現八尾市）などの密集した旧市街地もあるが、それ以外は農業集落が主であり、大阪市中心に至近の位置にあって、鉄道も通っているが、明治期は大部分が農業的土地利用であった。なおこの範囲は、大和川の流路変更以前の流域であったが、付け替え前の主流路であった長瀬川と玉串川沿いが連続して畑となっているのが特徴的である。本図幅の堺・泉北海岸低地は、現在の大阪市中央区・天王寺区の範囲にあたり、明治期にすでに大阪市の中心市街地であり、全域が建物用地となっている（図 4-4）。

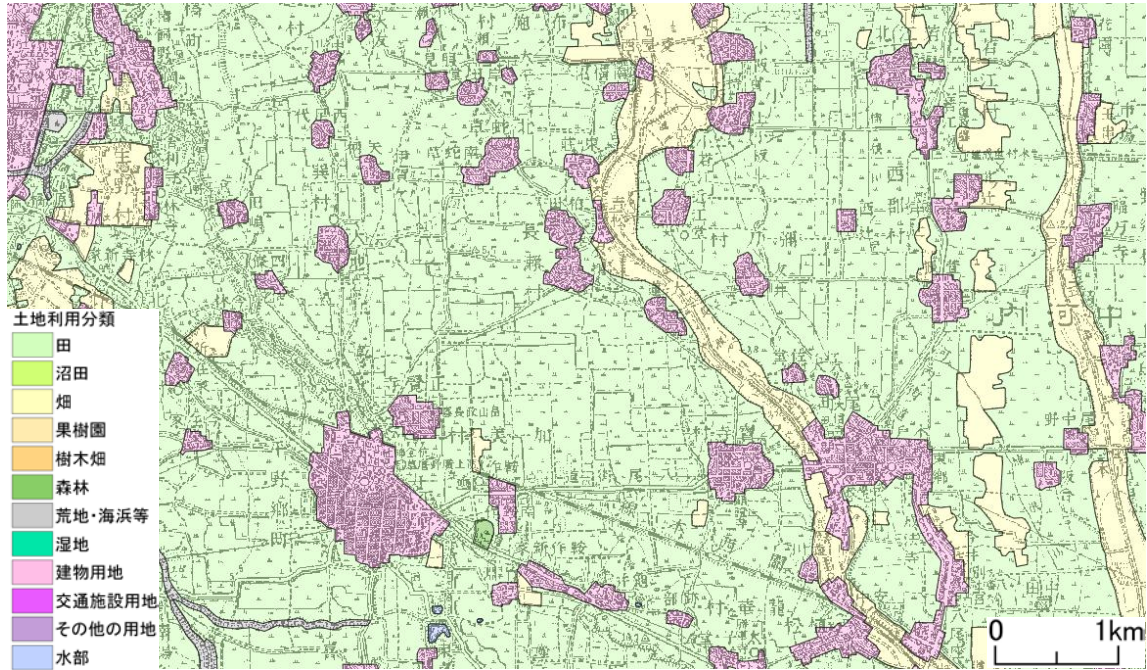


図 4-4 低地の土地利用

5 万分の 1 地形図「大阪東南部」明治 41 年測図を背景に、この図から取得した明治期の土地利用分類図を表示。  
 図の南を西流する大和川の北側に広がる旧大和川低地は、主に水田として利用され、集落が点在する。集落の中には図の下部にも見られる密集した古くからの市街地もあるが、それ以外は農業集落がほとんどであり、この図の左上に一部見える大阪市の中心市街地に至近の位置である割には都市化が進んでいない。図の右に見える南北に連続した畑は、付け替え前の大和川の主流路である。

本図幅は、大阪の中心市街地から 20km 以内である低地が広がっていて、明治期にすでに鉄道が通る交通利便性の良い場所である。しかし、明治期の土地利用を見ると、歴史のある古い市街地が分布する地域以外では、農業的土地利用がほとんどであり、集落の分布も旧来のもの（水田地帯に点在する農業集落、街道沿いに連続する集落、密集した旧市街地など）である。

## (2) 昭和 43 (1968) 年頃 (現在から概ね 40 年前) の土地利用

昭和期の土地利用分類図 (第 2 期) は、昭和 43 (1968) 年に編集された 5 万分の 1 地形図「大阪東南部」を使用して、地形図判読により土地利用分類を行った (図 4-5)。昭和 44 年発行の 5 万分の 1 地形図「大阪東南部」は、同 42 年に空中写真測量により作成された 2 万 5 千分の 1 地形図を編集したものである。

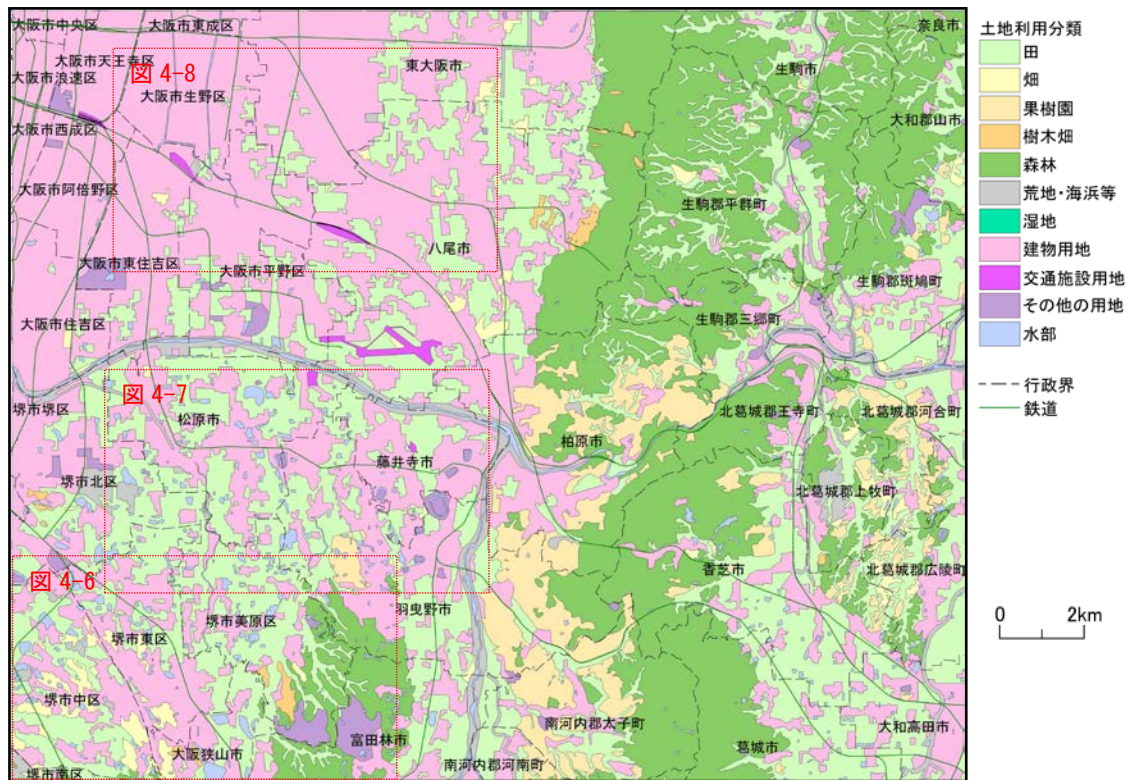


図 4-5 大阪東南部における約 40 年前 (昭和 43 (1968) 年頃) の土地利用

### ①山地・丘陵地における土地利用

本図幅の山地・丘陵地の標高の高い森林に覆われた範囲では、基本的な土地利用は明治期から大きな変化はないが、周縁部や標高の低い平坦地では変化が現れている。ひとつは、**生駒山地**の南部や**金剛山地**の東部、**河南丘陵**において農地（主は果樹園）が拡大していることである。この地域の柏原市、羽曳野市、太子町はぶどうが特産物となっていて、大正期以降拡大したぶどう栽培は、昭和初期には大阪府が全国一の生産量になる程であった。戦後は他府県でも栽培されるようになって、農地は縮小しているが、昭和期においても上図に示すように大きな面積で広がっていた。もうひとつの変化は、主に平地で大きく変化した宅地化・市街地の拡大が丘陵地にも現れていることである。例えば、**富田林丘陵**の北部で明治期には森林であった箇所が建物用地に変化している。これは丘陵地に造成された住宅地で、昭和期には鉄道駅の周辺を中心に宅地化が進んだが、丘陵地山麓でもこのような駅に近い場所での宅地開発が活発であったことを示している。富田林丘陵では、住宅地の造成以外にも、図中で「その他の用地」で示される場所のゴルフ場や工場団地の造成があった。標高の低い**泉北丘陵**の宅地化は特に顕著で、畑を主とした農地が宅地に転用されている。この宅地化は、明治期の集落分布と異なり、鉄道駅近くに多く現れている傾向がある（図 4-6）。

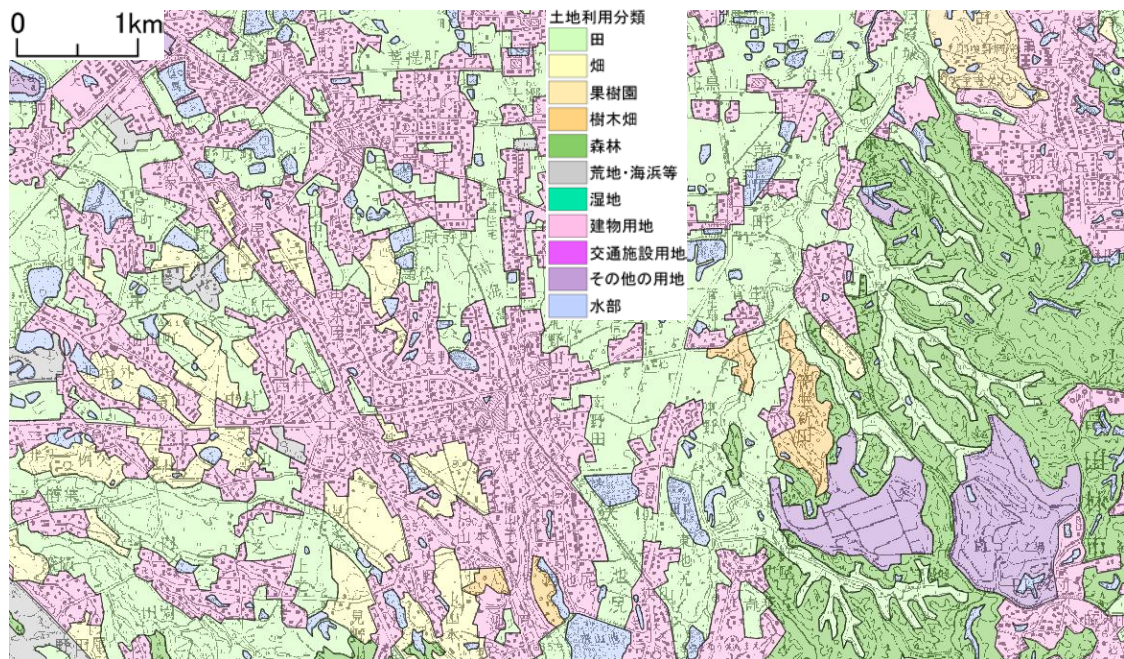


図 4-6 山地・丘陵地の土地利用

5 万分の 1 地形図「大阪東南部」昭和 43 年編集を背景に、この図から取得した昭和期の土地利用分類図を表示。

図は東側が富田林丘陵、西側が泉北丘陵で、明治期の同じ場所の図（図 4-2）と比較すると、宅地化により土地利用が大きく変化していることが分かる。富田林丘陵の図右上隅は、森林であった丘陵地に開発された住宅地である。また、下にある「その他の用地」はゴルフ場（右）と工場団地（左）である。この昭和期の図ではまだ森林が残っているが、この地域ではその後さらに開発が進み、新たな住宅地の開発やゴルフ場の造成、大学の立地などで森林はほぼ姿を消した。泉北丘陵でも、明治期には田畑の中に点在していた集落が拡大して、まとまりのある市街地を形成している。特に、鉄道駅がその分布の中心となっていることが明治期と大きく異なる点である。

## ②台地における土地利用

本図幅では、台地においても大きく土地利用が変化した。明治期と比較して見ると、河内台地や泉北台地で水田地帯に点在していた集落が、周辺に拡大してまとまった市街地に発達した。これは、明治期の農業集落の規模が大きくなったというよりも、人口の流入があつて、新たな宅地が形成されたものと見ることができる。新たに形成された宅地は、鉄道駅が分布の中心となっている。宅地が拡大しているとはいえ、まだ田を主とした農地が残されている。つまり、この地域は、新興住宅地と旧集落、工場が混在した住宅街、農地が入り混じって構成されていると考えられる。北東部の上町台地では、大阪中心市街地の拡大に完全に飲み込まれて、明治期に残っていた農地は姿を消した（図 4-7）。

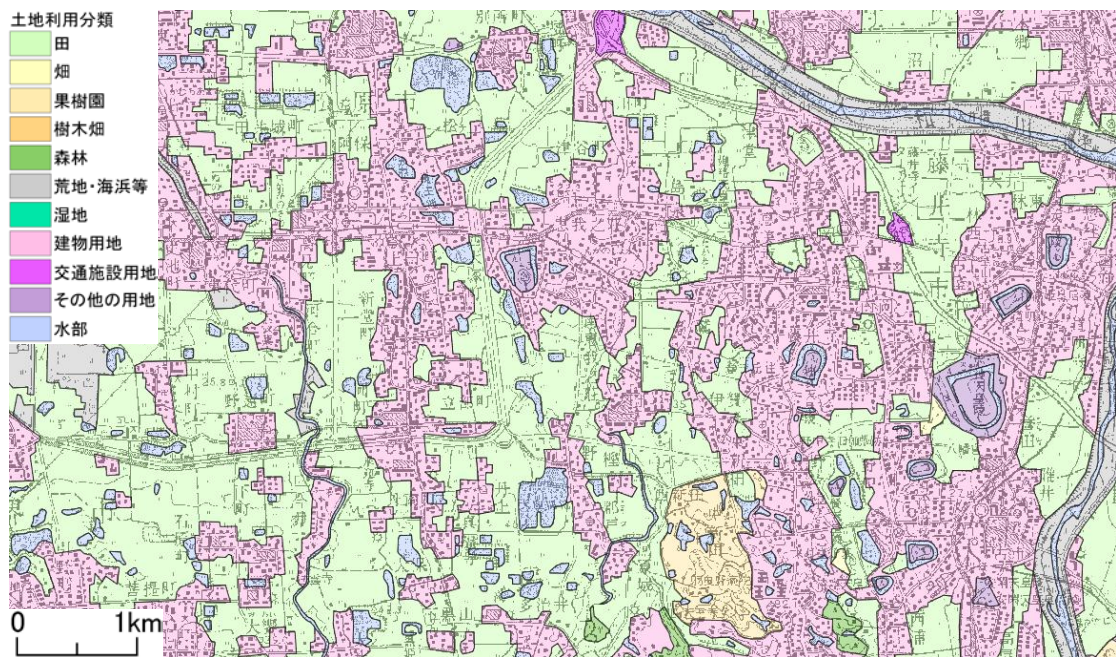


図 4-7 台地の土地利用

5 万分の 1 地形図「大阪東南部」昭和 43 年編集を背景に、この図から取得した昭和期の土地利用分類図を表示。

台地では昭和期に住宅地が拡大した。上図の河内台地（松原市、明治期の図 4-3 と同じ範囲）では、水田が宅地に転用され、鉄道駅を中心とした市街地が形成されている。宅地化が進んだといっても、逆に見ると、昭和期にはまだ農地が残っていたということもできる。この地域は、現在も住宅の中に水田やため池のある田園風景となっている。

## ② 低地における土地利用

本図幅の低地では、昭和期に丘陵地以上に住宅地化が進んだ。**奈良盆地**の本図幅の範囲は、奈良県北西部のかつては水田が広がっていた地域であったが、田を転用した建物用地が増加した。この地域は、鉄道利用の交通の便の良いところのため、建物用地の増加は、従来の農業集落が拡大しただけでなく、大阪中心部への通勤者のベッドタウンとしての住宅の増加である。**石川低地**においても同様に田が建物用地に変化している。ただし、これらの地域は、昭和期にはまだある程度田が残っており、農業的土地利用が消滅してはいない。これに対して、**旧大和川低地**と**寝屋川低地**では、大阪中心部から放射状に東に伸びる鉄道路線沿線を中心に、同心円的に市街地が拡大し、建物用地で埋め尽くされた状態となった。図 4-5 からは昭和期にもこの地域に田が残されているように見えるが、地形図の作成時期（昭和 43 年編集）により、宅地に転換する直前の過渡的な状況である。この地域では、この後、昭和 45 年に開催された万国博覧会に合わせて道路などの社会基盤が整備された（図 4-8 の中央を南北に通る中央環状線は、この図の編集時は供用直前で、道路敷地部分に田が残っているのは、そのためである）。これに伴い、図 4-5 の時点では残されていた田も、大和川以北のこの地域では、生駒山地山麓にわずかに残るだけとなっている。建物用地の内容は、住宅が主であるが、北東の大阪市中心に近い範囲は商業・事務系の建物も多い。また、東大阪市、八尾市などの東大阪地区では、中小の工場等が集積した地域も見られる。（図 4-8）。

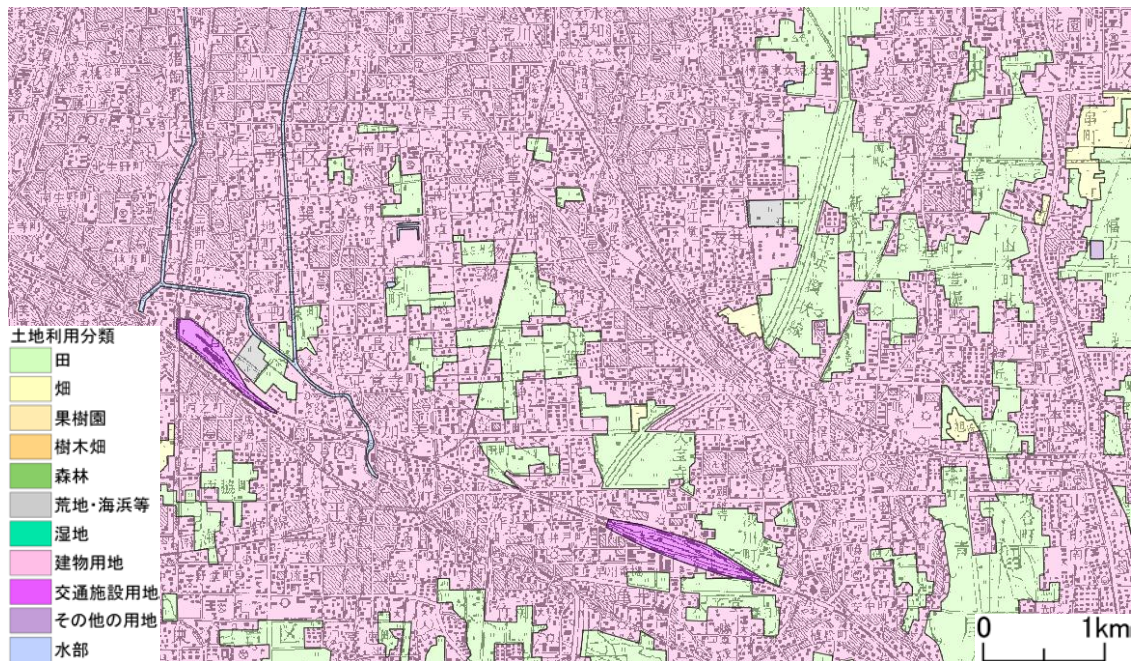


図 4-8 低地の土地利用

5 万分の 1 地形図「大阪東南部」昭和 43 年編集を背景に、この図から取得した昭和期の土地利用分類図を表示。

図の旧大和川低地は、明治期（図 4-4）と比較すると、田・畑の面積がごくわずかになって建物用地で埋め尽くされている。図中の中央環状線の部分も、この後供用が始まり、周囲は建物用地に変化する。この道路と図中左から右下へ通る国道 25 号線沿いの地域には、中小企業の工場が集積した地区もある。

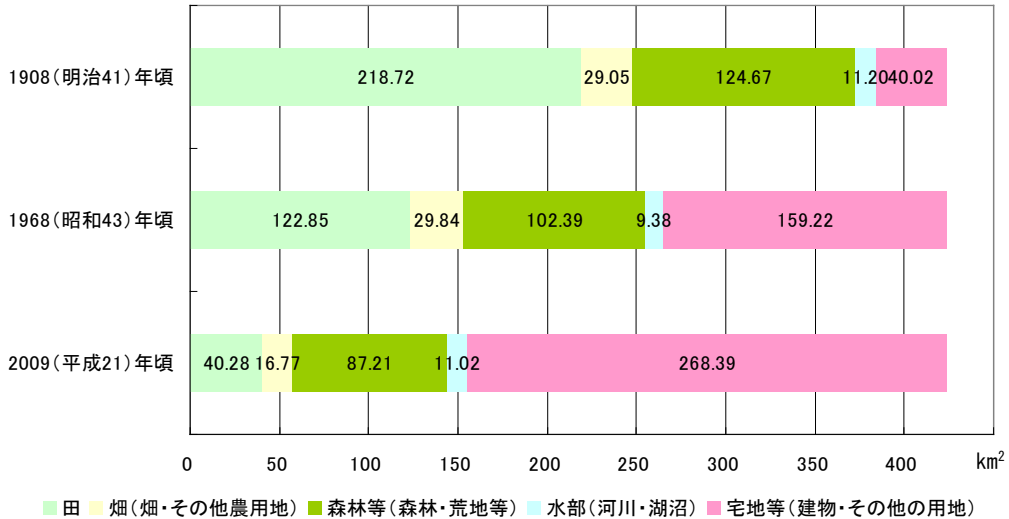
本図幅における昭和期の土地利用は、大阪中心部へ通勤するもののベッドタウンとして、また大都市の需要・消費を背景とした商工の拠点として、丘陵地・低地の農地において都市化が進み変化した。低地においては、ほぼ農地が無くなったという状況である。しかし、台地や丘陵地、山地山麓にはわずかに農地が残っており、生駒山地などの森林を含めて、自然と親しめる緑に恵まれた地域である。



## 4.2 土地利用変遷の概要

### (1) 土地利用面積の推移

図 4-9 と表 4-1 は現在から概ね 100 年前及び 40 年前の 2 時期の土地利用分類図と、土地利用細分メッシュデータ (国土数値情報、2009) から、調査地域における田、畑 (畑・その他の農用地)、森林等 (森林・荒地等)、水部 (河川・湖沼)、宅地等 (建物・その他の用地) の主要な土地利用 5 項目についての面積集計結果である。



土地利用分類の内訳は次の通り。(〔 〕は国土数値情報土地利用細分メッシュデータの分類)

田：田、沼田 [田] 畑：畑、果樹園、樹木畑 [その他の農用地]

森林等：森林、荒地・海浜等、湿地 [森林、荒地、海浜] 水部：水部 (ただし海水域は除く) [河川地及び湖沼]

宅地等：建物用地、交通施設用地、その他の用地 [建物用地、道路、鉄道、その他の用地、ゴルフ場]

図 4-9 土地利用別面積の推移 (1908、1968、2009 年)

表 4-1 土地利用別面積の推移 (1908、1968、2009 年)

単位：km<sup>2</sup>

区分	市区町村	大阪府										
		大阪市天王寺区	大阪市浪速区	大阪市東成区	大阪市生野区	大阪市阿倍野区	大阪市住吉区	大阪市東住吉区	大阪市西成区	大阪市平野区	大阪市中央区	大阪市合計
1908 (明治41) 年頃	田	0.27	0.01	1.05	6.93	2.26	4.10	6.74	0.22	12.42	0.00	33.99
	畑(畑・その他農用地)	0.00	0.00	0.00	0.47	1.55	1.93	1.58	0.11	0.17	0.00	5.81
	森林等(森林・荒地等)	0.04	0.00	0.00	0.08	0.49	0.46	0.41	0.08	0.66	0.00	2.22
	水部(河川・湖沼)	0.01	0.01	0.00	0.00	0.24	0.33	0.16	0.00	0.37	0.06	1.18
	宅地等(建物・その他の用地)	3.80	1.81	0.28	0.88	1.41	0.48	0.87	1.06	1.65	1.10	13.33
1968 (昭和43) 年頃	田	0.00	0.00	0.00	0.24	0.00	0.35	1.19	0.00	3.96	0.00	5.75
	畑(畑・その他農用地)	△ 0.27	△ 0.01	△ 1.05	△ 6.69	△ 2.26	△ 3.74	△ 5.55	△ 0.22	△ 8.46	0.00	△ 28.24
	森林等(森林・荒地等)	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.14	0.08	0.00	0.01	0.00	0.24
	水部(河川・湖沼)	0.00	0.00	0.00	△ 0.47	△ 1.55	△ 1.78	△ 1.49	△ 0.11	△ 0.16	0.00	△ 5.57
	宅地等(建物・その他の用地)	△ 0.04	0.00	0.00	△ 0.08	△ 0.49	△ 0.26	△ 0.23	△ 0.08	△ 0.15	0.00	△ 1.34
2009 (平成21) 年頃	田	0.01	0.00	0.03	0.21	0.03	0.15	0.10	0.00	0.33	0.00	0.87
	畑(畑・その他農用地)	△ 0.00	△ 0.01	△ 0.03	△ 0.21	△ 0.20	△ 0.18	△ 0.06	0.00	△ 0.04	△ 0.06	△ 0.31
	森林等(森林・荒地等)	4.11	1.83	1.30	7.91	5.92	6.44	8.20	1.46	10.45	1.16	48.79
	水部(河川・湖沼)	0.31	0.02	1.02	7.03	4.51	5.96	7.33	0.41	8.81	0.06	35.47
	宅地等(建物・その他の用地)	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.00	0.04	0.00	0.05
2009 (平成21) 年頃	田	△ 0.27	△ 0.01	△ 1.05	△ 6.93	△ 2.26	△ 4.10	△ 6.73	△ 0.22	△ 12.38	0.00	△ 33.95
	畑(畑・その他農用地)	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.02
	森林等(森林・荒地等)	0.00	0.00	0.00	△ 0.47	△ 1.55	△ 1.92	△ 1.56	△ 0.11	△ 0.17	0.00	△ 5.79
	水部(河川・湖沼)	0.06	0.00	0.00	0.01	0.02	0.01	0.38	0.00	0.06	0.00	0.55
	宅地等(建物・その他の用地)	0.02	0.00	0.00	△ 0.07	△ 0.47	△ 0.45	△ 0.02	△ 0.08	△ 0.60	0.00	△ 1.67
2009 (平成21) 年頃	田	0.00	0.00	0.00	0.00	0.03	0.33	0.15	0.00	0.56	0.00	1.06
	畑(畑・その他農用地)	△ 0.01	△ 0.01	△ 0.00	0.00	△ 0.21	△ 0.00	△ 0.00	0.00	0.19	△ 0.06	△ 0.12
	森林等(森林・荒地等)	4.07	1.83	1.34	8.35	5.90	6.95	9.18	1.46	14.61	1.17	54.87
	水部(河川・湖沼)	0.27	0.02	1.06	7.47	4.49	6.47	8.32	0.41	12.96	0.06	41.54
	宅地等(建物・その他の用地)											

表 4-1 土地利用別面積の推移 (1908、1968、2009 年) (続き)

単位 : km<sup>2</sup>

大阪府																	
堺市 堺区	堺市 中区	堺市 東区	堺市 南区	堺市 北区	堺市 美原区	堺市 合計	八尾市	富田林 市	松原市	柏原市	羽曳野 市	藤井寺 市	東大阪 市	大阪狭 山市	南河内 郡 太子町	南河内 郡 河南町	府合計
0.54	4.78	6.64	0.36	10.82	8.32	31.46	26.60	5.16	13.09	7.16	12.58	6.43	17.62	2.09	4.91	1.21	227.75
0.01	4.80	2.13	0.15	0.22	0.46	7.76	3.88	0.11	0.32	1.95	1.83	0.55	3.54	0.70	0.17	0.04	40.23
0.04	0.06	0.12	0.18	0.59	2.71	3.70	7.27	5.46	0.83	14.28	9.04	0.53	5.30	0.71	7.85	0.68	63.59
0.05	0.55	0.50	0.01	0.78	0.78	2.66	0.30	0.45	1.07	0.52	1.17	0.46	0.14	0.49	0.12	0.06	12.46
0.03	1.70	1.07	0.09	1.12	0.96	4.96	3.64	0.50	1.34	1.41	1.81	0.91	2.55	0.39	0.55	0.22	49.91
0.00	4.68	3.86	0.33	5.19	6.65	20.71	14.82	3.47	7.80	3.10	8.08	2.98	5.35	1.80	2.71	0.88	103.91
△ 0.54	△ 0.10	△ 2.78	△ 0.03	△ 5.62	△ 1.67	△ 10.75	△ 11.77	△ 1.69	△ 5.29	△ 4.06	△ 4.49	△ 3.44	△ 12.27	△ 0.29	△ 2.20	△ 0.33	△ 123.84
0.00	1.88	0.53	0.09	0.16	0.49	3.15	1.59	0.03	0.06	7.26	4.76	0.03	0.54	0.40	4.01	0.45	25.90
△ 0.01	△ 2.91	△ 1.60	△ 0.06	△ 0.06	0.03	△ 4.61	△ 2.30	△ 0.09	△ 0.26	5.31	2.93	△ 0.52	△ 3.01	△ 0.30	3.84	0.41	△ 14.33
0.00	0.45	0.00	0.31	1.13	1.95	3.85	6.38	4.08	0.88	8.94	4.15	0.66	4.98	0.05	5.24	0.41	45.02
△ 0.04	0.39	△ 0.12	0.14	0.55	△ 0.76	0.16	△ 0.89	△ 1.38	△ 0.15	△ 5.34	△ 4.89	0.13	△ 0.33	△ 0.66	△ 2.41	△ 0.27	△ 18.57
0.06	0.56	0.47	0.01	0.67	0.66	2.42	0.17	0.37	1.02	0.41	0.93	0.38	0.06	0.49	0.07	0.03	10.52
0.01	0.01	△ 0.03	△ 0.00	△ 0.11	△ 0.12	△ 0.24	△ 0.13	△ 0.08	△ 0.04	△ 0.11	△ 0.23	△ 0.08	△ 0.08	△ 0.01	△ 0.05	△ 0.03	△ 1.94
0.60	4.31	5.59	0.05	6.37	3.48	20.41	18.73	3.75	7.09	5.60	8.51	4.82	18.23	1.65	1.37	0.43	208.58
0.57	2.62	4.53	△ 0.04	5.25	2.53	15.45	15.09	3.25	5.75	4.19	6.70	3.91	15.88	1.26	0.81	0.21	158.68
0.00	1.40	1.33	0.01	0.81	2.57	6.11	2.93	1.13	2.34	0.63	2.57	0.41	0.88	0.59	1.49	0.73	26.01
△ 0.54	△ 3.38	△ 5.31	△ 0.35	△ 10.01	△ 5.75	△ 25.35	△ 23.67	△ 4.04	△ 10.75	△ 6.53	△ 10.01	△ 6.02	△ 16.74	△ 1.50	△ 3.41	△ 0.49	△ 201.74
0.00	0.72	0.04	0.01	0.00	0.35	1.12	0.83	0.20	0.02	3.69	3.48	0.02	0.03	0.49	2.76	0.02	13.82
△ 0.01	△ 4.08	△ 2.09	△ 0.14	△ 0.22	△ 0.10	△ 6.64	△ 3.05	0.08	△ 0.29	1.74	1.65	△ 0.54	△ 3.51	△ 0.22	2.59	△ 0.02	△ 26.40
0.00	0.12	0.00	0.04	0.63	0.77	1.56	6.22	1.43	0.00	10.55	3.29	0.02	4.76	0.08	5.66	0.30	36.52
△ 0.04	0.05	△ 0.12	△ 0.14	0.04	△ 1.94	△ 2.14	△ 1.05	△ 0.44	△ 0.83	△ 3.73	△ 5.75	△ 0.50	△ 0.54	△ 0.63	△ 1.99	△ 0.38	△ 27.08
0.06	0.30	0.30	0.01	0.48	0.45	1.60	0.27	0.75	0.99	0.97	1.37	0.83	0.05	0.37	0.01	0.10	11.04
0.01	△ 0.25	△ 0.21	0.00	△ 0.29	△ 0.32	△ 1.06	△ 0.03	0.29	△ 0.07	0.45	0.21	0.37	△ 0.09	△ 0.12	△ 0.11	0.04	△ 1.42
0.61	9.35	8.78	0.71	11.61	9.07	40.14	31.43	8.17	13.29	9.48	15.72	7.60	23.50	2.84	3.47	1.05	306.56
0.58	7.66	7.72	0.62	10.48	8.12	35.18	27.79	7.66	11.95	8.07	13.90	6.68	20.95	2.45	2.91	0.83	256.65

奈良県														合計	
奈良市	大和高 田市	大和郡 山市	生駒市	香芝市	葛城市	生駒郡 平群町	生駒郡 三郷町	生駒郡 斑鳩町	生駒郡 安堵町	北葛城 郡 上牧町	北葛城 郡 王寺町	北葛城 郡 広陵町	北葛城 郡 河合町	県合計	合計
0.17	5.07	2.02	3.07	11.26	5.39	6.44	2.99	6.56	0.39	2.21	2.66	5.13	3.07	56.43	218.72
0.00	0.03	0.25	0.04	0.43	0.06	0.18	0.03	0.22	0.00	0.15	0.27	0.39	0.34	2.39	29.05
1.09	0.68	4.18	6.08	10.82	6.04	15.94	4.97	5.00	0.08	3.38	3.41	1.86	3.46	66.99	124.67
0.01	0.15	0.09	0.10	0.61	0.13	0.16	0.24	0.30	0.03	0.13	0.20	0.24	0.22	2.59	11.20
0.01	1.13	0.39	0.45	1.13	0.55	1.16	0.56	1.21	0.05	0.27	0.46	0.55	0.47	8.40	40.02
0.20	3.32	2.24	2.95	8.66	4.57	6.56	1.96	5.01	0.30	1.77	0.82	4.06	2.97	45.40	122.85
0.03	△ 1.76	0.22	△ 0.12	△ 2.59	△ 0.82	0.12	△ 1.03	△ 1.55	△ 0.09	△ 0.44	△ 1.84	△ 1.07	△ 0.10	△ 11.03	△ 95.87
0.00	0.04	0.23	0.04	1.56	0.04	0.27	0.31	0.72	0.00	0.93	0.05	1.14	1.99	7.33	29.84
0.00	0.01	△ 0.02	0.00	1.13	△ 0.02	0.10	0.29	0.50	0.00	0.78	△ 0.22	0.75	1.64	4.94	0.79
1.04	0.41	4.12	6.10	10.08	6.06	15.32	4.70	4.45	0.08	2.68	4.24	1.35	1.47	62.10	102.39
△ 0.05	△ 0.28	△ 0.06	0.02	△ 0.74	0.02	△ 0.62	△ 0.28	△ 0.54	0.00	△ 0.70	0.82	△ 0.50	△ 2.00	△ 4.90	△ 22.28
0.01	0.19	0.08	0.04	0.45	0.12	0.05	0.18	0.36	0.03	0.09	0.18	0.20	0.18	2.15	9.38
△ 0.00	0.05	△ 0.01	△ 0.05	△ 0.16	△ 0.01	△ 0.11	△ 0.06	0.06	0.00	△ 0.04	△ 0.02	△ 0.04	△ 0.04	△ 0.44	△ 1.82
0.02	3.10	0.25	0.60	3.49	1.38	1.68	1.64	2.75	0.14	0.68	1.71	1.42	0.96	19.83	159.22
0.02	1.98	△ 0.13	0.15	2.36	0.83	0.52	1.08	1.53	0.08	0.41	1.25	0.87	0.49	11.43	119.19
0.06	1.32	1.23	1.24	2.63	2.40	3.54	0.47	2.79	0.21	0.67	0.35	2.10	1.42	20.43	40.28
△ 0.11	△ 3.75	△ 0.79	△ 1.83	△ 8.63	△ 3.00	△ 2.90	△ 2.52	△ 3.77	△ 0.18	△ 1.54	△ 2.31	△ 3.03	△ 1.65	△ 36.00	△ 178.44
0.00	0.05	0.03	0.00	0.17	0.03	1.68	0.21	0.43	0.00	0.39	0.10	0.22	0.78	4.09	16.77
0.00	0.02	△ 0.22	△ 0.04	△ 0.26	△ 0.03	1.50	0.18	0.22	0.00	0.24	△ 0.18	△ 0.17	0.44	1.70	△ 12.28
1.10	0.04	4.35	5.75	7.62	6.05	14.62	3.71	4.33	0.00	1.36	2.23	0.61	1.01	52.80	87.21
0.01	△ 0.64	0.17	△ 0.33	△ 3.20	0.01	△ 1.32	△ 1.26	△ 0.67	△ 0.08	△ 2.01	△ 1.18	△ 1.24	△ 2.45	△ 14.19	△ 37.46
0.00	0.15	0.06	0.02	0.34	0.13	0.03	0.31	0.55	0.10	0.04	0.44	0.20	0.25	2.63	11.02
△ 0.01	0.01	△ 0.02	△ 0.07	△ 0.28	0.01	△ 0.13	0.07	0.25	0.07	0.09	0.25	△ 0.04	0.04	0.05	△ 0.19
0.12	5.49	1.25	2.75	13.49	3.54	4.01	4.09	5.19	0.24	3.68	3.88	5.03	4.09	56.85	268.39
0.11	4.36	0.86	2.29	12.36	2.99	2.85	3.53	3.98	0.19	3.40	3.42	4.49	3.62	48.44	228.37

1. 1908年及び1968年は土地利用分類図の図上計測値。2009年は国土数値情報（土地利用細分メッシュ）による集計値。

2. 1968年及び2009年の下段は、1908年からの増減量。

3. 行政区域は2012（平成24）年4月1日現在の区域を当てはめた。

1908年には、田が最も多く約219km<sup>2</sup>あり、次いで森林が約125km<sup>2</sup>、畑は約29km<sup>2</sup>と、農業的土地利用は全体の約58%、宅地等は全体の約9%の40km<sup>2</sup>程であった。地域別では、田は、大阪市が約34km<sup>2</sup>、堺市約33km<sup>2</sup>、八尾市約27km<sup>2</sup>と多く、東大阪市、松原市、羽曳野市、香芝市でも10km<sup>2</sup>以上の面積があった。森林等は、10km<sup>2</sup>以上の面積があったのが、平群町、柏原市、香芝市、5km<sup>2</sup>以上あったのが、羽曳野市、八尾市、富田林市、東大阪市、太子町、生駒市、葛城市、三郷町、斑鳩町と、山地・丘陵地に位置する市町には大きな面積が残っていた。畑は、堺市が約8km<sup>2</sup>と最も多く、大阪市が約6km<sup>2</sup>、八尾市、東大阪市が約4km<sup>2</sup>であった。宅地等は、大阪市が約13km<sup>2</sup>と最も多く、本図幅の宅地面積の1/3を占めていた。次いで堺市が約5km<sup>2</sup>、八尾市約4km<sup>2</sup>、東大阪市約3km<sup>2</sup>、羽曳野市が約2km<sup>2</sup>と多かった。

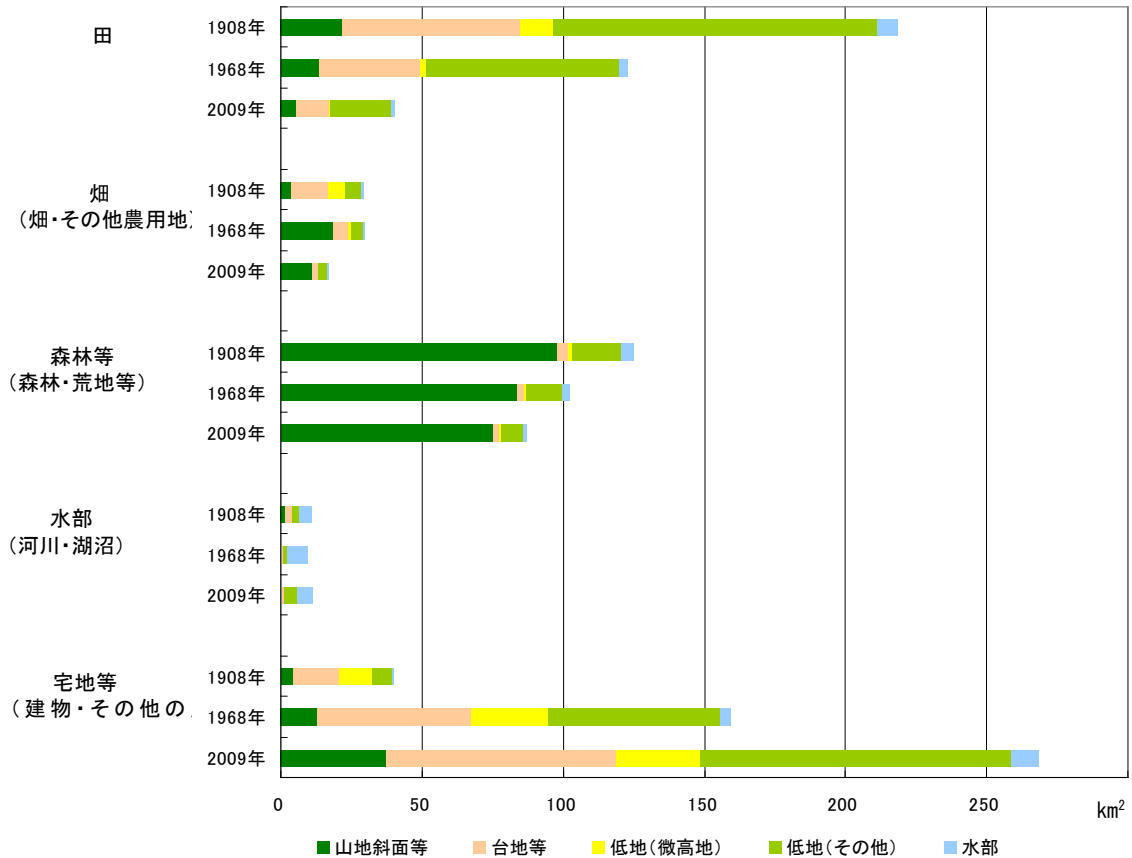
1968年になると、**田**は約123km<sup>2</sup>（明治期比56.2%）、**森林等**は約102km<sup>2</sup>（同82.1%）と減少した。**畑**は約30km<sup>2</sup>（同102.7%）と、ほぼ明治期と変わらなかった。一方で**宅地等**は約159km<sup>2</sup>（同397.9%）と大きく増加した。地域別では、**田**は、大阪市で明治期より28km<sup>2</sup>以上失われて約6km<sup>2</sup>となり、堺市が約21km<sup>2</sup>、八尾市約15km<sup>2</sup>と減少した。これら以外に昭和期に10km<sup>2</sup>以上の田がある市町は無くなった。**森林等**は、減少したものの、平群町、香芝市で10km<sup>2</sup>以上、八尾市、柏原市、東大阪市、太子町、生駒市、葛城市、三郷町で5km<sup>2</sup>前後の面積が残っていた。**畑**は、柏原市が約7km<sup>2</sup>、羽曳野市約5km<sup>2</sup>、太子町約4km<sup>2</sup>と増加した以外は減少し、明治期に最も多かった堺市は約3km<sup>2</sup>、大阪市は1km<sup>2</sup>未満となった。これに対して**宅地等**はほぼ全市町で増加し、特に増加幅の大きかった大阪市は約49km<sup>2</sup>、堺市約20km<sup>2</sup>、八尾市が約19km<sup>2</sup>、東大阪市が約18km<sup>2</sup>となり、羽曳野市、松原市、柏原市、藤井寺市で5km<sup>2</sup>以上となった。

昭和から平成にかけては、**田**が約40km<sup>2</sup>、**森林等**が約87km<sup>2</sup>、**畑**は約17km<sup>2</sup>とそれぞれ減少し、その分**宅地等**は昭和期の約1.7倍、明治期の約6.7倍の約268km<sup>2</sup>に拡大して本図幅の63.3%の面積を占めるようになった。地域別では、**田**、**畑**、**森林等**はほぼ全市町で減少し、**田**が10km<sup>2</sup>以上残っている市は無くなり、もっとも多い堺市が6km<sup>2</sup>で、八尾市、松原市、羽曳野市、香芝市、葛城市、平群町、斑鳩町で2~4km<sup>2</sup>となった。**森林等**が10km<sup>2</sup>以上残っているのは平群町、柏原市で、八尾市、東大阪市、太子町、生駒市、香芝市、葛城市でも5km<sup>2</sup>前後の面積が残っていた。**畑**は、柏原市が約4km<sup>2</sup>、羽曳野市、太子町が約3km<sup>2</sup>、平群町が約2km<sup>2</sup>、堺市が約1km<sup>2</sup>残っているものの、他の市町はすべて1km<sup>2</sup>未満となった。**宅地等**は、**田**・**畑**・**森林等**の減少分がすべて転換されたことにより、明治期と比較して全市町で大幅に増加し、大阪市が約55km<sup>2</sup>、堺市が約40km<sup>2</sup>となったほか、八尾市約31km<sup>2</sup>、東大阪市約24km<sup>2</sup>、羽曳野市約16km<sup>2</sup>、松原市と香芝市が約13km<sup>2</sup>となった。これは、明治期比で大阪市では約4倍、他の市は8~12倍になったということである。

以上より、明治期から昭和期、平成期と、この地域の都市化（建物用地の増加）は著しく、明治期と平成期では**田**と**宅地等**の面積が逆転している。人口の減少や高齢化により、農業のおかれている状況は厳しく、特に本図幅の平地などのように都市にある農地では、そこで今後も生産活動を続けていくことは困難と思われることから、この地域の農地は、生産に条件のよいわずかな部分を残すだけになっていくものと考えられる。

## （2）地形分類別土地利用面積の推移

図4-10と表4-2は、本図幅の明治期、昭和期、平成期の土地利用の面積を主要な自然地形分類項目ごとに集計した結果である。自然地形分類のうち水部は、現水部、旧水部であるが、水部以外の各土地利用においてこの自然地形を利用しているのは、造成によって陸地になった旧水部である。



- 区分ごとの面積は、本調査成果図の自然地形分類図及び土地利用分類図（1908年、1968年）、国土数値情報の土地利用細分メッシュ（2009年）を2種類の分類で交差領域を作成し、各領域の面積を分類の組み合わせで積み上げ集計したもの。
- 地形分類の内訳は次の通り。  
 山地斜面等：山地斜面等、火山地斜面等、麓斜面及び崖錐、土石流堆積地  
 台地等：岩石台地、砂礫台地、ローム台地  
 低地（微高地）：自然堤防、砂州・砂堆、砂丘、天井川及び天井川沿いの微高地  
 低地（その他）：緩扇状地、扇状地、谷底低地、氾濫原低地、三角州・海岸低地、旧河道、湿地、河原・河川敷、浜  
 水部：現水部、旧水部

図 4-10 地形分類別の土地利用面積の推移（1908、1968、2009年）

土地利用ごとにみると、**田**は、奈良盆地、石川低地、旧大和川低地、寝屋川低地の氾濫原低地などの低地（その他）にあるものと、河内台地、泉北台地などの砂礫台地にあるもので二分されていて、山地斜面等にあるものは割合的にはごくわずかである。**畑**は、明治期には台地等に多かったが、昭和期以降、山地斜面等の割合が多くなっている。**森林等**は、減少しているものの、明治期から平成期に至る減少の変化は緩やかなものであり、地形分類上の偏りもない。一方、**宅地等**は大きく増加しているが、地形分類別の割合を明治期と平成期で比較すると、わずかの差であるが、台地等で減少、低地で増加となっている。これは、旧大和川低地などの低地での都市化（宅地化）が急激に進んだことを反映している。

表 4-2 地形分類別の土地利用面積の推移 (1908、1968、2009 年)

単位: km<sup>2</sup>

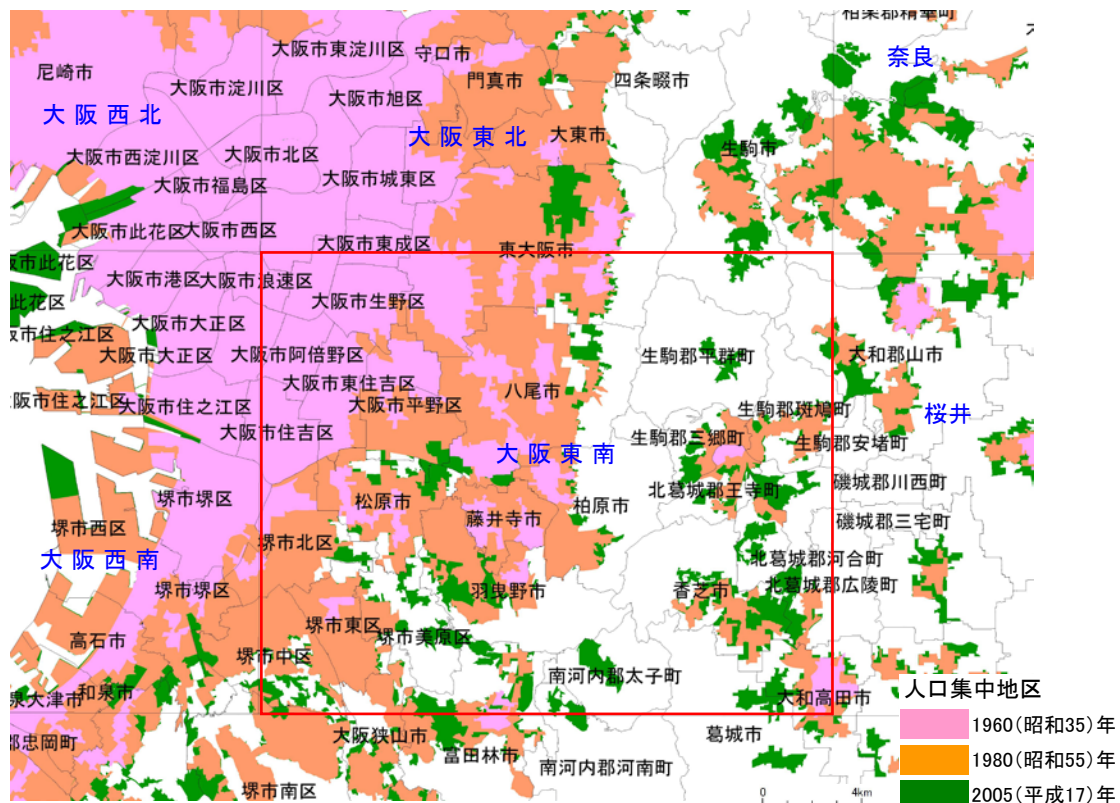
年代	区分	地形分類	山地斜面等	台地等	低地(微高地)	低地(その他)	水部	合計
1908(明治41)年頃	田		21.77	62.73	12.13	114.87	7.15	218.65
	畑(畑・その他農用地)		3.70	13.25	6.13	5.17	0.80	29.05
	森林等(森林・荒地等)		97.93	4.00	1.13	17.63	4.04	124.74
	水部(河川・湖沼)		1.68	2.26	0.16	2.43	4.68	11.20
	宅地等(建物・その他の用地)		4.22	16.48	11.46	7.15	0.71	40.03
1968(昭和43)年頃	田		13.83	35.68	1.89	68.43	2.95	122.78
		△ 7.93	△ 27.06	△ 10.24	△ 46.44	△ 4.19	△ 95.87	
	畑(畑・その他農用地)		18.75	5.09	0.91	4.65	0.48	29.87
			15.05	△ 8.16	△ 5.22	△ 0.53	△ 0.31	0.82
	森林等(森林・荒地等)		83.59	2.99	0.50	12.45	2.92	102.44
			△ 14.34	△ 1.02	△ 0.64	△ 5.19	△ 1.13	△ 22.30
	水部(河川・湖沼)		0.36	0.44	0.05	1.19	7.34	9.38
			△ 1.32	△ 1.81	△ 0.11	△ 1.23	2.66	△ 1.82
	宅地等(建物・その他の用地)		12.77	54.54	27.67	60.54	3.68	159.20
			8.55	38.05	16.21	53.39	2.97	119.18
2009(平成21)年頃	田		5.52	11.73	0.62	21.23	1.12	40.22
			△ 16.25	△ 51.01	△ 11.51	△ 93.65	△ 6.02	△ 178.44
	畑(畑・その他農用地)		10.90	2.27	0.25	3.03	0.32	16.77
			7.20	△ 10.98	△ 5.88	△ 2.14	△ 0.48	△ 12.28
	森林等(森林・荒地・水面)		75.14	2.58	0.09	8.11	1.30	87.22
			△ 22.79	△ 1.42	△ 1.04	△ 9.53	△ 2.75	△ 37.52
	水部(河川・湖沼)		0.52	0.66	0.19	4.44	5.21	11.02
			△ 1.16	△ 1.60	0.03	2.01	0.53	△ 0.19
	宅地等(建物・その他の用地)		37.18	81.46	29.86	110.43	9.42	268.35
			32.95	64.98	18.40	103.28	8.71	228.32

1. 表の区分ごとの面積は、調査結果の自然地形分類図及び土地利用分類図(1908年、1968年)、国土数値情報土地利用データ(2009年)から2種類の分類で交差領域を作成し、各領域の面積を分類の組み合わせ毎に積み上げて集計したもの。
2. 土地利用区分は、1908年、1968年は本調査の土地利用分類図、2009年は国土数値情報(土地利用細分メッシュ)による。
3. 地形分類の内訳は以下の通り。  
 山地斜面等: 山地斜面等、火山地斜面等、麓斜面及び崖錐、土石流堆積地  
 台地等: 砂礫台地、岩石台地、ローム台地  
 低地(微高地): 自然堤防、砂州・砂堆、砂丘、天井川及び天井川沿いの微高地  
 低地(その他): 扇状地、緩扇状地、谷底低地、氾濫原低地、三角州・海岸低地、旧河道、湿地、河原・河川敷、浜  
 水部: 現水部、旧水部
4. 1968年及び2009年の下段は、1908年からの増減量。

### (3) 人口集中地区の変遷

図 4-11 および表 4-3 は国勢調査の人口集中地区(DID<sup>3</sup>)データから作成した、本図幅の1960(昭和35)年、1980(昭和55)年、2005(平成17)年の3時期にわたるDIDの変遷を示したものである。1960年のDIDは大阪市と大阪市に近い場所、及び周辺市町の中心市街地に設定されていたが、1980年、2005年と本図幅内の各所に徐々に広がり、2005年には建物用地の土地利用の割合が多い範囲はほとんどDID地区となった。

<sup>3</sup> 人口集中地区(DID=densely inhabited district): 1960年国勢調査以降、新たに設定された統計表章地域。調査区(約50世帯)を単位として、原則として調査区の人口密度は1km<sup>2</sup>につき4000人以上あり、そのような調査区が互いに隣接して、その合計が5000人以上に達する場合に、これを一つの人口集中地区として区画する。実質的には市街地を形成する区域を表すといえる(浜、1989)。



国土数値情報（人口集中地区）1960、1980、2005年データから作成。図中の青字は、土地履歴調査を実施した5万分の1地形図図幅名を表す。

図 4-11 調査地域周辺における人口集中地区の推移（1960、1980、2005年）

表 4-3 地形分類別人口集中地区面積の推移

単位：km<sup>2</sup>

区域	分類	山地	台地	低地(微高地)	低地(その他)	水部	合計
調査地域全域		129.30	98.73	31.02	147.26	17.37	423.68
1960年のDID		0.65	24.92	21.16	31.00	2.51	80.25
	割合(%)	0.81	31.05	26.37	38.63	3.13	100.00
1980年のDID		9.74	64.82	28.63	87.40	9.75	200.34
	割合(%)	4.86	32.35	14.29	43.63	4.87	100.00
2005年のDID		21.18	72.28	29.05	100.17	10.78	233.45
	割合(%)	9.07	30.96	12.44	42.91	4.62	100.00

1. 自然地形分類図、国土数値情報（人口集中地区）1960、1980、2005年データより集計。
2. 地形分類の内訳は次の通り。  
 山地：山地斜面等、火山地斜面等、麓斜面及び崖錐、土石流堆積地  
 台地：岩石台地、砂礫台地、ローム台地  
 低地（微高地）：自然堤防、砂州・砂堆、砂丘、天井川及び天井川沿いの微高地  
 低地（その他）：扇状地、緩扇状地、谷底低地、氾濫原低地、三角州・海岸低地、旧河道、湿地、河原・河川敷、浜  
 水部：現水部、旧水部

1960年のDIDは、大阪市と大阪市に隣接する市（東大阪市や八尾市など）の大阪市に近い部分、そしてこれらの周辺市の中心市街地・旧市街地であった。その後、この地域は大阪中心部から同心円的に都市化が進み、DIDも周辺部に拡大していった。2005年のDIDを見ると、この範囲は、旧大和川低地・寝屋川低地・河内台地では、これらの区分

地域の中の建物用地の範囲にほぼ一致している。飛び地のように DID でない場所があるのは、そこが平成の現在も田が残っている（松原市の大和川左岸など）ためであり、2005年の DID はこの地域の人が住む範囲の大部分となって、面積は 1960 年の約 3 倍となった。

表 4-3 の地形分類別の推移を見ると、各時期とも低地（その他）の面積が多いが、1980 年以降、山地・丘陵地を開発して造られた住宅地が DID に含まれるようになって、山地・台地での割合が増えている。

## 5 調査地域の災害履歴概要

### 5.1 災害履歴概説

#### (1) 地震

この地域に被害を及ぼす地震には、①陸域の浅いところで発生する地震、②太平洋沖合で発生する地震の2タイプが存在する（地震調査研究推進本部，2009）。

①のタイプの地震は陸域の活断層によってもたらされる地震で1596年の慶長伏見地震（M7.1/2）や1995年の兵庫県南部地震（M7.3）などが該当する。特に兵庫県南部地震は1923年の関東地震（M7.9）以来都市部で最大の被害を及ぼした地震となった。また西日本では、東南海・東海地震の前後に内陸部で地震活動が活発化する傾向があり、（昭和）東南海地震（1944年）、（昭和）南海地震（1946年）から70年以上経ており、西日本で地震活動が活発化する活動期に入ったとの指摘もある。

②のタイプの地震は太平洋沖合の南海トラフ沿いで100～150年周期で発生するM8程度の巨大地震で1854年の安政東海地震（M8.4）や1944年の東南海地震（M7.9）、1946年の南海地震（M8.0）などが該当し、広い範囲に揺れや津波による被害をもたらす。

#### (2) 風水害

調査図幅の西側には上町台地、泉北台地、河内台地、生駒山地に囲まれた旧大和川低地が広がり、その北部は寝屋川低地となる。

淀川と南の大和川に挟まれた寝屋川沿岸の低湿地は、かつての河内湾入部にあたり、江戸時代中期まで深野池・箕輪池・新開池などの沼沢地が存在していた（国土地理院，1965）。江戸時代、1704年の大和川の付け替え工事によって、これらの地域の干拓が進み新田開発が行われた。この大和川の付け替え工事とそれに伴う干拓によって寝屋川低地の河川は洪水時の調節機能を失い、また元々の地盤が低い上に、戦前・戦後の地盤沈下の影響も加味され、内水氾濫による被害が頻発することとなった（国土交通省近畿地方整備局，2009、表5-1）。

調査図幅の東側、生駒山地の東には京阪奈丘陵、馬見・香芝丘陵が連なり、これらの山地・丘陵とさらに東側の大和高原に囲まれて奈良盆地が存在する。奈良盆地では初瀬川、飛鳥川、曾我川などの放射状に広がる多くの大和川の支川が合流し、またその下流の奈良盆地西部の溪流区間が狭窄部となっているため、本川水位の上昇に伴い、調査図幅範囲では内水氾濫による被害が発生しやすくなっている。またこの溪流区間には日本有数の地すべり地帯である亀の瀬地すべりが存在しており、過去に地すべりの活動によって大和川を堰き止め上流に浸水被害を生じている（国土交通省近畿地方整備局，2009）。



表 5-1 寝屋川流域における過去の浸水被害状況

年月日	気象要因	流域最大雨量			浸水被害			
		時間最大 (mm)	総雨量 (mm)	観測所名	面積 (ha)	床上 (世帯)	床下 (世帯)	計 (世帯)
1967/7/8~9	豪雨	55.6	215	大阪	-	12,277*	65,843*	78,120*
1972/7/12~13	梅雨前線	20.0	237.5	八尾	1,788	6,138	37,273	43,411
1972/9/15~16	台風 20 号	47.5	115.0	寝屋川工営所	1,697	8,902	52,505	61,407
1979/6/27~7/2	梅雨前線	25.0	268.5	中竹栈橋	798	1,044	12,043	13,087
1979/9/30~10/1	台風 16 号	66.0	96.0	枚方	1,035	4,045	23,691	27,736
1982/8/2~3	台風 10 号 低気圧	39.5	150.5	中竹栈橋	2,046	6,778	43,262	50,040
1989/9/2~3	低気圧	23.0	166.0	五軒堀橋	104	26	1,927	1,953
1989/9/14	秋雨前線	49.0	75.5	守口市役所	108	68	3,600	3,668
1989/9/19~20	台風 22 号	41.0	104.0	中竹栈橋	86	3	1,694	1,697

大阪府土木部 1987、大阪の気象 100 年から作成

\*1967 年の浸水被害は大阪府全域の統計

## 5.2 災害履歴詳説

### (1) 地震

#### ①慶長伏見地震

慶長伏見地震は1596(慶長1)年9月5日午前0時ごろ発生した内陸型の地震である。地震の規模はM7 1/2で、有馬 - 高槻断層帯、および六甲・淡路島断層帯が活動したと考えられている(岡田, 2012)。この地震によって近畿地方では京都、大阪、堺を中心として震度5~6の揺れが生じたと推定されており(図5-4)、堺では死者600余名、大阪では多数の家屋が倒壊し、京都では伏見城の天守閣が大破するなど600人近い圧死者が報告されている。全体では1,500人余りの死者が出たと推定されている(宇佐美, 2003)。

#### ②河内大和地震

河内大和地震は1936年(昭和11)2月21日10時7分に奈良県北西部を震源として発生した地震で、地震の規模はM6.4と推定されており、この地震により大阪府で死者8名、住家全壊18棟、半壊89棟(大阪府地域防災計画)、奈良県で死者1名、住家全壊148棟の被害を生じている(奈良県の気象百年, 1997)。近畿地方で震度4~5の揺れが生じており、奈良・大阪府県の県境付近で振動が強かった(宇佐美, 2003、若松, 2011)

本図幅においては、柏原市周辺の旧大和川低地から、石川低地にかけて地震による地盤の液状化の発生が報告されている(国土地理院, 1965)。

#### ③平成7年(1995年)兵庫県南部地震

1995(平成7)年1月17日午前5時46分に発生した兵庫県南部地震は兵庫県南部から淡路島にかけて伸びる六甲・淡路島断層帯によって引き起こされた。この地震による震度は神戸海洋気象台と洲本測候所で震度6が記録されたが、地震後の現地調査で神戸市から宝塚市にかけて震度7の地域があったことが確認された(地震調査研究推進本部, 2009)。

この地震によって死者・行方不明者6,437名、負傷者43,792名、住宅全壊104,906棟、半壊144,274棟(平成18年5月19日消防庁確定)の甚大な被害を生じ戦後50年で最大の被害となった。また地震の発生が早朝であり、都市部において非常に激しい揺れに見舞われたため、建物の倒壊と火災による死者が多かった。

大阪府内での被害は、死者31名、負傷者3,589名、住家全壊895棟、半壊7,232棟となっている(大阪府ホームページより)。また奈良県内では、負傷者12名、住家一部損壊15棟など比較的軽微だった(奈良県の気象百年, 1997)。

本図幅においては、大阪市で死者18名、重軽傷者357名、住家全壊194棟、半壊2,148棟、一部損壊17,089棟の被害のほかライフラインで大きな影響が出た(大阪市ホームページより)。また、八尾市で負傷者1名、住家損壊243棟、堺市で震度4、死者1名、負傷者50名、住家損壊4,172棟、柏原市で負傷4名、住家一部破損124棟の被害があった(八尾市ホームページ、柏原市ホームページより)。

## (2) 風水害

### ①昭和42(1967)年7月降雨(昭和42年7月豪雨)

本州の南岸に停滞していた梅雨前線に、大風7号から変わった熱帯低気圧から暖湿気流が流れ込み、前線の活動が活発化したため、九州地方から関東地方に多量の雨をもたらした。

大阪では7月8日～9日の総雨量が150.1mm、9日には日降水量83.3mmを記録し(気象庁ホームページより)、死者・行方不明者20名、住家浸水床上12,277棟、床下65,843棟の被害が生じた(大阪の気象100年)。淀川・猪名川では警戒水位を上回り、大阪府北部の安威川、勝尾寺川、箕面川、千里川、南部の石津川、津田川、檜井川等の中小河川は増水し、堤防の決壊、氾濫、橋梁流出の大きな被害が発生した(淀川河川事務所ホームページより)。

本図幅においては、八尾市(大阪府)で住家損壊1棟、住家浸水床上9棟、床下1,026棟、破堤9箇所(八尾市地域防災計画)、また堺市では住家浸水床上74棟、床下1,629棟(堺市地域防災計画)の被害があった。

### ②昭和47年(1972)年7月降雨(昭和47年7月豪雨)

7月3日～6日にかけて、黄海から日本海北部に伸びた前線を伴った低気圧に暖湿気流が流れ込み、九州と四国に局地的な大雨をもたらした。9日～13日にかけては前線が南下し、本州南岸から四国、九州付近に停滞した。日本南海上には台風6,7,8号があり、この影響で前線が活発化し、西日本で400～600mm、山間部で1,000mm前後の大雨となった。7/3～15日の期間降水量は大阪で331.0mm、神戸で327.5mmを記録した。また淀川河川事務所の枚方出張所では警戒水位(4.50m)に対して最高水位は3.99mに達したに過ぎず、大阪市内では大きな被害はなかった(淀川河川事務所ホームページより)。大阪府全域では住家浸水床上6,186棟、床下40,346棟の被害が発生し(大阪府地域防災計画)、寝屋川流域では各地で内水氾濫を生じ、総雨量237.5mm、住家浸水床上6,138棟、床下37,273棟の被害があった(大阪府都市整備部,2012)。

本図幅においては、旧大和川低地から寝屋川低地の東大阪市、八尾市(大阪府)で内水氾濫が発生した。

### ③昭和57(1982)年8月降雨(台風10号)

7月24日に日本の南東海上で発生した台風10号は、8月1日に紀伊半島の南海上に北上、2日0時渥美半島に上陸し、翌早朝には富山湾から日本海に進んで温帯低気圧に変わった。この台風の影響で近畿地方では7月31日夜半から大雨となった(気象庁ホームページより)。大阪府では西除川および今井戸川(堺市、松原市)で浸水被害が発生、奈良県では葛下川(王寺町)で浸水被害があった(国土交通省近畿地方整備局,2009)。

本図幅においては、寝屋川市で住家浸水床上427棟の被害があった(寝屋川市地域防災計画)。

### ④平成7(1995)年7月降雨(大雨)

6月から7月にかけて梅雨前線の影響が活発化し、東北から九州の広い範囲で大雨と

なった。7月1日から4日にかけては前線が西日本から東日本にかけて停滞し、7月4日には大阪で日降水量117.0mm、和歌山で164.5mmを記録するなど、近畿地方で100～150mmの降雨を記録している（気象庁ホームページより）。

大和川流域では、2,513戸の建物被害と314haの浸水被害を生じ、本図幅においては葛下川の無堤防部（香芝市周辺）などで浸水被害が生じている（国土交通省近畿地方整備局，2009）。

#### ⑤平成9（1997）年8月降雨（豪雨）

8月3日～13日の間、前線が北海道から九州にかけて北上、南下を繰り返し、台風11号が6日～7日にかけて沖縄地方を通過し、8日に九州の西海上を北上した。前線活動の活発化、台風、低気圧の影響で全国各地で大雨となった。7日の降雨で大阪で51.5mm、枚方では日降水量58mmの降雨があった（気象庁ホームページより）。

本図幅においては、大和川低地の八尾市で長瀬川流域を中心に住家浸水床上10棟、床下862棟の被害があった（八尾市地域防災計画）。

#### ⑥平成11（1999）年8月降雨（豪雨）

東海沖に進んだ熱帯低気圧が、8月10日21時過ぎに紀伊半島に上陸し、11日2時には奈良県と京都府の境まで進み近畿地方に大雨をもたらした（国土交通省近畿地方整備局，2009）。これにより11日には奈良で日降水量126.0mmの降雨を記録している（気象庁ホームページより）。

この降雨によって竜田川（生駒市）、曾我川（三宅町）、地藏院川（大和郡山市）などで内水による浸水被害が発生し、大和川流域では435戸の建物被害と、49haの浸水被害を受けている（国土交通省近畿地方整備局，2009）。

本図幅においては、大和川流域の三郷町、斑鳩町（奈良県）などで浸水の被害があった。

#### ⑦平成19（2007）年7月降雨（豪雨）

7月9日にカロリン諸島近海で発生した台風4号は14日に九州に上陸し、その後本州の南岸を北上し、16日9時に日本の東海上で温帯低気圧となった。この低気圧の影響で16日から17日にかけて近畿地方では局地的な大雨となった（気象庁ホームページより）。

この大雨により17日4時には大和川の藤井観測所で計画高水位を超え、大和川流域では住家浸水床上99棟、床下1,017棟の被害が発生した（国土交通省近畿地方整備局，2009）。

本図幅においては、大和川流域の斑鳩町、安堵町（奈良県）などで浸水の被害があった。

### (3) 地すべり

亀の瀬地すべりは大和川水系が奈良盆地から生駒山地を越えて大阪平野に流下する狭窄部の右岸側に存在する。地すべり自体は数万年前から活動していたものと推定されるが記録が残っているのは明治以降であり、1903（明治36）年、1931～32（昭和6～7）年、1967（昭和42）年に大規模に活動している。亀の瀬地すべりは昭和34年には地すべり防止区域の指定を受け、その後昭和37年から本格的な地すべり防止工事が実施された（藤田，1982、国土交通省近畿地方整備局，2010）。

#### ①昭和7（1932）年7月降雨（亀の瀬地すべり）

1931年11月に水田に亀裂が出現し、峠地区を中心とする約32haの山塊が地すべり活動を開始した。この地すべりの活動によって大和川の河床が隆起し、翌1932年7月の豪雨時には河床が9m以上隆起し、大和川の河道は閉塞され上流に浸水被害が生じた。また国鉄関西本線の亀の瀬トンネルも崩壊した。当時の内務省は大和川の左岸を開削して河道を広げ河床隆起に対処した（藤田，1982、国土交通省近畿地方整備局，2010）。

#### ②昭和42（1967）年2月降雨（昭和42年亀の瀬地すべり）

1967年2月清水谷地区で亀裂が発見され、峠地区の旧地すべり地も影響を受け再活動を開始し、合わせて約50haを超える大規模な地すべり活動となった。大和川の河床は1.4m隆起したが、河道閉塞にはいたらなかった（藤田，1982、国土交通省近畿地方整備局，2010）。

### (4) 地盤沈下

大阪市の地盤沈下は昭和3年（1928年）の水準測量で指摘され、昭和9年（1934年）の室戸台風により甚大な高潮被害を生じたことによって注目されるようになった。昭和10年～昭和17年には地下水需用の増加に伴い、年間沈下量の最大値が20cmを越えた。その後戦争末期と戦後にかけては沈静化するも、昭和25年以降の経済成長とともに再び沈下が激しくなり、昭和35年頃のピーク期には年間20cm以上の年間沈下量を記録しており、昭和36年（1961年）の第2室戸台風により大きな浸水被害をもたらしている。その後地下水の採取規制などの対策によって昭和38年（1961年）以降は鈍化し、昭和40年代後半以降は沈静化している（環境省ホームページより）。

本図幅においては、寝屋川低地の東大阪市などで100cmから130cm弱の累積沈下量が観測されている。

## 6 調査成果図の見方・使い方

### 6.1 地形分類図

#### (1) 自然地形分類図

自然地形分類図は、既存の地形分類図等を参考に、空中写真、地形図等を利用して、宅地造成等により土地の人工改変が行われる前の自然地形を含め、地形の形態・形成時期・構成物質等により土地を分類した地図である（表 6-1）。

これまでの地形分類図では、現状の人工地形が優先して表示される場合があり、改変前の自然地形の詳細が把握できない等の問題を抱えていた。そのため、この調査で提供する自然地形分類図は、地形改変により不明瞭になった地形界線を明確に定めると同時に、かつて存在していた池沼や河川の状況、盛土される前の低地の地形等を分類・復元することで、現在は失われた過去の地形を読み取ることができるようにしている。土地をその成り立ちや、生い立ち、形態等により分類した地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的可能性を知ることができる。

表 6-1 自然地形分類区分

	分類	定義
山地・丘陵地	山地斜面等	山地・丘陵地の斜面や台地縁辺の斜面等をいう。海岸の磯や岩礁、離れ岩等を含む。
	麓斜面及び崖錐	斜面の下方に生じた岩屑または風化土からなる堆積地形。
	土石流堆積地	岩塊、泥土等が水を含んで急速に移動、堆積して生じた地形で、溪床または谷の出口にあるもの。
台地	砂礫台地（更新世段丘）	更新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、表層が厚く、且つ未固結の砂礫層からなるもの。
	砂礫台地（完新世段丘）	完新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、形成時期が新しく、未固結の砂礫層からなるもの。
低地	緩扇状地	山麓部から氾濫原低地へと広がる、主として砂や礫からなる、傾斜の緩やかな扇状の堆積地域。
	扇状地	山麓部にあつて、主として砂や礫からなる、やや傾斜の急な扇状の堆積地域。
	谷底低地	山地、丘陵地、台地を刻む河川の堆積作用が及ぶ狭長な平坦地。
	氾濫原低地	扇状地と三角州・海岸低地の中間に位置し、河川の堆積作用により形成された広く開けた平坦地で、自然堤防、旧河道または湿地を除く低地。
	自然堤防	河川により運搬されたシルト～中粒砂が、河道及び旧河道沿いに細長く堆積して形成された微高地。
	旧河道	過去の河川流路で、周囲の低地より低い帯状の凹地。
	湿地	自然堤防や、砂州等の後背に位置するため、河川の堆積作用が比較的及ばない沼沢性起源の低湿地。現況の湿地を含む。
	砂州・砂堆、礫州・礫堆	波、河流または潮流によって生じた砂または礫の堆積した微高地。
	天井川及び天井川沿いの微高地	堤防設置によって周囲の地形面より高くなった河床及びこれに沿って形成された微高地。
	河原・河川敷	現況の河原及び河川敷（低水敷・高水敷）をいい、堤内地の旧河原・旧河川敷を含む。
水部	現水部	現況が海、または河川、水路、湖沼等の水部。干潟を含む。
	旧水部	過去の海または湖沼等で、現存しないもの。
副分類	崖	長く延びる一連の急傾斜の自然斜面。
	凹地・浅い谷	細流や地下水の働きによって台地または扇状地等の表面に形成された凹地や浅い谷。

#### (2) 人工地形分類図

人工地形分類図は、宅地造成等に伴って地形が改変されている範囲を最近の空中写真や地形図等を利用して抽出し、土地の改変状況によって「人工平坦地」や「盛土地」等に分類した地図である（表 6-2）。

昨今、特に都市地域では、市街地の拡大に伴って、従来の地形の多くが大きく改変されるとともに、開発から年月が経過し、最近は土地本来の自然の状況（自然地形）がわからなくなっている地域が各地で見られるようになっている。

丘陵地等で住宅団地の開発のため、切り盛り造成等により宅地整備が行われた「人工平坦地」の中には、現在ほとんど平坦な土地であっても、開発前には尾根や谷が入り組んだ起伏のある土地だったところがある。この調査では、そうした人工平坦地内について、かつて谷があった場所を、開発前の状況がわかる地形図や空中写真から調査し、「旧谷線」として表示している。

また低地では、かつて水田等に利用されていた低湿地等に土を盛って造成した「盛土地」や、池沼を埋め立てた「埋立地」等の人工地形を分類している。こうした情報を自然地形分類と組み合わせて活用することにより、土地の安全性に関する情報を得ることができる。

表 6-2 人工地形分類区分

大分類	小分類	摘要
人工平坦地 (切り盛り造成地)	宅地等	山地・丘陵地や台地等の斜面を切土または盛土により造成した平坦地や緩傾斜地のうち、主として住宅や工業団地等の造成によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	農地等	上記のうち、主に農地整備、ゴルフ場造成等によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	旧谷線	人工平坦化地内の山地・丘陵地にかつて存在した谷線。
改変工事中の区域		人工的な地形改変が進行している区域及び採石・採土場、採鉱地等及びその跡地。
盛土地		低地等に 0.5m以上盛土して造成された土地。台地上の凹地・浅い谷部分の盛土地を含む。
埋立地		水部等を埋め立てして造成された土地。
切土地		山地・丘陵地や台地等の斜面を人工的に切土して生じた平坦地及び急傾斜の人工斜面。

### (3) 地形分類図から見た土地の安全性

自然地形分類図及び人工地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的可能性を判断することができる。特に人工地形が分布する地域では自然地形分類を合わせて参照し、その土地の元々の地形条件を把握することにより、土地の安全性に関する詳細な情報を得ることができる。

例えば低地の盛土地は、谷底低地、氾濫原低地、旧河道・三角州・海岸低地・湿地といった、盛土施工前の地形を自然地形分類図から判断することにより、表 6-3 に示すような地震の揺れの大きさや液状化の可能性、高潮や洪水氾濫による浸水の可能性等を知ることができる。

表 6-3 地形分類と潜在的な自然災害の可能性

分類		地震に際して予想される災害	大雨・洪水に対して予想される災害		
自然地形が分布する地域	山地・丘陵地	山地斜面等	崖や急斜面の近くでは、斜面崩壊や落石の可能性はある。	急斜面等では斜面崩壊の可能性があり、上流部の地質や崩壊の状況により、豪雨時には谷沿いや谷の出口付近で土石流発生の可能性はある。	
		麓斜面及び崖錐	背後に崖や急斜面がある場所では、斜面崩壊や落石の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	谷沿いや谷の出口付近では、上流部に崖錐や麓斜面が多数存在する場合、豪雨時に土石流発生の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	
		土石流堆積地	傾斜のある場所では、斜面崩壊や落石の可能性はある。地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	豪雨時に土石流発生の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	
	低地	台地	砂礫台地（更新世段丘）（完新世段丘）	台地の縁辺部の斜面では崩壊や地すべりの可能性はある。	通常は洪水時に浸水することはないが、凹地などでは浸水することがある。また、低地や近くの水路との間に十分な高さが無い台地では、洪水時に冠水することがある。逆に低地との間に高さがある台地では、縁辺部での斜面崩壊や地すべりの可能性はある。こうした地域では過去の浸水実績や土砂災害実績を知ることでも有効である。
			緩扇状地	一般的に地盤は良好だが、末端部では液状化の可能性はある。	豪雨時に砂礫の浸食・堆積の可能性はあるが、排水は良好である。上流部の状況により、洪水時には土石流発生の可能性はある。
		扇状地	一般的に地盤は良好だが、末端部では液状化の可能性はある。	豪雨時に砂礫の浸食・堆積の可能性はあるが、排水は良好である。上流部の状況により、洪水時には土石流発生の可能性はある。	
		谷底低地	低地の中でも堆積物の状況により地震の揺れが増幅される可能性がある。また、斜面の近くでは、斜面崩壊の危険性がある。	洪水時に冠水することもあるが、概ね排水は速やかである。斜面の近くでは、斜面崩壊の可能性はある。	
		氾濫原低地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。	河川洪水、内水氾濫の可能性はある。	
		自然堤防	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。	異常の洪水時に浸水することがあるが、周囲の氾濫原低地と比べ高く、排水も速やかである。	
		旧河道	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性が特に高い地域である。	明瞭な凹地では洪水の通り道となる場合があり、排水状況も悪いため、浸水時には長く湛水することがある。	
湿地		地震の揺れが増幅され、地盤変異の可能性はある。	盛土の状況により違いはあるが、洪水時には排水がきわめて悪く、長時間湛水する可能性がある。		
砂州・砂堆、礫州・礫堆		地震の揺れが増幅され、砂州と砂州の間の低地では液状化の可能性はある。また、海岸沿いでは、津波の大きさによっては浸水することがある。	比高の小さい砂州・砂堆では洪水や異常の高潮等で冠水することがあるが、排水は速やかである。		
天井川及び天井川沿いの微高地		地震の揺れで天井川の堤防が崩壊、決壊等した場合、周辺の低地部への流水の可能性はある。	河川の増水による、周辺の低地部への流水の可能性はある。		
人工地形が分布する地域	山地・台地等	人工平坦地（宅地等）	特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。	背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性はある。	
		人工平坦地（農地等）	特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。	背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性はある。	
		変更工事中の区域	採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。	採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。	
	低地	盛土地	谷底低地の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。	十分な盛土の高さが無い土地では、洪水時に浸水することがあるが、概ね排水は速やかである。
			氾濫原低地の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。	十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫の可能性はある。
		旧河道、湿地等の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。高い盛土地では、さらに揺れが増幅される可能性がある。	十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫の可能性はある。	
		埋立地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく液状化の可能性が特に高い土地である。	周囲の水面に比べ十分に盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫等により浸水する可能性がある。	
切土地	切土斜面が半固結・未固結の場合、地震の揺れによる崩壊の可能性はある。	切土斜面が半固結・未固結の急斜面の場合、斜面崩壊の可能性はある。			
旧谷線	旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、地震の揺れが増幅され、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。	旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、異常降雨時には地盤が緩み、盛土部分が崩壊する可能性がある。			



## 6.2 土地利用分類図

土地利用分類図は、現在から概ね 100 年前（明治期）及び概ね 40 年前（昭和 40 年代）の 2 時期の旧版地図を判読し、地形図作成当時の土地利用を分類し、その分布状況を表示した地図である。

（第 1 期） 現在から概ね 100 年前の明治期の地形図には、当時の市街地や集落、森林・農地・河川等が詳細に描かれている。土地利用分類図では、それらを判読し、主要な土地利用ごとに色分けして表示している。

（第 2 期） わが国では、1960 年代後半から空中写真を利用した精度の高い地形図の整備が全国的に開始された。その時代の地形図から作成した土地利用分類図では、現在から概ね 40 年前の土地利用の状況を読み取ることができる。

なお、明治期、昭和期の 2 時期の土地利用分類図は、共通の凡例で分類している。そのため、現在の地形図を背景に 2 時期の土地利用分類図を見比べることにより、その都市の現在の市街地で、かつてどのような土地利用がなされていたかを知ることができる。

表 6-4 土地利用分類区分

分類	定義
田	水稲、い草などを栽培している田。季節により畑作物を栽培するものを含む。
沼田	泥が深く、ひざまでぬかるような田（この分類は明治期だけに適用）。
畑	麦・陸稲・野菜などを栽培する土地をいい、牧草地、芝地を含む。
果樹園	りんご・梨・桃・ブドウなどの果樹を栽培する土地。
樹木畑	桑、茶を栽培している土地。桐・はぜ・こうぞ・しゅろ等を栽培している畑を含む。
森林	高さ 2 m 以上の多年生植物の密生している地域。植林地においては樹高が 2 m 未満であっても森林とする。高さ 2 m 以下の竹、笹の密生している土地。
荒地・海浜等	自然の草地からなる土地及び露岩地、崩壊地、砂礫地などで植物に覆われていない土地。万年雪で覆われた土地を含む。
湿地	干上がった湖沼の跡などの排水の悪い土地で、雨期には水をたたえるところ。
建物用地	住宅や建物類似の構築物、商業・業務・工業・公共・流通・通信・各種の処理施設等に利用されている土地。
交通施設用地	鉄道、道路、空港などに利用されている土地。
その他の用地	空地、公園緑地、墓地、採石地、採鉱地、自衛隊などの特別な用途に利用されている土地。
水部	河川、湖沼、ため池等の内水面および海面や干潟。

## 6.3 災害履歴図

災害履歴図は、国、地方公共団体、その他関係各機関等が調査した資料に基づき、地域に大きな影響を与えた災害の発生状況や、その被害の様子を示した地図で、災害の種類ごと分けて作成している。この図では、比較的信頼性の高い情報のうち、最低でも縮尺 1/50,000（図上の 1 cm が現地の 500m に相当）レベル以上の精度を持つ資料を選定して表示している。なお、地図には災害状況等の情報とともに、対象とした資料で扱った調査範囲を示している。引用する被害調査図等の資料が不十分なため、地図に掲載されていない災害があるほか、災害の種類や規模等の条件により、調査範囲外の地域でも被害が生じているような場合があり、この地図に全ての災害が表示されているわけではないことに留意する必要がある。

なお、災害履歴図の作成にあたり参照した資料の詳細や、被害の場所等を特定できない災害の状況等、その他参考になる事項を、この説明書に記述している。災害履歴図は、

地形分類図や土地利用図等と見比べたり、さらに詳しい文献を調べたりすることで、その土地の安全性について理解を深めることができる。

なお、災害発生後の堤防整備や下水道整備、地盤の改良等の防災対策が行われている場合などには、災害発生当時に比べて、現在は土地の安全性が向上している可能性があることにも留意する必要がある。

#### 6.4 成果図面の使い方

本図幅内で今後も想定される自然災害被害としては、本調査の災害履歴等からみて、異常降雨時の浸水被害・土砂災害と、大規模地震発生時の建物倒壊、液状化等の地震災害の、大きく2つが考えられる。これらの被害想定については、国や各自治体が作成している各種ハザードマップにより、現時点で災害が発生した場合の被害の規模について、ある程度予測することが可能である。

しかし、今後も地形改変をとまなう土地利用の変化が続くと仮定した場合、ハザードマップ等からでは、新たに地形改変が行われた場所でどのような災害被害が発生するかを予測することは困難である。また、すでに人工改変が行われているような場所でも、建築物の更新や再開発等が行われることも考えられる。

そのような場合において、その土地本来の地形や過去の災害履歴から、自然災害に対する危険度が高い地域なのかどうかを事前に知っておくことは非常に重要であり、災害が発生した場合でも被害を最小限に留めるための対策を取ることが可能となる。

本成果図面の使い方としては、一例として以下のような利用方法が考えられる。

- ・現在、本図幅内の土地に住む住民、あるいはこれから住まいを構える住民に対し、その土地の地形特性からみた災害に対する危険性をあらかじめ認識いただき、住民自ら、災害が発生した場合を想定した避難行動や被害を最小限にするための安全対策を考える機会を提供する。
- ・各地域における自治会や自主防災組織等が、自分たちが住む地域の自然災害に対する危険性や過去の被害状況を把握することにより、より具体的な災害状況を想定した避難訓練の実施や、防災物資等の備蓄に役立てることができる。
- ・学校教育や生涯学習等の場を通して、自分たちの住む地域の自然地誌を学ぶとともに、災害と地形との因果関係や過去の災害履歴等から、災害から身を守るための防災教育での資料として活用する。
- ・低地部で新たな開発等を行う場合、地形分類より地盤強度が想定できることから、軟弱地盤の土地においては、計画場所の変更や軟弱地盤対策工法の選択等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地における過去の被害程度の把握ができることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。
- ・緩斜面で切り盛り造成等により人工改変を行う場合、地形分類より地盤強度が想定できることから、麓屑面や崖錐などの落石や地すべり等土砂災害の危険性が高い場所では、計画場所の変更や砂防対策の施工等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地と似た地形条件の場所の土砂災害発生履歴が分

かることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。

防災に関しては、これまでは行政の側から語られることが多かったが、近年の市町村合併による行政単位の拡大や、行政改革にともなう行政職員の減少や防災関連費用の削減等により、行政のみではきめ細やかな防災対策の実施が困難な状況となっている。

また、近年では集中豪雨などによる災害の局所化、都市部への人口集中などによる被害の甚大化が予測され、事前の防災対策の必要性・重要性がますます高まっている。

そのため、上記で述べたように、本成果図面を活用することにより、行政だけでなく、地域住民が主体となった防災・減災対策を立てるとともに、新たな土地利用を計画する際に、事前に自然災害に対する危険性を予測し、計画の変更や防災・減災対策の導入に役立てることが望まれる。

## 7 引用資料及び参考文献

### 7.1 引用資料

#### (1) 人工地形及び自然地形分類図

地形分類図は、土地の「成り立ち・生い立ち・形」で色分けした地図であり、災害を引き起こす自然現象に対する土地の潜在的な可能性を知ることができる。土地履歴調査では、自然状態の地形によって土地を区分した地図（自然地形分類図）の上に、人間が造成した土地の状況を示した地図（人工地形分類図）を重ね合わせ表示した地図を「人工地形及び自然地形分類図」と呼んでいる。

大阪東南部地区の「人工地形及び自然地形分類図」は、以下の方法により作成した。

- ①「自然地形分類図」は、2万5千分の1土地条件図（国土地理院）を基本資料とし、以下の資料を引用または利用して編集した。編集にあたっては、空中写真の補足判読により一部修正を行った。

国土地理院（1981）：2万5千分の1 土地条件図「大阪東北部」。

大阪府（1978）：5万分の1 土地分類基本調査（地形分類図）「大阪西北部（大阪府）、大阪東北部（大阪府）」。

奈良県（1983）：5万分の1 土地分類基本調査（地形分類図）「奈良・大阪東北部・大阪東南部」。

判読に使用した空中写真は、

M265（昭22.4.1 米軍撮影）、M498（昭22.9.23 米軍撮影）、

M1194-A（昭23.10.19 米軍撮影）、M30-T2（昭26.12.30 米軍撮影）。

- ②「人工地形分類図」は、2万5千分の1地形図「大和高田」「信貴山」（平成18年更新）「古市」（平成19年更新）「大阪東南部」（平成20年更新）の読図及び空中写真（KK-2004-2X, 国土地理院撮影）の補足判読により作成したもので、おおむね平成16年時点の地形の状況を反映している。

なお、本図の作成にあたっては、海津正倫（奈良大学教授（名古屋大学名誉教授））、加藤茂弘（兵庫県立人と自然の博物館主任研究員）、高田将志（奈良女子大学大学院教授）、三田村宗樹（大阪市立大学大学院教授）の各氏の指導をいただいた。

#### (2) 土地利用分類図

大阪東南部地区の「土地利用分類図」は、現在から約100年前（1910年頃）及び約40年前（1970年頃）の2時期を対象に、それぞれの年代に測量された地形図を資料として、当時の土地利用の状況を、資料とした地形図から読み取れる情報の範囲内で分類し、その結果を5万分の1の縮尺精度に編集したものである。本地区の「土地利用分類図」の作成にあたっては、以下の地形図を利用した。

##### 【第1期（明治期、1910年頃）】

- ・5万分1地形図「大阪東南部」明治41年測図、大正3年第1回部分修正、大正6.5.30発行、図式は明治42年式地形図図式

- ・ 5 万分 1 地形図「大阪西南部」明治 42 年測図、大正 3 年一部修正、大正 5. 2. 28 発行、図式は明治 42 年式地形図図式

【第 2 期（昭和期、1970 年頃）】

- ・ 5 万分 1 地形図「大阪東南部」昭和 43 年編集（資料：昭和 42 年改測量 1:25,000 地形図、昭和 43 年 10 月地下鉄および地下式鉄道補入（昭和 42 年 9 月大阪市交通局作成の 1:30,000 路線図を使用）、昭和 43 年 10 月西名阪道路補入（昭和 41 年 10 月日本道路公団作成の 1:1,000 路線図を使用）、昭和 43 年 10 月大阪中央環状線補入（昭和 36 年 9 月大阪府作成の 1:3,000 路線図を使用）、昭和 43 年 10 月大阪外環状線補入（昭和 36 年 9 月大阪府作成の 1:3,000 路線図を使用））、昭和 44. 7. 30 発行、図式は昭和 40 年式 1:50,000 地形図図式

なお、本図の背景に使用した地形図は、調査時点の最新図（平成 21 年修正）である。

(3) 災害履歴図

災害履歴図の作成にあたっては、以下の資料を引用した。

【水害・土砂災害】

① 1967 年 7 月水害

- ・ 昭和 42（1967）年 7 月降雨（昭和 42 年 7 月豪雨）による浸水区域を、国立防災科学技術センター『昭和 42 年 7 月 8・9 日豪雨による寝屋川流域洪水状況図』より編集。

② 1972 年 7 月水害

- ・ 昭和 47（1972）年 7 月降雨（昭和 47 年 7 月豪雨）による浸水区域を、大阪府土木部（1987）『寝屋川流域浸水実績図』より編集。

③ 1982 年 8 月水害

- ・ 昭和 57（1982）年 8 月降雨（台風 10 号）による浸水区域を、大阪府土木部（1987）『寝屋川流域浸水実績図』、大和川流域総合治水対策協議会『大和川流域浸水実績図』、堺市（2010）『洪水ハザードマップ（堺市防災マップ）』より編集。

④ 1995 年 7 月水害

- ・ 平成 7（1995）年 7 月降雨（大雨）による浸水区域を、大和川流域総合治水対策協議会『大和川流域浸水実績図』、大阪府『寝屋川流域浸水実績図（平成 7 年～平成 15 年）』より編集。

⑤ 1997 年 8 月水害

- ・ 平成 9（1997）年 8 月降雨（豪雨）による浸水区域を、大阪府『寝屋川流域浸水実績図（平成 7 年～平成 15 年）』より編集。

⑥ 1999 年 8 月水害

- ・ 平成 11（1999）年 8 月降雨（豪雨）による浸水区域を、大和川流域総合治水対策協議会『大和川流域浸水実績図』より編集。

⑦ 2007 年 7 月水害

- ・ 平成 19（2007）年 7 月降雨（豪雨）による浸水区域を、大和川流域総合治水対策協議会『大和川流域浸水実績図』より編集。

【土砂災害発生箇所（地すべり）】

⑧ 1932年7月土砂災害

- ・昭和7(1932)年7月降雨(亀の瀬地すべり)による地すべりの発生範囲を、国土交通省近畿地方整備局(2008)『地すべり活動で生じた亀裂位置図(亀の瀬地区直轄地すべり対策事業)』より編集。

⑨ 1967年2月土砂災害

- ・昭和42(1967)年2月降雨(昭和42年亀の瀬地すべり)による地すべりの発生範囲を、国土交通省近畿地方整備局(2008)『地すべり活動で生じた亀裂位置図(亀の瀬地区直轄地すべり対策事業)』より編集。

【地震災害】

① 1854年地震被害

- ・液状化被害は、若松加寿江(2011)『日本の液状化履歴マップ 745-2008(DVD-ROM付き)』より転載。

② 1936年河内大和地震

- ・液状化被害は、若松加寿江(2011)『日本の液状化履歴マップ 745-2008(DVD-ROM付き)』より転載。

① 1995年兵庫県南部地震被害

- ・液状化被害は、若松加寿江(2011)『日本の液状化履歴マップ 745-2008(DVD-ROM付き)』より転載。

【地盤沈下】

- ・阪神地区地盤沈下連絡協議会『阪神地区地盤沈下調査広域水準測量の成果(昭和39年～平成21年)』

なお、各地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図、空中写真、数値地図50000(地図画像)、数値地図25000(土地条件)及び基盤地図情報を使用した。(承認番号 平24情使、第534号)

## 7.2 参考文献

本調査説明書の作成にあたっては、以下の資料、文献等を参考とした。

(地形分類・土地利用)

市原実(1975) 大阪層群と大阪平野, アーバンクボタ, No. 11, 21-25.

市原実(1978) 大阪平野の発達史, アーバンクボタ, No. 16, 2-15.

大阪市(2012) 大阪市地域防災計画<資料編> 1. 総則, 大阪市危機管理室, 6.

大阪府(1978) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類)「大阪西南部(大阪府)、大阪東南部(大阪府)」, 大阪府土木部都市整備局.

太田陽子・成瀬敏郎・田中眞吾・岡田篤正 - 編(2004) 日本の地形6 近畿・中国・四国、東京大学出版会, 68-75, 85-91.

岡義記(1961) 大阪平野南東部の地形と地殻変動, 地理学評論, 34(10), 523-535.

小倉博之 他(1992) 大阪府、上町台地南部の大地構成層と地形面の形成時期, 第四紀研究, 31(3), 179-185.

建設省（1993） 淀川水害地形分類図（その 2） 淀川水害地形分類図，建設省近畿地方建設局淀川工事事務所.

国土庁（1976） 1/100,000 土地分類基本調査「大阪府」，国土庁土地局.

国土地理院（1965） 土地条件調査報告書（大阪平野），国土地理院.

国土地理院（1981） 1/25,000 土地条件図 「大阪東北部」 昭和 56 年調査.

国土地理院（1983） 土地条件調査報告書（大阪地区），国土地理院.

中央防災会議事務局（2006） 中央防災会議「東南海、南海地震等に関する専門調査会」（第 26 回） 中部圏・近畿圏の内陸地震の震度分布等の検討資料集，中央防災会議事務局.

富田林市土地分類調査（細部調査）報告書，大阪府富田林市.

(<http://www.city.tondabayashi.osaka.jp/contents3/category06/totibunrui/index.html>)

富田林市（2007 修正） 富田林市地域防災計画.

奈良県河合町 河合町地域防災計画

羽曳野市（2007） 羽曳野市地域防災計画 大阪府羽曳野市防災会議.

宮地良典・田結庄良昭・吉川敏之・寒川旭（1998） 地域地質研究報告 1/50,000 地質図幅 大阪東南部の地質，地質調査所.

安田喜憲（1978） 大阪府河内平野における過去一万三千年間の植生変遷と古地理，第四紀研究，16(4)，211－229.

1/100,000 土地分類図(地形分類図)「大阪府」(昭和 51 年発行)，国土庁

1/50,000 土地分類基本調査「大阪西南部(大阪府)、大阪東南部(大阪府)」(表層地質図)(昭和 54 年発行)，大阪府

1/50,000 土地分類基本調査「大阪西南部(大阪府)、大阪東南部(大阪府)」(地形分類図)(昭和 54 年発行)，大阪府

1/50,000 土地分類基本調査「大阪西南部(大阪府)、大阪東南部(大阪府)」(土壌図)(昭和 54 年発行)，大阪府

1/50,000 地形図「大阪東南部」大正 3 年第一回部分修正測量(大正 6.5.30 発行)，国土地理院.

1/50,000 地形図「大阪東南部」昭和 43 年編集(昭和 44.7.30 発行)，国土地理院.

1/25,000 地形図「大阪東南部」大正 10 年測量(大正 14.9.30 発行)，国土地理院.

1/25,000 地形図「大阪東南部」昭和 42 年改測(昭和 44.3.30 発行)，国土地理院.

1/25,000 地形図「信貴山」大正 11 年測量(大正 14.12.28 発行)，国土地理院.

1/25,000 地形図「信貴山」昭和 42 年改測(昭和 44.3.30 発行)，国土地理院.

1/25,000 地形図「古市」大正 11 年測量(大正 14.12.28 発行)，国土地理院.

1/25,000 地形図「古市」昭和 42 年改測(昭和 44.1.30 発行)，国土地理院.

1/25,000 地形図「大和高田」大正 11 年測量(大正 15.2.28 発行)，国土地理院.

1/25,000 地形図「大和高田」昭和 42 年改測(昭和 44.1.30 発行)，国土地理院.

1/25,000 治水地形分類図「大阪東南部」昭和 47 年修正測量(昭和 48.10.30 発行)，国土地理院.

1/25,000 治水地形分類図「信貴山」昭和 50 年修正測量(昭和 51.11.30 発行)，国土地理院.

1/25,000 治水地形分類図「古市」昭和 47 年修正測量(昭和 49.2.28 発行)，国土地理院.

1/25,000 治水地形分類図「大和高田」昭和 50 年修正測量(昭和 51.3.30 発行)，国土地理院.

近畿地方整備局大和川河川事務所 大和川の洪水

([http://www.kkr.mlit.go.jp/yamato/knowledge/know\\_02.html](http://www.kkr.mlit.go.jp/yamato/knowledge/know_02.html))

(災害履歴調査)

- 宇佐美龍夫 (2003) 最新版日本地震被害総覧 416-2001. 東京大学出版会, 605p.
- 大阪管区气象台 (1982) 大阪の気象 100 年. 312p.
- 大阪市 (2014) 地域防災計画.
- 大阪府 (1979) 地下水採取規制図 累積沈下等量線図 (大阪府の地盤沈下) .
- 大阪府 (2012) 大阪府環境白書 2012 年【平成 24 年】.
- 大阪府 (2012) 大阪府地域防災計画.
- 岡田義光 (2012) 日本の地震地図 東日本大震災後版. 東京書籍, 223p.
- 柏原市 (2017) 地域防災計画.
- 国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所 (2009) 大和川水系河川整備基本方針.
- 国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所 (2010) 亀の瀬地すべり対策事業.
- 国土交通省国土地理院 (1965) 土地条件調査報告書 (大阪平野) . 99p.
- 堺市 (2015) 地域防災計画.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2009) 日本の地震活動－被害地震から見た地域別の特徴, 第 2 版, 496p.
- 藤田崇 (1982) 亀の瀬. アーバンクボタ No. 20, pp. 12-13.
- 八尾市 (2017) 地域防災計画.
- 若松加寿江 (2011) 日本の液状化履歴マップ 745-2007 (DVD+解説書). 東京大学出版会, 90p.
- 大阪府都市整備部 (2012) 「淀川水系寝屋川流域の当面の治水目標の設定等について」  
([http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/4127/00081344/05h23\\_3shiryo3.pdf](http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/4127/00081344/05h23_3shiryo3.pdf))
- 環境省ホームページ「全国地盤環境情報ディレクトリ (平成 23 年度版)」  
([http://www.env.go.jp/water/jiban/dir\\_h23/index.html](http://www.env.go.jp/water/jiban/dir_h23/index.html)) (平成 24 年)
- 気象庁ホームページ「気象統計情報」  
(<http://www.jma.go.jp/jma/menu/report.html>)
- 気象庁ホームページ「災害をもたらした気象事例」  
(<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/index.html>)
- 国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所ホームページ「淀川を知る 洪水の記録」  
(<http://www.yodogawa.kkr.mlit.go.jp/know/old/flood/index.html>)



## 資料

災害年表（地震災害）

災害年表（風水害）

# 災害年表(地震災害)

西暦 (和暦)	地域 (地震名称)	震央位置(°)		規模 (M)	大阪府		奈良県		出典
		北緯	東経		津波による死者多数。	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	
887年8月26日 (仁和3年7月30日)	五畿・七道	33	135	M8.0~ 8.5	津波による死者多数。	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	奈良県の気象百年
1185年8月13日 (文治1年7月9日)	近江・山城・大和	35	135.8	M=7.4	四天王寺御塚、津波による死者数百名。	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	奈良県の気象百年
1361年8月3日 (正平16年6月24日)	畿内・土佐・阿波	33.0	135.0	M8.1/4 ~8.5	河内藤井寺、その他2社倒壊。人家の被害多数。	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	奈良県の気象百年
1510年9月21日 (永正7年8月8日)	摂津・河内	34.6	135.6	M6.5~ 7.0	堺で死者600人、大阪も人家被害多数。	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	奈良県の気象百年
1596年9月5日 (慶長1年7月13日)	畿内 (慶長伏見地震)	34.2/3	135.3/5	M7.1/2	高槻城、岸和田城破損。大阪で若干の死者。	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	奈良県の気象百年
1662年6月16日 (寛文2年5月1日)	山城・大和・河内・和泉・摂津・丹後・若狭・近江・美濃・伊勢・駿河・三河・信濃	35.2	135.95	M7.1/4 ~7.6	大阪で死者約750人、家屋全壊1000棟余、他に津波による死者多数。	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	奈良県の気象百年
1707年10月28日 (宝永4年10月4日)	五畿・七道 (宝永地震)	33.2	135.9	M8.6	大阪で死者280人、家屋損壊700~800戸。春日大社などの寺社の灯籠は残らず倒れたという。	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	奈良県地域防災計画
1854年7月9日 (安政1年6月15日)	伊賀・伊勢・大和及び隣国 (伊賀上野地震)	34.8	136.1	M7.1/4	津波による死者多数、船舶被害1800、落橋10。	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	奈良県の気象百年
1854年12月23日 (安政1年11月4日)	東海・東山・南海街道 (安政東海地震)	34.0	137.8	M8.4	死者24人、負傷者94人、家屋全壊1011棟、半壊708。	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	奈良県の気象百年
1854年12月24日 (安政1年11月5日)	畿内・東海・東山・北陸・南海・山陰・山陽道 (安政南海地震)	33.0	135	M8.4	大阪市の震度4	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	奈良県の気象百年
1891年10月28日 (明治24)	岐阜県南西部 (濃尾地震)	35.6	136.6	M8	大阪市の震度4	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	奈良県の気象百年
1892年1月3日 (明治25)	岐阜県南東部 (濃尾地震余震)	35.3	137.1	M5.5	大阪市の震度4	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	奈良県の気象百年
1894年1月10日 (明治27)	岐阜県南西部 (濃尾地震余震)	35.4	137.7	M6.3	大阪市の震度4	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	奈良県の気象百年
1899年3月7日 (明治32)	三重県南部 (紀和地震)	34.1	136.1	M7	大阪府地域防災計画	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	奈良県の気象百年
1909年8月14日 (明治42)	滋賀県東部 (江濃(姉川)地震)	35.4	136.3	M6.8	大阪府地域防災計画	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	奈良県の気象百年
1916年11月26日 (大正5)	兵庫県南岸	34.6	135	M6.1	大阪府地域防災計画	大阪府地域防災計画	奈良県	奈良県	奈良県の気象百年

西暦 (和暦)	地域 (地震名称)	震央位置(°)		規模 (M)	記事			
		北緯	東経		大阪府	奈良県		
1925年5月23日 (大正14)	兵庫県北部 (但馬地震)	35.6	134.8	M6.8	大阪市の震度4	大坂市地域防災計画	円山川流域で被害多く、死者428人、家 屋全壊1295戸、焼失2180戸。奈良県の概 害は軽微。	奈良県の気象百年
1927年3月7日 (昭和2)	京都府北部 (北丹後地震)	35.6	134.9	M7.3	死者21人、負傷者126人、全壊127、半壊 117。	大阪府地域防災計画	奈良県の被害は軽微。	奈良県の気象百年
1936年2月21日 (昭和11)	奈良県地方 (河内大和地震)	34.5	135.7	M6.4	死者8人、負傷者52人、全壊18、半壊89。	大阪府地域防災計画	大阪・奈良の府県境で振動が強かった。 死者は大阪府で8人。奈良県では死者1 人、家屋の全半壊148戸、小さな崖崩れ あり、法隆寺・唐招提寺・薬師寺で土崩 の損壊などの被害あり。余震多数。余震 分布から大和川断層の活動と考えられ る。	奈良県の気象百年
1938年1月12日 (昭和13)	紀伊水道南部	33.35	135.04	M6.8			奈良県では十津川村などで小被害。紀伊 水道沿岸部で地鳴り、井戸水位の増減有 り。浅い地震。	奈良県の気象百年
1943年9月10日 (昭和18)	鳥取県東部 (鳥取地震)	35.5	134.2	M7.2	大阪市の震度4	大阪府地域防災計画		
1944年12月7日 (昭和19)	紀伊半島沖 (東南海地震)	33.6	136.2	M7.9	大阪市内で死者6人、負傷者120人、全壊 122、半壊(小破を含む)2500。	大阪府地域防災計画	奈良では死者3名、負傷者21名、全壊89 戸。	奈良県の気象百年
1945年1月13日 (昭和20)	三河湾 (三河地震)	34.7	137.1	M6.8			奈良県の被害記録はなく、戦時中のため 詳細不明。	奈良県の気象百年
1946年12月21日 (昭和21)	紀伊半島沖 (南海地震)	32.9	135.8	M8	死者32人、負傷者46人、全壊261、半壊 217。	大阪府地域防災計画	奈良県では負傷者13人、全壊37戸、春日 大社石灯笼約300基倒れる。	奈良県の気象百年
1948年4月18日 (昭和23)	紀伊半島沖	33.3	135.6	M7	津波の高さ：印南50cm、清水10cm	大阪の気象百年		奈良県の気象百年
1948年6月15日 (昭和23)	紀伊水道 (日高川地震)	33.7	135.3	M6.7	大阪市の震度4	大阪府地域防災計画	和歌山県・奈良県南部で小被害。全体で 死者2人(十津川署管内)、家屋倒壊60 戸、地滑り・崖崩れなど。奈良市では被 害はなかったが、春日大社などの石灯笼 3基倒れる。	奈良県の気象百年
1950年4月26日 (昭和25)	奈良県南部	33.55	135.4	M6.5			奈良県十津川村などでも民家半壊1戸な どの小被害。春日大社の石灯笼10基倒れ る。	奈良県の気象百年
1952年7月18日 (昭和27)	奈良県地方 (吉野地震)	34.5	135.8	M6.7	死者2人、負傷者75人、全壊9、半壊7。	大阪府地域防災計画	奈良県では死者3人、負傷者6人、半壊1 戸、春日大社の石灯笼650基が倒れる。	奈良県の気象百年
1958年11月7日 (昭和33)	択捉島付近	44.3	148.5	M8.1	津波の高さ：串本42cm、大阪6cm	大阪の気象百年		
1960年5月23日 (昭和35)	チリ沖 (チリ地震津波)	39.5S	74.5W	M8.5	津波の高さ：串本308cm、大阪100cm	大阪の気象百年		
1962年1月4日 (昭和37)	和歌山県南部 (紀伊水道地震)	33.38	135.13	M6.4			奈良県でも南部で崖崩れ1ヶ所、落石に よる電話線の被害あり。	奈良県の気象百年
1963年3月27日 (昭和38)	福井県沖 (越前沖地震)	35.8	135.8	M6.9	大阪市の震度4	大阪府地域防災計画		
1964年3月28日 (昭和39)	アラスカ南部近海 (アラスカ地震津波)	61.1	147.8	M8.5	津波の高さ：串本74cm、大阪22cm	大阪の気象百年		
1965年2月4日 (昭和40)	アリユージャン中部 (アリユージャン地震津 波)	51.3	178.6	M7.5	津波の高さ：串本112cm、大阪8cm	大阪の気象百年		
1969年9月9日 (昭和44)	岐阜県美濃中西部	35.8	137.1	M6.6	大阪市の震度4	大阪府地域防災計画		

西暦 (和暦)	地域 (地震名称)	震央位置(°)		規模 (M)	記事		
		北緯	東経		大阪府	奈良県	
1985年1月6日 (昭和60)	和歌山県北部	34.2	135.5	M5.8	大阪市の震度4	大阪府 大阪府地域防災計画	奈良県 奈良県地域防災計画
1995年1月17日 (平成7)	淡路島付近 (兵庫県南部地震)	34.6	135.0	M7.3	死者31人、負傷者3589人、全壊895棟、半壊7232棟	大阪府地域防災計画	奈良県内の被害は負傷者12人、建物の一部損壊15件など比較的小規模。
1995年1月25日 (平成7)	兵庫県南東部	34.8	135.3	M5.1	大阪市の震度4	大阪府地域防災計画	
2000年10月6日 (平成12)	鳥取県西部 (鳥取県西部地震)	35.3	133.3	M7.3	負傷者4人。	日本の地震活動一被害 地震から見た地域別の 特徴一	
2000年10月31日 (平成12)	三重県中部	34.18	136.19	M5.7			奈良県でも南部で一部落石、崩土があった。
2004年9月5日 (平成16)	紀伊半島南東沖 (紀伊半島南東沖地震)	33.08	137.08	M7.4	負傷者10人。	日本の地震活動一被害 地震から見た地域別の 特徴一	奈良県では、一部で道路の落石及び小規模崩土があった。負傷者6人。
2004年9月7日 (平成16)	東海道沖	33.2	137.3	M6.4			人的物的被害無し。 奈良県地域防災計画

参照 ①国立天文台編(2011)「理科年表 平成24年」丸善出版

②宇佐美龍夫(2003)「新編日本被害地震総覧[416]-2001」東京大学出版会

※地震の緯度・経度、規模などは①、②の資料も参照した。

災害年表(風水害)

和暦	年	西暦	月	日	終了日	気象概要	大府府			奈良県			出典	
							最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)		
明治	1	1868	5	22	7	19	霖雨洪水							
明治	1	1868	7				明治元年7月洪水							河川整備基本方針 (大和川水系)
明治	1	1868	9	3	9	4	風雨洪水							
明治	3	1870	10	1			大風雨							
明治	3	1870	10	12			大風雨洪水							
明治	4	1871	7	4			大風雨洪水							
明治	5	1872	10	3	10	30	洪水							
明治	6	1873	8	30			大風雨洪水							
明治	9	1876	10				暴風雨洪水							
明治	13	1880	10	3			大風雨							
明治	15	1882	8	5			暴風雨洪水							
明治	16	1883	9	10			暴風雨							
明治	16	1883	10	7			暴風雨							
明治	17	1884	7	1			大雨洪水							
明治	18	1885	6	15	7	1	明治大洪水							
明治	18	1885	7	1			台風							河川整備基本方針 (大和川水系)
明治	22	1889	8	20			洪水							
明治	29	1896	7	21	7	23	大雨							
明治	29	1896	9				大雨							
明治	29	1896	9	6			大雨							
明治	36	1903	4	11			雷雨							

開始日				終了日				大阪府				奈良県													
和暦	年	西暦	月	日	月	日	日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典							
明治	36	1903	7	7	7	9	大雨			264	梅雨前線により四国東部から近畿一体に強い降雨。大和川の水位は5.3mとなり、流域全体で田畑、家屋の浸水、道路、堤防等の損傷が多数。建物被害11,696軒。	河川整備基本方針(大和川水系)													
明治	43	1910	9	6	9	9	大雨				京阪以西で多量の降雨により河川氾濫。堤防決壊、橋梁流失、鉄道線路の破壊による交通一時杜絶、家屋の浸水等の被害有り。	大阪の気象百年													
明治	44	1911	6	14	6	16	大雨					飛鳥川は一丈余も増水し、16日午後2時頃、真菅村大字五井の堤防が延べ六尺ほど崩壊した。八木町の東八木では、約二・三寸の浸水家屋を十軒ばかり出した。蘇我川は増水し、西岸の家屋五戸が床上浸水をした。	奈良県の気象百年												
明治	44	1911	8	15	8	17	暴風雨				近畿地方かなりの被害あり。	大阪の気象百年													
大正	1	1912	9	22	9	23	台風	37.0		158	大阪湾高潮。死者3名、家屋全半壊203棟、床上浸水2300戸、船舶破損沈没41隻。	大阪の気象百年	八木 25.7				猛烈な台風が、22日午後10時に高知県足摺岬付近に上陸し、京阪以西に非常に猛威をふるった。県内の死者は、添上郡5名、生駒郡1名、磯城郡9名、高市郡14名、北葛城郡1名、南葛城郡4名、宇智郡1名、吉野郡15名、奈良市1名の合計51名となっている。また、大和風水害文によると、春日神社境内及び奈良公園での吹倒木・吹折木数は17354本であった。	奈良県の気象百年							
大正	4	1915	8	5			台風	20.0				近畿地方かなりの被害あり。	大阪の気象百年												
大正	6	1917	9	29	10	1	台風				台風豪雨により、淀川水系の各河川は急激に増水、淀川右岸の支川芥川と、淀川右岸の大塚堤防が決壊。その濁水が右岸沿いに突進し、神崎川の支川安威川、山田川合流点、味吉村(三島町)味吉の堤防を破るなど決壊多数。三島郡の15町村、西成郡13町村(大塚から淀川沿線河口まで全郡)と北河内の3町村が水没、被害反別は5871.3ha、被災戸数は計15,358戸。死傷者40人。	淀川洪水の記録	八木 9.7				奈良県は、関東に比べて被害は僅少であるが、近府県に比べ桁はずれの大被害を受けた。雨量は県内平均的に降り、台風の来襲を受けるまでに各地は相当湿っていたため、被害が拡大した。県内の主な被害は、死者25名、行方不明5名、負傷者24名、家屋全壊53戸、半壊117戸、流失58戸、床上浸水3341戸、床上浸水6360戸等となっている。	奈良県の気象百年							
大正	7	1918	7	11	7	13	台風	大阪 18.9		大阪24.2			大阪の気象百年												
大正	7	1918	8	29	8	30	台風	19.1		71			大阪の気象百年												
大正	9	1920	8	4			台風	24.0		82			大阪の気象百年												
大正	9	1920	8	20	8	21	台風	20.0					大阪の気象百年												
大正	10	1921	9	25	9	26	台風	25.0					大阪府地域防災計画 関連資料集	八木 19.7					平垣郡は特に風勢が猛烈で、山間部は雨勢の方が激烈であった。県内の主な被害は、死者5名、負傷者23名、建物被害21142戸(家屋全壊342戸を含む)等。その他、樹木、稲、果実などに多大の被害を被った。	奈良県の気象百年					
大正	12	1923	6	15	6	23	大雨				阪神方面沈没難破船数十隻行方不明10余名。	大阪の気象百年													
大正	14	1925	8	16	8	17	台風	16.0		56			大阪の気象百年												
昭和	4	1929	8	15			台風				床上、床下浸水約2080戸 住吉区で建築中の校舎倒壊。農作物の浸水。船舶沈没2隻 行方不明13名。	大阪の気象百年													
昭和	5	1930	7	31	8	1	台風				台風。死者2名、家屋全半壊・床上・床下浸水13328棟。	大阪の気象百年	八木 6.4						奈良県に及ぼす風力の影響は余りなかったが、豪雨となって河川が氾濫し、主として平垣郡大和川流域で被害を受けた。県内の主な被害は、死者5名、行方不明2名、負傷者14名、全壊22戸、半壊81戸、流出42戸、浸水6149戸、堤防決壊205ヶ所、道路損壊9229間、橋梁流出135ヶ所、田畑浸水・流失3668町歩、山林崩壊344ヶ所、鉄軌道被害9ヶ所等になった。	奈良県の気象百年					
昭和	5	1930	8	15			大雨	9.3		135	死者2名、住家全半壊・浸水13328棟。	大阪府地域防災計画 関連資料集													
昭和	6	1931	10	12	10	13	大雨	12.7					大阪府地域防災計画 関連資料集												

開始日			終了日			気象概要	大阪府			奈良県			
和暦	年	西暦	月	日	月		日	日	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典
昭和	7	1932	7	1	7		2	大雨					
昭和	7	1932	7	5			亀の瀬地すべり						
昭和	7	1932	7	7	7	9	大雨						
昭和	8	1933	9	4	9	5	台風						
昭和	8	1933	10	20			台風						
昭和	9	1934	6	20	6	21	大雨						
昭和	9	1934	8	1			雷雨						
昭和	9	1934	9	20	9	21	室戸台風	48.4	60.0	223	死者1812名、行方不明者76名、負傷者8932名、家屋全壊・流失14368棟、半壊15674棟、床上浸水142910棟、床下浸水40830棟。 梅雨前線。三島郡で田畑浸水約千町。大阪市内の床上・床下浸水3800棟。 亀の瀬地すべりにより、河道が閉塞され、上流部で浸水被害が発生。 梅雨前線。被害不明。 床上・床下浸水27000棟、浚渫船4隻沈没、煙突倒壊。 行方不明1名、負傷4名、船舶被害27隻。 死者1名、私鉄一時不通。 床上・床下浸水4230棟、焼失家屋1戸。	大阪の気象百年 河川整備基本方針(大和川水系) 大阪の気象百年 大阪の気象百年 大阪の気象百年 大阪の気象百年 大阪の気象百年 大阪府地域防災計画 関連資料集	奈良県の気象百年 奈良県でも台風の中心経路に近く、全域で相当の被害を受けた。県内の主な被害は、死者11名、負傷者79名、家屋全壊643戸、半壊710戸、学校全壊5校、半壊3校、橋梁流失42ヶ所、道路損壊321ヶ所、堤防決壊47ヶ所等となっている。
昭和	10	1935	6	29			大雨						
昭和	10	1935	8	9	8	11	台風						
昭和	10	1935	8	11			風雨	42.0	183				
昭和	10	1935	8	27	8	30	台風	13.8	21.6	74			
昭和	10	1935	8	31	9	2	大雨						
昭和	11	1936	2	4	2	5	強風						
昭和	11	1936	4	25			強風						
昭和	11	1936	10	2	10	4	台風						
昭和	12	1937	9	10	9	11	台風						
昭和	13	1938	7	3	7	6	大雨						
昭和	13	1938	9	5			台風	13.2	19.0	19			
昭和	14	1939	6	16	6	17	大雨						
昭和	15	1940	7	9	7	10	雷雨		大阪	141.7			
昭和	15	1940	7	15			集中豪雨						
昭和	16	1941	6	25	6	29	大雨						
昭和	17	1942	8	27	8	28	台風						
昭和	17	1942	9	21	9	22	台風						
昭和	19	1944	9	7	9	8	台風						
昭和	19	1944	9	17			台風16号	18.6	21.8	53			
昭和	19	1944	10	7	10	8	台風20号	18.6	21.8	52			
昭和	20	1945	9	17	9	18	枕崎台風	19.0	22.5	3			
昭和	20	1945	10	9	10	13	阿久根台風	19.0	15.5	3			
昭和	21	1946	7	29	7	30	台風						
昭和	23	1948	8	24	8	26	大雨						
昭和	23	1948	9	11	9	12	大雨						
昭和	23	1948	10	4	10	5	リビータ台風						
昭和	23	1948	11	5	11	6	大雨						
昭和	24	1949	6	20	6	23	テラ台風						

開始日			終了日			気象概要	大阪府			奈良県							
和暦	年	西暦	月	日	月		日	日	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典		
										気象値							
昭和	24	1949	7	28	7	29	ヘスター台風							被害状況(奈良県)死者1、浸水家屋471。	奈良市災害史		
昭和	24	1949	9	22	9	24	大雨	二つ玉低気圧。負傷1名、床上浸水100棟、床下浸水2001棟。									
昭和	25	1950	1	6			強風	季節風。大阪港機能麻痺。船舶被害1隻。									
昭和	25	1950	1	30	1	31	強風	季節風。建物被害1棟、床下浸水330棟、船舶被害3隻。									
昭和	25	1950	2	10			強風	季節風。死者1名、建物被害1棟、船舶沈没1隻。									
昭和	25	1950	3	6	3	7	大雨	日本海低気圧、前線。床上浸水2棟、床下浸水2277棟、がけ崩れ1ヶ所。									
昭和	25	1950	5	19	5	20	大雨	梅雨前線、二つ玉低気圧。建物被害3棟、床下浸水300棟、鉄軌道被害1ヶ所、電柱倒壊10数本。									
昭和	25	1950	6	20	6	21	大雨	梅雨前線。建物全壊1棟、床下浸水2232棟。									
昭和	25	1950	6	27	6	29	大雨	梅雨前線。床下浸水710棟。									
昭和	25	1950	9	2	9	4	ジェーン台風	死者240名、行方不明者16名、負傷者21215名、家屋全壊・流失10625棟、半壊60708棟、床上浸水54139棟、床下浸水40025棟。	28.1	44.7	65		大台ヶ原 850.9 河合 432.2 奈良(肘塚) 39.7 橿原84.1	京阪神や四国、和歌山沿岸地方に大被害を与えた。県内の主な被害は、死者1名、負傷者15名、家屋全壊151戸、半壊1576戸、焼失9戸、床上浸水14戸、床下浸水122戸、非住家被害397戸、田流失・埋没25町、田冠水197町、畑流失・埋没27町、畑冠水117町、道路損壊144ヶ所、橋梁流失65ヶ所、堤防決壊1ヶ所、通信施設被害13ヶ所、電柱倒壊2000本等になった。	奈良県の気象百年		
昭和	26	1951	7	1	7	2	ケイト台風	梅雨前線とケイト台風。床上浸水8棟、床下浸水8256棟。									
昭和	26	1951	7	7	7	9	大雨	梅雨前線。床下浸水2424棟。									
昭和	26	1951	7	10	7	16	大雨	梅雨前線。行方不明1名、負傷4名、建物被害85棟、床上浸水681棟、床下浸水13671棟、がけ崩れ121ヶ所、船舶被害20隻。									
昭和	26	1951	10	13	10	15	ルース台風	死者1名、負傷1名、床上浸水492棟、床下浸水2583棟。									
昭和	27	1952	1	25			強風	季節風。床下浸水50棟、船舶被害1隻。									
昭和	27	1952	6	22	6	25	ダイナ台風	建物被害1棟、床下浸水3550棟、がけ崩れ2ヶ所、通信施設被害17回線。							奈良県の気象百年		
昭和	27	1952	7	1	7	3	大雨	死者1名、床上浸水491棟、床下浸水8166棟。							奈良県の気象百年		
昭和	27	1952	7	9	7	11	7月豪雨	死者・不明者41名、負傷者454名、家屋全壊・流失187棟、床上・床下浸水192238棟。			389		大台ヶ原 361.6 王寺 172.0 奈良(肘塚) 135.0 橿原 138.5	奈良県は、全域で暴風よりも豪雨に悩まされた。県内の主な被害は、家屋一部損壊1戸、床上浸水4戸、床下浸水66戸、田流失・埋没10町、田冠水270町、畑冠水20町、道路損壊18件、橋梁流失3件、堤防決壊6件、山・崖崩れ7件、電柱倒壊1件、鉄軌道被害1件、木材流失2030石等となっている。	奈良県の気象百年		
昭和	27	1952	11	4	11	5	アグネス台風	床下浸水172棟。					洞川 267.1 上市 228.2 奈良(肘塚) 124.8 橿原 133.0	奈良県の雨量は、通例の雨量分布と反対に宇陀郡・吉野郡などの山岳方面が少なく、大和平野に多かった。県内の主な被害は、負傷者1名、住家被害1戸、半壊1戸、一部破損2戸、床下浸水123戸、非住家被害2戸、田冠水242町、畑冠水28町、道路損壊20件、橋梁流失5件、堤防決壊8件、山・崖崩れ14ヶ所、鉄軌道被害1件等になった。	奈良県の気象百年		
昭和	28	1953	7	7	7	7月豪雨	死者・不明者41名、負傷者454名、家屋全壊・流失187棟、床上・床下浸水192238棟。						王寺 188.2 河合 131.0 奈良(肘塚) 99.3 橿原 119.3	梅雨前線が活発化し、特に大和川流域で短時間に豪雨を生じ、総降水量からみたら以上に被害は甚大となった。県内の主な被害は、住家一部破損2戸、床上浸水8戸、床下浸水997戸、田流失・埋没5町、田冠水1464町、畑流失・埋没90町、畑冠水21町、道路損壊6ヶ所、橋梁流失15ヶ所、堤防決壊5ヶ所、鉄軌道被害2ヶ所等となっている。	奈良県の気象百年		
昭和	28	1953	11	4	11	5	アグネス台風	床下浸水172棟。									
昭和	28	1953	1	12	1	15	強風	大正池決壊により東近畿一帯で水害。死傷者1718名、住家全半壊流失1387棟、床上・床下浸水4208棟。									
昭和	28	1953	3	11			強風	季節風。大阪港機能麻痺。汽船沈没1隻。									
昭和	28	1953	5	29	5	30	大雨	寒冷前線通過。強風による架線切れにより、国鉄一時不通。									
昭和	28	1953	6	4	6	8	台風2号	瀬戸内海低気圧。床下浸水20棟。									
昭和	28	1953	7	2	7	6	大雨	負傷1名、住家全半壊86棟、床上浸水30棟、床下浸水3841棟、がけ崩れ8ヶ所、鉄軌道被害3ヶ所。									
昭和	28	1953	7	2	7	6	大雨	梅雨前線。死者1名、住家全半壊2棟、床下浸水1475棟。							数時間にわたって雨量150ミリに達する豪雨があり、添上郡山間部や磯城郡の一部に被害があったが、柳生方面では河川氾らんし、橋が流され、家屋田畑が浸水した。	奈良市災害史	



開始日				終了日				大阪府				奈良県						
和暦	年	西暦	月	日	月	日	日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典
昭和	28	1953	7	17	7	20	大雨					梅雨前線。負傷1名、建物被害1棟、床上浸水3274棟。	大阪の気象百年				大塔、野迫川村では山崩れにより家屋が倒壊・埋没・流失して、死者27名(野迫川村20名、大塔村7名)を出すに至った。また、十津川は増水して木材・橋梁が流失し、至る所で崖崩れを生じた。一方、紀ノ川、大和川各支流も警戒水域を突破し、決壊寸前の状態になった。県内の主な被害は、死者31名、行方不明13名、負傷者30名、家屋全壊59戸、床上浸水1385戸、非住家被害79戸、一部破損1戸、床上浸水95戸、床上浸水1483戸、床上浸水79戸、田流失・埋没165町、水田冠水1483町、畑流失・埋没102町、畑冠水84町、道路損壊809ヶ所、橋梁流失231ヶ所、堤防決壊25ヶ所、山・崖崩れ530ヶ所、鉄軌道被害20ヶ所等に及んだ。	奈良県の気象百年
昭和	28	1953	8	14	8	15	南山城水害					国・私鉄一時不通。床上浸水60棟。	大阪の気象百年					
昭和	28	1953	9	1			大雨					前線により府北部に局地的豪雨。住家全半壊5棟、床上浸水41棟、床上浸水1510棟。	大阪の気象百年					
昭和	28	1953	9	14	9	15	大雨					寒冷前線通過に伴い阪神地方に強雷雨。鉄道交通混乱。負傷4名。	大阪の気象百年					
昭和	28	1953	9	24	9	26	台風13号	22.0	28.9	176	中河内地区の山崩れで堰堤潰砂し、荒藤、榎林地崩壊。死者26名、行方不明者1名、負傷者453名、家屋全壊・流失877棟、半壊3354棟、床上浸水13434棟、床上浸水150354棟。	大阪府地域防災計画 関連資料集	奈良 21.4	奈良 29.7	大台ヶ原 1017.3 河合 748.2 前鬼 509.4 奈良 163.6	奈良県でも、台風の豪雨圏に入り全域で被害が続出した。特筆すべきは、最大1時間降水量が吉野郡上北山村河合123.4mm、大台ヶ原山頂117.7mmの記録的な短時間豪雨で、吉野川や北山川が氾濫した。また、奈良市内を流れる佐保川、吉城川、菅提川が増水し、奈良市佐保、法蓮付近の民家1300戸が濁水にのまれた。県内の主な被害は、死者8名、行方不明4名、負傷者26名、家屋全壊137戸、半壊533戸、流失103戸、一部破損2341戸、床上浸水2265戸、床上浸水8536戸、非住家被害595戸、田流失・埋没619町、田冠水3941町、畑流失・埋没303町、畑冠水466町、道路損壊1669ヶ所、橋梁流失430ヶ所、堤防決壊448ヶ所、山・崖崩れ1373ヶ所、電柱倒壊1503ヶ所、鉄軌道被害2ヶ所、船舶流出13隻等の上った。	奈良県の気象百年	
昭和	29	1954	6	5	6	7	大雨					日本海低気圧。床上浸水20棟、床上浸水1205棟。	大阪の気象百年					
昭和	29	1954	6	22	6	23	大雨					梅雨前線。死者1名、負傷者1名、建物全半壊2棟、床上浸水362棟。	大阪の気象百年					
昭和	29	1954	6	28	6	30	大雨					梅雨前線。府下の中小河川に大被害。死者2名、負傷者1名、建物被害35棟、床上浸水532棟、床上浸水34686棟。	大阪の気象百年					
昭和	29	1954	7	4	7	6	大雨					梅雨前線。府北部を中心に被害。死者1名、建物全半壊111棟、床上浸水344棟、床上浸水16894棟。	大阪の気象百年					
昭和	29	1954	8	17	8	20	台風5号					負傷者9名、床上浸水53棟。	大阪の気象百年					
昭和	29	1954	9	10	9	14	台風12号					建物被害30棟、床上浸水224棟。	大阪の気象百年					
昭和	29	1954	9	17	9	19	台風14号					負傷4名、建物被害8棟、床上浸水129棟、がけ崩れ1ヶ所。	大阪の気象百年					
昭和	29	1954	9	25	9	27	洞爺丸台風	26.3				台風15号。死者2名、負傷者7名、建物全半壊87棟、床上浸水88棟、床上浸水239棟、鉄軌道被害4ヶ所。	大阪の気象百年					
昭和	30	1955	4	14	4	18	大雨					前線停滞。建物被害5棟、床上浸水293棟。	大阪の気象百年					
昭和	30	1955	6	18	6	19	大雨					梅雨前線。床上浸水1145棟、がけ崩れ2ヶ所。	大阪の気象百年					
昭和	30	1955	7	22	7	23	大雨					熱帯低気圧。床上浸水70棟。	大阪の気象百年					
昭和	30	1955	8	31			大雨					日本海低気圧、前線。床上浸水230棟。	大阪の気象百年					
昭和	30	1955	9	29	10	11	台風22号					床上浸水150棟。	大阪の気象百年					
昭和	30	1955	10	19	10	20	台風26号					死者1名、床上浸水55棟、がけ崩れ3ヶ所、船舶被害3隻。	大阪の気象百年					
昭和	31	1956	2	27			強風					発達した低気圧が太平洋岸を通過。架線切れにより国・私鉄混乱。船舶被害1隻。	大阪の気象百年					
昭和	31	1956	3	18	3	19	大雨					低気圧が太平洋岸を通過。床上浸水650棟。	大阪の気象百年					
昭和	31	1956	6	7			大雨					梅雨前線。大阪市、堺市で床上浸水550棟。	大阪の気象百年					
昭和	31	1956	6	11	6	12	大雨					梅雨前線。低気圧。床上浸水2430棟。	大阪の気象百年					
昭和	31	1956	6	23			強風					日本海低気圧。船舶沈没1隻。	大阪の気象百年					
昭和	31	1956	7	23			大雨					寒冷前線通過。大阪の最大1時間降水量32.4mm。落雷により国・私鉄混乱。建物被害1棟、床上浸水1649棟。	大阪の気象百年					
昭和	31	1956	8	16	8	19	台風9号					死者1名、負傷者1名、建物被害7棟、床上浸水21棟、床上浸水109棟、船舶被害2隻。	大阪の気象百年					

和暦	年	西暦	開始日		終了日		気象概要	大阪府				奈良県					
			年	月	日	年		月	日	気象値		気象値		事象		出典	
			最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象		出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典				
昭和	31	1956	9	25	9	27	台風15号	106			台風自体の雨の他に寒冷前線の活動による降雨が重なり、最大雨量は石川流域で250mm、大和川上流域で210mm。三郷町で堤防が決壊、初瀬川流域では大三輪町、大西領芝西地区で堤防が決壊、葛城川流域で広陵町藤之森、御所市南部で柳田川が決壊し、大きな被害が発生。この洪水により大和川流域全体では建物被害が12435戸、浸水被害が1038ha。大阪府と奈良県合わせて死者・行方不明者4名、家屋全・半壊18棟、床上浸水700棟、床上浸水11717棟。大阪府のみでは死者・行方不明者2名、家屋全・半壊1棟、床上浸水141棟、床下浸水8075棟。	河川整備基本方針 (大和川水系)	奈良 12.2	奈良 16.2	前鬼 363.1 山上ヶ岳 294.0 川上 292.6 奈良 161.1		25日から県全域で大雨となり、桜井市山間部では土砂崩れのため2名が死亡するなど、県北部平坦地を中心に被害が発生した。県内の主な被害は、死者2名、行方不明2名、負傷者2名、家屋全壊7戸、半壊4戸、一部破損45戸、家屋流失6戸、非住家被害18戸、床上浸水559戸、床下浸水3642戸、堤防決壊7ヶ所、橋梁流失38ヶ所、道路損壊59ヶ所、山・崖崩れ54ヶ所、田流失・埋没10町、田冠水597町、畑流失・埋没8町、畑冠水92町、鉄軌道被害4ヶ所、通信施設被害4ヶ所、電柱倒壊3ヶ所等になった。
昭和	32	1957	4	19	4	21	大雨				前線停滞。床下浸水300棟。	大阪の気象百年					
昭和	32	1957	6	27	6	28	台風5号	14.4	22.8	293.0	東大阪水害(6月水害)。雨量300mmの集中豪雨。生駒山系、枚岡市の山崩れにより水源産地の崩壊、浸流の荒廃。死者6名、負傷者4名、家屋全半壊流失20棟、床上・床下浸水121819棟。	大阪府地域防災計画 関連資料集				主に県北部で、26日夜半過ぎから雨滋賀強まり、被害が発生した。県内の主な被害は、死者1名、負傷者1名、行方不明1名、家屋半壊2棟、一部破損2棟、非住家被害3棟、床上浸水116棟、床下浸水946棟、田流失・埋没1町、田冠水1039町、畑冠水15兆、道路損壊25ヶ所、橋梁流失4ヶ所、堤防決壊5ヶ所、山・崖崩れ9ヶ所、鉄軌道被害4ヶ所等となっている。	奈良県の気象百年
昭和	32	1957	7	10			大雨				梅雨前線。大阪府を中心に被害。落雷により私鉄混乱。建物全半壊7棟、床上浸水938棟、床下浸水24096棟。	大阪の気象百年					
昭和	32	1957	7	12			大雨				梅雨前線。床上浸水42棟、床下浸水2878棟。	大阪の気象百年					
昭和	32	1957	7	16	7	17	大雨				梅雨前線。大阪の最大1時間降水量60.0mm。床上浸水866棟、床下浸水23687棟、停電約50000世帯。	大阪の気象百年					
昭和	32	1957	7	28			大雨				前線。鉄道一時不通。停電。床下浸水900棟。	大阪の気象百年					
昭和	32	1957	8	12			大雨				床上浸水15棟、床下浸水745棟。	大阪の気象百年					
昭和	32	1957	9	7			台風10号				床上浸水1棟、床下浸水568棟。	大阪の気象百年					
昭和	32	1957	9	9	9	11	大雨				前線停滞。床上浸水15棟、床下浸水745棟。	大阪の気象百年					
昭和	33	1958	4	21	4	23	大雨				前線停滞。床上浸水16棟、床下浸水3146棟。	大阪の気象百年					
昭和	33	1958	8	24	8	26	台風17号				負傷10名、建物全半壊81棟、床上浸水9棟、床下浸水798棟、がけ崩れ19ヶ所。	大阪の気象百年	奈良 18.7	奈良 27.5	日出岳 780.0 河合 672.6 山上ヶ岳 636.0 奈良 129.9	県南東部を中心に大雨が降った。被害は県全域で死者2名、行方不明6名、負傷者2名、家屋全壊5戸、半壊44戸、一部破損73戸、家屋流失5戸、非住家被害17戸、床上浸水95戸、床下浸水471戸、田流失・埋没6町歩、田冠水85町、畑流失・埋没4町歩、畑冠水75町歩道路損壊118ヶ所、橋梁流失29ヶ所、堤防決壊5ヶ所、山・崖崩れ70ヶ所、通信施設被害44ヶ所等になった。	奈良県の気象百年
昭和	33	1958	8	27	8	28	大雨				寒冷前線通過。府北部に強雷雨。建物全半壊2棟、床上浸水279棟、床下浸水1541棟。	大阪の気象百年					
昭和	33	1958	10	15			大雨				前線通過。床下浸水3795棟。	大阪の気象百年					
昭和	34	1959	7	13	7	15	台風5号				大阪の1日降水量134.2mm。建物被害2棟、床上浸水282棟、床下浸水26147棟。	大阪の気象百年					
昭和	34	1959	8	13	8	14	台風7号	199			台風7号と前線。死者2名、建物被害6棟、床上浸水887棟、床下浸水11711棟。	大阪の気象百年					
昭和	34	1959	9	26	9	27	伊勢湾台風				台風15号。死者1名、負傷者14名、建物被害482棟、床上浸水19棟、床下浸水1062棟、がけ崩れ8ヶ所、船舶被害20隻。	大阪の気象百年	奈良 23.3	奈良 32.6	日出岳 867.0 前鬼 817.0 山上ヶ岳 826.0 奈良 221.0	奈良県でも被害は全域に及び、死者88名、行方不明25名、負傷者104名、家屋全壊795棟、半壊1598棟、流失558頭、一部破損1056棟、非住家被害653棟、床上浸水6171棟、床下浸水4054棟、田流失・埋没421ha、田冠水1309ha、畑流失・埋没124ha、畑冠水666ha、道路損壊863ヶ所、橋梁流失381ヶ所、堤防決壊118ヶ所、山・崖崩れ1967ヶ所、鉄軌道被害6ヶ所、通信施設被害118回線、罹災者概数30221名等になった。	奈良県の気象百年
昭和	34	1959	11	2			大雨				日本海低気圧、寒冷前線通過。大阪の最大1時間降水量38.5mm。死者1名、床上浸水43棟、床下浸水4672棟。	大阪の気象百年					

開始日				終了日				大阪府				奈良県							
和暦	年	西暦	月	日	月	日	日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	
昭和	35	1960	4	19	4	20	大雨					低気圧が瀬戸内を東進。陸海空の交通混乱。建物被害4棟、汽船大破1隻。	大阪の気象百年						
昭和	35	1960	5	18	5	19	大雨					南岸低気圧。床上浸水10棟、床下浸水2593棟。	大阪の気象百年						
昭和	35	1960	5	27			大雨					二つ玉低気圧。床下浸水30棟。	大阪の気象百年						
昭和	35	1960	6	21	6	22	豪雨					梅雨前線、日本海低気圧。建物被害7棟、床下浸水566棟、山崩れ1ヶ所。	大阪の気象百年				県内一円に豪雨があり、奈良の雨量145ミリ、富雄川は警戒水位を超え、一部で浸水するところもでた。	奈良市災害史	
昭和	35	1960	7	7	7	8	大雨					梅雨前線。床下浸水200棟。	大阪の気象百年						
昭和	35	1960	8	12	8	13	台風12号					床上浸水168棟、床下浸水18658棟。	大阪の気象百年						
昭和	35	1960	8	28	8	30	台風16号					死者3名、負傷者3名、建物被害58棟、床上浸水478棟、床下浸水8934棟、がけ崩れ101ヶ所、船舶被害1隻。	大阪の気象百年						
昭和	36	1961	5	28	5	29	台風4号					建物全壊2棟、床上浸水2棟、床下浸水57棟。	大阪の気象百年						
昭和	36	1961	6	24	6	30	豪雨	9.8	12.0	296		死者1名、家屋の全壊・流失11棟、床上浸水2855棟、床下浸水32205棟。	大阪の気象百年						
昭和	36	1961	7	9	7	10	大雨					寒冷前線通過。十三で強風により煙突倒壊。落雷により国・私鉄混乱。東大阪一体で停電。6/24～7/10の全国にわたる大雨を「昭和36年梅雨前線豪雨」と名付けた。	大阪府地域防災計画 関連資料集						
昭和	36	1961	7	25			大雨					日本海低気圧。床上浸水5棟、床下浸水25棟。	大阪の気象百年						
昭和	36	1961	9	15	9	17	第2室戸台風	33.3	50.6	44		死者32名、負傷者2392名、家屋の全壊・流失3386棟、半壊21356棟、床上浸水61488棟、床下浸水59729棟。	大阪府地域防災計画 関連資料集	奈良 25.0	奈良 42.4	山上ヶ岳 642.0 前鬼 586.0 日出岳 531.0 奈良 43.0	奈良県でも全域で死者6名、負傷者142名、家屋全壊362棟、半壊888棟、流失3棟、床上浸水91棟、床下浸水666棟、一部破壊10963棟、非住家被害2470棟、田流失・埋没454ha、田冠水665ha、畑流失・埋没2ha、畑冠水124ha、道路損壊192ヶ所、橋梁流失34ヶ所、堤防決壊10ヶ所、山・崖崩れ141ヶ所、鉄軌道被害8ヶ所、通信施設被害864回線、木材流失1510㎡に及んだ。	奈良県の気象百年	
昭和	36	1961	10				大雨					寒冷前線通過。府下10万戸停電。床上浸水282棟、床下浸水1025棟、通信回線被害55000回線。	大阪の気象百年						
昭和	36	1961	10	26	10	28	大雨			151		低気圧が瀬戸内を通過。建物全半壊2棟、床上浸水187棟、床下浸水5923棟、がけ崩れ12ヶ所。	大阪の気象百年				県南東部を中心に大雨となった。県内の主な被害は、死者1名、負傷者1名、家屋全壊3棟、半壊2棟、一部破壊12棟、非住家被害4棟、床上浸水17棟、床下浸水628棟、田流失・埋没31ha、田冠水771ha、畑冠水2ha、道路損壊89ヶ所、橋梁流失24ヶ所、堤防決壊6ヶ所、山・崖崩れ76ヶ所、通信施設被害3回線等となっている。	奈良県の気象百年	
昭和	37	1962	6	6	6	7	大雨					梅雨前線。床下浸水150棟。	大阪の気象百年						
昭和	37	1962	6	9	6	10	大雨					梅雨前線。死者1名、建物被害1棟、床下浸水1169棟。	大阪の気象百年						
昭和	37	1962	6	12	6	15	大雨					梅雨前線。死者1名、負傷者5名、建物被害4棟、床上浸水30棟、床下浸水649棟、がけ崩れ14ヶ所。	大阪の気象百年						
昭和	37	1962	6	26			大雨					梅雨前線。床下浸水50棟。	大阪の気象百年						
昭和	37	1962	7	4	7	6	大雨					梅雨前線。建物全壊6棟、床上浸水30棟、床下浸水649棟、がけ崩れ10ヶ所。	大阪の気象百年						
昭和	37	1962	7	26	7	27	台風7号					死者1名、負傷者15名、建物被害34棟、床下浸水11棟、船舶被害10隻、鉄軌道被害11ヶ所、停電30万戸。	大阪の気象百年	奈良 19.0	奈良 29.3	山上ヶ岳 759.0 河台 599.0 寺垣内 563.0 奈良 74.0	北部平垣部では、強風のため農作物・果樹類の被害、道畔に転落したバス・トラック等もあった。県全域で負傷者1名、家屋全壊2棟、流失1棟、床上浸水9棟、床下浸水41棟、田冠水・埋没9ha、田冠水20ha、道路損壊36ヶ所、橋梁流失2ヶ所、山・崖崩れ8ヶ所、鉄軌道被害1ヶ所、通信施設被害267回線等があった。	奈良県の気象百年	
昭和	37	1962	10	14			大雨					寒冷前線通過。床下浸水600棟、通信施設被害1300回線。	大阪の気象百年						
昭和	38	1963	5	14	5	15	大雨					日本海低気圧、寒冷前線。床下浸水1574棟、鉄軌道被害1ヶ所。	大阪の気象百年						
昭和	38	1963	5	16	5	17	大雨					梅雨前線。床下浸水177棟、船舶事故1件。	大阪の気象百年						
昭和	38	1963	5	21	5	22	大雨					梅雨前線。床下浸水534棟、船舶事故1件(沈没)。	大阪の気象百年						
昭和	38	1963	5	27	5	28	大雨					梅雨前線。床下浸水1124棟、通信回線不通3000回線。	大阪の気象百年						
昭和	38	1963	6	2	6	6	台風2号					床下浸水1448棟、山崩れ1ヶ所。	大阪の気象百年						
昭和	38	1963	6	13	6	14	台風3号					負傷1名、住家全半壊1棟。	大阪の気象百年						
昭和	38	1963	8	16	8	17	大雨					寒冷前線。床下浸水325棟。	大阪の気象百年						
昭和	38	1963	8	25			大雨					寒冷前線。大阪の1時間降水量41.0mm。大阪市、布施市などで大規模な停電。床上浸水86棟、床下浸水2698棟。	大阪の気象百年						
昭和	38	1963	8	30	8	31	大雨					日本海低気圧。電線切断により9万戸停電。船舶沈没2隻。	大阪の気象百年						
昭和	39	1964	6	19	6	20	大雨					梅雨前線、日本海低気圧。建物被害2棟、床下浸水79棟、がけ崩れ3ヶ所、通信施設被害6000回線。	大阪の気象百年						

開始日				終了日				大阪府				奈良県							
和暦	年	西暦	月	日	月	日	日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	
昭和	39	1964	6	25	6	27	大雨					梅雨前線。床上浸水3棟、床上浸水1760棟。 陸上・海上・航空交通混乱。床上浸水23棟。	大阪の気象百年						
昭和	39	1964	8	24			台風14号						大阪の気象百年						
昭和	39	1964	9	24	9	25	台風20号	19.0	31.7	41		負傷者17名、家屋全壊・流失104棟、半壊15棟、床上・床上浸水10563棟。	大阪府地域防災計画 関連資料集						
昭和	40	1965	5	26	5	27	台風6号					死者2名、負傷者2名、床上浸水182棟、床上浸水13134棟、がけ崩れ14ヶ所、通信施設被害4回線。	大阪の気象百年						
昭和	40	1965	6	19	6	21	大雨					梅雨前線。建物被害2棟、床上浸水79棟、がけ崩れ3ヶ所。	大阪の気象百年						
昭和	40	1965	9	9	9	11	台風23号					死者1名、負傷者24名、建物全壊15棟、半壊28棟、床上浸水230棟、床上浸水566棟、建物一部破損137棟、非住家被害414棟、鉄軌道被害5ヶ所、通信施設被害1487回線、船舶沈没1隻。	大阪の気象百年						奈良県の気象百年
昭和	40	1965	9	13	9	18	台風24号					死者3名、行方不明1人、負傷者16名、建物全壊13棟、半壊34棟、流失1棟、床上浸水436棟、床上浸水12009棟、建物一部破損165棟、非住家被害99棟、がけ崩れ194ヶ所、鉄軌道被害3ヶ所、通信施設被害1929回線、木材流失180m。	大阪の気象百年						奈良県の気象百年
昭和	40	1965	11	9			異常潮位					床上浸水270棟、国鉄桜島線一時不通。	大阪の気象百年						
昭和	41	1966	6	30	7	2	大雨					梅雨前線。床上浸水3600棟、床上浸水30000棟、非住家被害13棟、がけ崩れ43ヶ所、鉄軌道被害3ヶ所。	大阪の気象百年						奈良県の気象百年
昭和	41	1966	7	7	7	10	大雨					梅雨前線。道路浸水、堤防決壊、陸空の交通混乱。床上浸水3000棟、床上浸水4400棟。	大阪の気象百年						
昭和	41	1966	8	13	8	21	異常潮位					床上浸水、突堤水没、電車線路水没。	大阪の気象百年						
昭和	41	1966	9	16	9	19	大雨					南岸低気圧と前線。水田冠水、道路損壊、山くずれ発生。床上浸水22000棟。	大阪の気象百年						
昭和	42	1967	2	1			昭和42年鳥の瀬地すべり					柏原市清水谷地区で亀裂が発見され、同市峠地区の旧地すべり地もこの影響を受けて活動し始め、総面積50haにおよぶ大規模な地すべりに発展。大和川を越えた対岸の国道25号は約1m隆起し、大和川も250mにわたって川幅が約1m狭まり、河床も隆起。しかし、大和川の閉塞には至らず、雨も少なく、上流部の浸水という最悪の事態は免れた。							
昭和	42	1967	6	28	6	29	大雨					日本海低気圧と寒冷前線の通過。南海電車一時不通(落雷)。大阪市内床上浸水1600棟、東大阪床上浸水900棟。	大阪の気象百年						
昭和	42	1967	7	7	7	10	昭和42年7月豪雨	152				死者5名、不明者2名、負傷者170名、家屋全壊・流失62棟、半壊110棟、床上浸水16684棟、床上浸水119976棟。	大阪府地域防災計画 関連資料集						奈良県の気象百年
昭和	42	1967	7	12			大雨					梅雨前線。主として北摂地域に被害。床上浸水1400棟。	大阪の気象百年						
昭和	43	1968	7	2			7月豪雨	200				台風3号による梅雨前線の刺激。床上浸水1200棟、床上浸水24083棟。	大阪府地域防災計画 関連資料集						
昭和	43	1968	7	5	7	6	大雨					梅雨前線。道路損壊、堤防決壊、水田冠水発生。床上浸水1300棟。	大阪の気象百年						奈良県の気象百年
昭和	43	1968	7	15	7	16	大雨					主に県北部で被害が発生した。県内の主な被害は、負傷者1名、家屋半壊1棟、床上浸水55棟、床上浸水1155棟、非住家被害4棟、田冠水1935ha、畑冠水11ha、山・崖崩れ77ヶ所、道路損壊67ヶ所、河川損壊18ヶ所、橋梁損壊2ヶ所等によった。	奈良県の気象百年						奈良県の気象百年
昭和	43	1968	7	15	7	16	大雨					主に県北部で被害が発生した。県内の主な被害は、家屋全壊1棟、半壊1棟、床上浸水55棟、床上浸水1155棟、非住家被害4棟、田冠水444ha、畑冠水25ha、山・崖崩れ30ヶ所、道路損壊44ヶ所、河川損壊7ヶ所、橋梁損壊4ヶ所等であった。	奈良県の気象百年						奈良県の気象百年

開始日				終了日				大阪府				奈良県								
和暦	年	西暦	月	日	月	日	日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典		
昭和	43	1968	8	25	8	29	台風10号					がけ崩れ発生。床上浸水6棟。床下浸水6棟。	大阪の気象百年	奈良	奈良	8.2	14.2	799.0 十津川 662.0 玉置山 661.0 奈良 138.5	県全域で被害が発生した。県内の主な被害は、住宅一部破損1棟、非住家被害1棟、床上浸水55棟、道路損壊2ヶ所、橋梁流失1ヶ所、堤防決壊1ヶ所、山・崖崩れ19ヶ所等となっている。	奈良県の気象百年
昭和	44	1969	6	25	6	26	大雨					梅雨前線。建物破損2棟、床上浸水157棟、床下浸水9167棟、がけ崩れ13ヶ所。	大阪の気象百年	-	-	284.0 寺垣内 283.0 玉置山 277.0 奈良74.0	西日本付近の梅雨前線の活動が活発になって、奈良県でも大雨が降った。このため、県全域で床上浸水315棟、畑冠水259ha、道路損壊8ヶ所、堤防決壊4ヶ所、山・崖崩れ11ヶ所等の被害があった。	奈良県の気象百年		
昭和	44	1969	6	28	7	2	大雨					梅雨前線。負傷者1名、建物全壊1棟、半壊6棟、流失2棟、床上浸水186棟、床下浸水3898棟、建物一部破損2棟、非住家被害30棟、がけ崩れ41ヶ所、鉄軌道被害8ヶ所、船舶沈没2隻。	大阪の気象百年	-	-	小坪瀬 133.0 王寺 113.0 伯母子岳 105.0 奈良86.5	県北部で被害が発生した。県内の主な被害は、床上浸水58棟、床上浸水441棟、田冠水322ha、山・崖崩れ15ヶ所、道路損壊28ヶ所、河川損壊5ヶ所等となっている。	奈良県の気象百年		
昭和	44	1969	7	1	7	2	大雨						大阪の気象百年	-	-	小坪瀬 320.0 伯母子岳 226.0 玉置山 217.0 奈良72.0	県全域で大雨が降った。県内の主な被害は、死者1名(十津川村で落石による)、家屋一部破損1棟、床上浸水77棟、田冠水8ha、山・崖崩れ45ヶ所、道路損壊50ヶ所、鉄軌道被害1ヶ所等であった。	奈良県の気象百年		
昭和	44	1969	7	7	7	8	大雨					梅雨前線。がけ崩れ4ヶ所。	大阪の気象百年	-	-	伯母子岳 161.0 寺垣内 157.0 立里 156.0 奈良72.0	県全域が大雨となった。このため、山添村で林道崩壊により住宅が全壊して負傷者4名が出たのをはじめ、県内全域で家屋全壊3棟、一部損壊1棟、床上浸水12棟、田冠水23ha、山・崖崩れ13ヶ所、道路損壊6ヶ所、河川損壊5ヶ所等の被害があった。	奈良県の気象百年		
昭和	45	1970	6	25	6	26	大雨						大阪の気象百年	奈良	奈良	17.0	34.2	粟師平 557.0 日出岳 545.0 竹の平 538.0 奈良39.0	十津川村で飯場が倒壊して死者1名が出たのをはじめ、県全域で、家屋全壊1棟、半壊4棟、一部破損8棟、非住家被害30棟、道路損壊7ヶ所、山・崖崩れ9ヶ所、通信施設被害1810回線、また農作物被害や強風による果樹被害、倒木(奈良公園他)も発生した。	奈良県の気象百年
昭和	46	1971	8	28	9	1	台風23号					負傷者1名、がけ崩れ2ヶ所。	大阪の気象百年	-	-	-	-	-	-	
昭和	46	1971	9	2	9	5	異常潮位					大阪府此花区で下水道より海水が逆流し、浸水被害。国鉄嵯峨島線一時不通。	大阪の気象百年	-	-	-	-	-	-	
昭和	46	1971	9	5	9	7	豪雨					寒冷前線。府道数ヶ所不通、守口・枚方で床下浸水。死者2名、重軽傷者4名、建物全壊2棟。死者は落雷によるもの。	大阪の気象百年	-	-	-	-	-	-	
昭和	46	1971	9	26	9	27	台風29号					東大阪市、大東市、八尾市などに浸水被害。床上浸水52棟、床下浸水1153棟。	大阪の気象百年	奈良	奈良	9.8	15.8	洞川 217.0 風屋 206.0 曾爾 200.0 奈良86.0	大雨による被害は県全域に及んだが、特に大宇陀、東吉野、十津川の山間部に集中した。県内の主な被害は、死者3名、行方不明8名、負傷者4名、家屋全壊3棟、半壊2棟、流出1棟、床上浸水69棟、床上浸水1211棟、一部破損1棟、非住家損壊2棟、田冠水2ha、埋没2ha、田冠水47ha、畑流失・埋没1ha、畑冠水18ha、山・崖崩れ116ヶ所、道路損壊90ヶ所、堤防決壊17ヶ所、橋梁流失11ヶ所、鉄軌道被害2ヶ所等になった。	奈良県の気象百年
昭和	47	1972	6	7	6	9	大雨					日本海低気圧。大阪府大淀区、此花区、東淀川区で浸水被害。	大阪の気象百年	-	-	-	-	-	-	

和暦	開始日			終了日			気象概要	大阪府			奈良県						
	年	西暦	月	日	月	日		事象	出典	気象値			事象	出典			
										最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)					
昭和47	1972	7	3	7	13	7	昭和47年7月豪雨			300			西日本被害大。梅雨前線の活動。負傷者10名、家屋全壊・流出23棟、半壊42棟、床上浸水6186棟、床下浸水40346棟。	大阪府地域防災計画関連資料集	奈良県	奈良県の気象百年	
昭和47	1972	7	27				異常潮位						国鉄桜島線24本運転休止。	大阪の気象百年			
昭和47	1972	9	13	9	20	9	台風20号	118					死者3名、負傷者9名、家屋全壊・流出8棟、半壊90棟、床上浸水9283棟、床下浸水60146棟。	大阪府地域防災計画関連資料集	奈良	奈良県の気象百年	
昭和48	1973	5	1	5	2	5	大雨						日本海低気圧。床上浸水67棟、床下浸水2528棟。	大阪の気象百年			
昭和48	1973	7	14				豪雨										
昭和48	1973	10	13				大雨										
昭和49	1974	4	7	4	9	4	大雨						寒冷前線。床下浸水430棟。	大阪の気象百年			
昭和49	1974	6	21				大雨						前線停滞。阪和線一時不通。床下浸水390棟。	大阪の気象百年			
													二つ玉低気圧。大阪、守口、東大阪で浸水被害。床上浸水23棟、床下浸水666棟。	大阪の気象百年			
昭和49	1974	7	3	7	11	7	台風8号						貝塚市、泉佐野市で浸水被害。床下浸水10棟。	大阪の気象百年			
昭和49	1974	9	8	9	9	9	台風18号						梅雨前線。東大阪市で床下浸水200棟。	大阪の気象百年			
昭和50	1975	6	25				大雨										
昭和50	1975	7	3	7	4	7	7月豪雨						梅雨前線による大雨。床上浸水1933棟、床下浸水22493棟。	大阪府地域防災計画関連資料集	奈良	奈良県の気象百年	
昭和50	1975	8	6	8	7	8	大雨						寒冷前線。床上浸水135棟、床下浸水2479棟、がけ崩れ2ヶ所。	大阪の気象百年			
昭和50	1975	8	21	8	24	8	台風6号						負傷者2名、床上浸水182棟、床下浸水3777棟、非住家被害3棟、がけ崩れ2ヶ所、鉄軌道被害1ヶ所、通信施設被害1ヶ所。	大阪の気象百年			
昭和51	1976	6	8	6	11	6	大雨						梅雨前線。死者1名、床上浸水42棟、床下浸水2009棟、がけ崩れ9ヶ所、鉄軌道被害3ヶ所。	大阪の気象百年			
昭和51	1976	7	7				大雨						国鉄・地下鉄一時不通。大東市で停電2600戸、床下浸水770棟。	大阪の気象百年			
昭和51	1976	7	21				大雨						停電700戸。床上浸水9棟、床下浸水500棟。	大阪の気象百年			
昭和51	1976	7	26	7	28	7	大雨						停電で、国・私鉄及び地下鉄一時不通。大阪府北東部で降雹。死者1名、負傷者1名、床上浸水5棟、床下浸水1150棟。	大阪の気象百年			

開始日			終了日			大阪府			奈良県					
和暦	年	西暦	月	日	日	月	日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	
昭和	51	1976	9	8	9	17	台風17号					死者1名、建物全壊1棟、半壊1棟、床上浸水22棟、床上浸水3893棟、建物一部破壊5棟、がけ崩れ31ヶ所、鉄軌道被害3ヶ所。	死者1名、建物全壊1棟、半壊1棟、床上浸水22棟、床上浸水3893棟、建物一部破壊5棟、がけ崩れ31ヶ所、鉄軌道被害3ヶ所。	大阪の気象百年
昭和	52	1977	7	17			大雨					床上浸水6棟、床上浸水171棟。	大阪の気象百年	
昭和	52	1977	7	18			大雨					梅雨前線。行方不明1名、負傷者23名、床上浸水1棟、床上浸水536棟、がけ崩れ7ヶ所。	大阪の気象百年	
昭和	53	1978	7	10			大雨					国・私鉄のダイヤ乱れ、大阪の1時間降水量65mmは解説以来の記録。床上浸水827棟。	大阪の気象百年	
昭和	54	1979	5	7	5	8	豪雨					瀬戸内低気圧。床上浸水1688棟。	大阪の気象百年	
昭和	54	1979	5	26			大雨					日本海低気圧。停電1万戸、私鉄ダイヤ乱れ、大阪空港49便欠航。死者1名、負傷者1名。	大阪の気象百年	
昭和	54	1979	6	26	7	2	6月豪雨	497				梅雨前線による大雨。家屋全壊・流出3棟、半壊1棟、床上浸水1336棟、床上浸水22865棟。	大阪府地域防災計画 関連資料集	
昭和	54	1979	9	26			大雨					前線。床上浸水7202棟。	大阪の気象百年	
昭和	54	1979	9	30	10	1	台風16号	149				死者1名、負傷者5名、家屋半壊19世帯、床上浸水5088棟、床上浸水41489棟。	大阪府地域防災計画 関連資料集	
昭和	54	1979	10	14	10	20	台風20号					陸海空の交通混乱。公立学校、幼稚園では19日臨時休校。	大阪の気象百年	
昭和	55	1980	2	1			強風					冬型。泉大津市沖で砕石運搬船転覆して死者3名。	大阪の気象百年	
昭和	55	1980	6	1	6	3	豪雨					南海高野線一時不通、大阪市淀川区と堺市で降雹、大きなもの直径3cm。床上浸水27棟、床上浸水624棟、がけ崩れ1ヶ所。	大阪の気象百年	
昭和	55	1980	7	6	7	12	大雨					長く雨が降り続いた。このため、県全域で非住家損壊2棟、道路損壊80ヶ所、河川損壊27ヶ所等の被害があった。	奈良県の気象百年	
昭和	55	1980	8	31			大雨					前線。道路冠水2ヶ所。床上浸水4棟、床上浸水377棟。	大阪の気象百年	
昭和	56	1981	7	29	8	1	台風10号					この台風の影響を受けて、主に南東山岳部で大雨(背降り)が降った。このため、上北山村、下北山村等で山・崖崩れ8ヶ所、道路損壊6ヶ所、河川損壊1ヶ所等の被害があった。	奈良県の気象百年	
昭和	56	1981	10	7	10	9	大雨					県内の主な被害は、床上浸水141棟、田畑冠水100ha、山・崖崩れ8ヶ所、道路損壊30ヶ所、河川損壊2ヶ所、橋梁損壊2ヶ所等となっている。	奈良県の気象百年	

開始日				終了日				大阪府				奈良県										
和暦	年	西暦	月	日	月	日	日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典				
昭和	57	1982	8	1	8	3	台風10号	13.4	209			台風とその後の低気圧による大雨。死者8名、負傷者4名、家屋全壊・流出70世帯、半壊一部破損含み99世帯、床上浸水10610棟、床下浸水63460棟。	大阪府地域防災計画 関連資料集	奈良	奈良	奈良	奈良	大雨に続く大雨で地盤が緩み、県全域で被害が拡大した。県内の主な被害は、死者10名、負傷者12名、家屋全壊24棟、半壊・一部破損34棟、床上浸水5573棟、床下浸水5084棟、耕地流失・埋没10.4ha、耕地冠水894ha、道路損壊88ヶ所、橋梁損壊5ヶ所、鉄軌道被害15ヶ所、山・崖崩れ528ヶ所、堤防決壊2ヶ所、通信施設被害942回線、木材流出18mに及んだ。	奈良県の気象百年			
昭和	60	1985	6	18	7	6	台風6号					長期間にわたって大雨が降った。県内の主な被害は、家屋全壊2棟、半壊・一部破損2棟、床上浸水24棟、田畑冠水44ha、道路損壊3ヶ所、山・崖崩れ24ヶ所等があった。		奈良	奈良	奈良	奈良	奈良	奈良県の気象百年			
平成	2	1990	9	16	9	20	台風19号					県南東部を中心に大雨となった。このため、吉野川支流や十津川が増水して、家屋浸水等の被害が発生した。県内の主な被害は、家屋半壊・破損5棟、床上浸水46棟、床下浸水105棟、山・崖崩れ6ヶ所、堤防決壊2ヶ所等があった。		奈良	奈良	奈良	奈良	奈良	奈良県の気象百年			
平成	3	1991	7	27			大雨					大宇陀町、菟田野町、榛原町等で落雷や大雨による被害が発生した。県内の主な被害は、負傷者1名、家屋半壊1棟、床上浸水4棟、床下浸水45棟、河川損壊71ヶ所、道路損壊63ヶ所等となっている。		-	奈良	奈良	奈良	奈良	奈良県の気象百年			
平成	4	1992	8	11			大雨					県北部を中心に雷を伴い激しい雨が降った。このため、県北部、特に桜井市を中心に、床上浸水11棟、床下浸水927棟等の被害があった。また、桜井市で線路が冠水し、電車が一時不通となった。		-	奈良	奈良	奈良	奈良	奈良県の気象百年			
平成	4	1992	8	24			大雨					県北部を中心に激しい雷雨となった。このため、特に、王寺町、平群町、榛原町等の県北部で、床上浸水5棟、床下浸水282棟、道路損壊1ヶ所等の被害があった。また、落雷により、斑鳩町、王寺町、奈良市で約1900戸が停電した。		-	奈良	奈良	奈良	奈良	奈良県の気象百年			
平成	5	1993	6	28	7	8	大雨					県全域で大雨が降った。県内の主な被害は、家屋半壊1棟、床下浸水61棟、道路損壊3ヶ所、山・崖崩れ10ヶ所等となっている。		-	奈良	奈良	奈良	奈良	奈良県の気象百年			
平成	6	1994	9	6	9	7	9月豪雨					負傷者3名、家屋半壊1世帯、床上浸水1428棟、床下浸水4375棟。	大阪府地域防災計画 関連資料集	-	-	-	-	-	-			
平成	6	1994	9	28	9	30	台風26号					大雨と強風により県全域で、負傷者1名、家屋全壊2棟、破損31棟、床上浸水18棟、床下浸水95棟、橋梁流失1ヶ所、道路損壊161ヶ所、山・崖崩れ9ヶ所等の被害があった。		奈良	奈良	奈良	奈良	奈良	奈良県の気象百年			
平成	7	1995	7	3	7	6	大雨	101				特に、3日から4日にかけて県全域で短時間に激しい雨が降った。県内の主な被害は、家屋の半壊2棟、一部損壊4棟、床上浸水229棟、床下浸水1650棟、道路損壊7ヶ所、山・崖崩れ22ヶ所、橋梁流失1ヶ所等の上った。	河川整備基本方針 (大和川水系)	奈良	奈良	奈良	奈良	奈良	奈良	奈良	奈良	奈良県の気象百年



開始日				大阪府				奈良県								
和暦	年	西暦	月	日	終了日	気象概要	気象値			出典	事象	気象値			出典	
							最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)			最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)		
平成	10	1998	9	22		台風7号						大字 16.0 奈良 13.1 五條 13.0	風屋151 上北山 145 玉置山 138	死者2人、負傷者87人、非住家被害1803棟、住家全壊52棟、住家一部損壊9979棟、床上浸水1棟、床下浸水36棟、道路損壊68ヶ所、橋梁流失3ヶ所、山・崖崩れ77ヶ所。	奈良県地域防災計画	
平成	11	1999	8	9	8	豪雨	133					奈良 149.5 針134 大宇陀 123	奈良県を中心に雷を伴う短時間強雨となった。県北部で、床上浸水12棟・床下浸水52棟・山がけ崩れ2ヶ所・鉄軌道被害1ヶ所・通行止め11路線13区間等の被害があった。	奈良県地域防災計画		
平成	12	2000	7	4		集中豪雨						針80 上北山43 奈良42.5	県北部を中心に雷・ひょうを伴う短時間強雨となり、奈良地方気象台で日最大1時間降水量37mmを観測した。奈良県北部で、床上浸水188棟、床下浸水1212棟、道路損壊29ヶ所、河川損壊20ヶ所、山がけ崩れ3ヶ所、鉄道不通1ヶ所、電話不通2900世帯、建物被害2ヶ所、橋梁損壊1ヶ所、田冠水6.5ha、畑冠水2haの被害があった。	奈良県地域防災計画		
平成	12	2000	9	11	9	東海豪雨										
平成	19	2007	7	16		豪雨	90									

①中央気象台(1900-2002)「気象要覧」

②国立天文台編(2011)「理科年表 平成24年」丸善出版

※期間、気象値などは①、②の資料も参照した。

土地分類基本調査（土地履歴調査）  
説明書

**大阪東南部**

平成25年3月

国土交通省国土政策局国土情報課

土地分類基本調査（土地履歴調査）の成果は、国土交通省  
ホームページからご利用いただけます。